

靈界物語 第一卷 靈主體從 戌の卷

出口王仁三郎

凡例

【】……底本で傍點が振られている文字列

(例) 【ヒ】は火なり

「ス」を現す記號(丸にホチ)は「」に置き換えた。その他、文字コード(ユニコード)に無い文字は「ニ」に置き換えた。

底本

『靈界物語 第十一卷』愛善世界社

1995(平成07)年02月03日 第一刷發行

底本をもとに若干の編纂を加えてある。詳細は次のウェブサイト内に掲載してある。

『王仁三郎ドット・ジエイピー』(オニド)

<http://onido.onisavulo.jp/>

現代では差別的表現と見なされる箇所もあるが修正はせず底本通りにした。

圖表などのレイアウトは完全に再現できるわけではないので適宜變更した。
編纂・データ作成：飯塚弘明（オニド主宰）

2009年11月20日修正

〵〵〵〵〵〵〵〵〵〵

目次

ことたまかへし
言靈反

はんれい
凡例

あほふどり
信天翁（二）

そうせつか
總説歌

第一篇 長驅進撃
ちやつくしんげき

第一章 クス野ヶ原のがはら〔四六八〕

第二章 一目お化ひとつめ ばけ〔四六九〕

第三章 死生觀しせいくわん〔四七〇〕

第四章 梅の花うめ はな〔四七一〕

第五章 大風呂敷おほぶろしき〔四七二〕

第六章 奇の都くす みやこ〔四七三〕

第七章 露の宿つゆ やど〔四七四〕

第二篇 意氣揚々いき やうやう

第八章 明志丸あかしまる〔四七五〕

第九章 虎猫とらねこ〔四七六〕

第一〇章 立聞たちぎき〔四七七〕

第十一章 表教おもてけう〔四七八〕

第一二章 松と梅〔四七九〕

第一三章 轉腹〔四八〇〕

第一四章 鏡丸〔四八一〕

第三篇 言靈解

第一五章 大氣津姫の段〔四八二〕

第一六章 大氣津姫の段〔四八三〕

第一七章 大氣津姫の段〔四八四〕

第四篇 滿目荒寥

第一八章 琵琶の湖〔四八五〕

第一九章 汐干丸〔四八六〕

第二〇章 醜しこの窟しはや〔四八七〕

第二一章 俄改心にはかかいしん〔四八八〕

第二二章 征矢そやの雨あめ〔四八九〕

第二三章 保食神うけもちのかみ〔四九〇〕

第五篇 乾坤けんこんせいめい清明

第二四章 顯國宮うつしくにのみや〔四九一〕

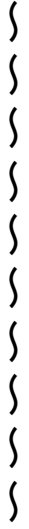
第二五章 巫みかんのこの舞まひ〔四九二〕

第二六章 橘たちばなの舞まひ〔四九三〕

第二七章 太玉松ふとたままつ〔四九四〕

第二八章 二夫婦ふたふうふ〔四九五〕

第二九章 千秋樂せんしゅうらく〔四九六〕



王仁

靈界物語第七卷の總説に於て、

「教祖は明治二十五年より大正五年まで、前後二十五年間未顯眞實の境遇にありて神務に奉仕し、神政成就の基本的神業の先驅を勤められたのである。女子の入道は明治三十一年であるが、未顯眞實の神業は同三十三年まで全二ヶ年間で、その後には顯眞實の神業である。靈的に云ふならば、教祖よりも十八年魁けて顯眞實の境域に進んで居たのは、お筆先の直筆を熟讀さるれば判りませう」

と誌したのを見て、大變に不平を竝べられ、且つ變性女子は教祖よりも自己の方が先輩だ、觀察力がエライ、顯眞實の境に早く達して居ると謂つて、教祖の教を根底より覆へし、自己本位をたて貫かうとする野心の發露だと、随分矢釜敷議論があるさうですが、顯幽一體、經緯不二の眞相が判らないと、そんな約らぬ事を

云はねばならなくなるのです。克く考へて御覽なさい。教祖様は經絲の御役、女子は緯絲の御用と示されてあります。經言は一々萬々確固不易の神示であり、緯絲は操縱與奪、其權有我の神業に奉仕せなくてはなりません。教祖が經絲の御用でありながら、時機の至らざるため止むを得ず、やはり操縱與奪其權有我的の神業に奉仕されなくてはならない地位に立ち、是非なく未顯眞實の筆先を表はして役員信者を戒められた意味であつて、教祖御自身に於て神意を悟り玉はなかつたといふのではない。第七卷の總説を熟讀されよ。

「十八年間未顯眞實の「境遇」にあつて神業に奉仕し」とある文句を、境遇の二字に克く眼を着けて考へれば判然するでせう。

また女子は三十三年から顯眞實の神業に奉仕し、靈的に云ふならば、十八年魁けて顯眞實の境域に進んで居ると云ふ事を誤解し、大變に氣にして居る方々が所々にあるやうですが、是も男子女子經絲緯絲の相互的關係が明かになつて居ないからの誤解である。變性女子としては教祖の經絲に従つて、神界經綸の神機を織上ねばならぬ御用である。併し乍ら明治三十一年初めて歸神となり、一々萬々確固

不易ふえきてきの神業しんげふに参加さんかしつつ、同三十三どうさんじふさんねん年に至いたるまで我神定わがしんていの本務ほんむに非あらざる經絲たていとてき的てき神務しんむに奉仕ほうしして、女子によしの眞實しんじつなる神業しんげふを顯あらはし得えざる境遇きやうぐうにありし事ことを、二年にねんかん間かん未顯眞實みけんしんじつの神業しんげふであつたと謂いつたのであります。

いよいよ明治めいぢ三十三年さんじふさんねんいちごわつ一月いちごわつより出口家でぐちけの養子やうしとなり、教祖けうその經絲たていとに對たいし私わたくしは緯よこ絲いとの神業しんげふに奉仕ほうししたと謂いふのである。然しかるに神界しんかいの事ことは極きはめて複雑ふくざつにして、男子なんし女子によし相並あひならびたりとて、教祖けうそとして直ただちに經絲たていとのみの御用ごようを遊あそばす譯わけには行ゆかない。經緯たてよこりやうめん兩面りうめんに涉わたりて筆先ふでさきの御用ごようを遊あそばしたのは、時ときの勢止いきほひやむを得えなかつたのであります。女子によしは元もとより緯絲よこいとの御用ごようのみなれば、「緯役よこやくとして」の顯眞實けんしんじつの御用ごようは自然ぜんに勤つとまつたのである。

然しかるに大正たいしやう五年ごねん九月くわつに至いたつて、教祖けうそも從前じうぜんの經緯たてよこりやうめん兩面りうめんの神業しんげふを奉仕遊ほうしあそばす必要ひつえう無なきまでに神業しんげふ發展はつてんせられたるを以もつて、いよいよ男子なんし緯絲たていとの役やくとしての眞實しんじつを顯あらはし玉たまふ事ことを得えられたのであります。それよりは經絲たていとは經絲たていと、緯絲よこいとは緯絲よこいとと判然はんぜん區劃くわくが付つくやうになつて來きたのであります。是これでも未いまだ疑念ぎねんの晴はれない方々かたがたは、第七卷だいしちくわんの總說そうせつを幾回いくわいも反讀はんどくして下ください。

また神諭の文中に、

「緯はサトクが落ちたり、絲が断れたり色々致すぞよ」

と示されあるを誤解して居る人が多いらしい。サトクが落ちると云ふのは決して失敗の意味でない。千變萬化に身魂を使用して神業に奉仕せなくては成らぬから、俗人の耳目には毫も見當のとれ難い、神的大活動、大苦心の意を示されたものである。また途中に絲が断れたり云ふ意味は、到底三千世界一貫の大神業なれば單調的に行くものでない。また錦の機は幾度も色絲を取替へねば立派な模様は織上らぬものである。色絲を取替へるのは即ち絲が断れるのである。サトクも一本や二本や三本では錦の機は織れぬ。甲のサトクを落して乙のサトクを拾ひ上げ、また乙のサトクを落して丙のサトク、丙を落して丁戊己と交るがはるサトクと絲を取替へると云ふ深き神意の表示である。

要するに變性男子は經の御役なれども、あまり世界が曇つて居たために、大正五年までは男子としての顯眞實の神業に奉仕し玉ふ時機が來なかつたと云ふことである。女子は女子として明治三十三年より奉仕する事を得る地位におかれて、

夫れ相應の神業に従事して居たと云ふだけである。

然し乍ら、大正五年九月以後の教祖の單純なる經絲の御用に連れて、女子もまた緯絲として層一層女子の神業が判然として來たのは、いはゆる經緯不二の神理である。未顯眞實顯眞實云々の問題も是で大略判るであります。

靈界物語も素より大本とか神道とか謂つたやうな、小天地に齷齪して居るのではない。眞理の太陽を心天高く輝かせ、宇宙の外に立つて、少しも偏せず、神示のままを口述するのである以上は、殿堂や經文などを脱し、自由自在の境地に立つて如何なる法難をも甘受し、少數信徒の反感をも意に介せず、自己自身の體驗と神示に由つて忌憚なく述べたままである。

凡例

一、本卷に收められた言靈解「大氣津姫の段」は大正十年二月號の「神靈界」誌

上に、『皇典と現代』と題して掲載されたものに多少添削を加へたものであります。

一、第七巻の總説が發表されますと、かなり方々にいろいろさまざまな批評や反對が起りましたが、それに對して瑞月大先生の詳細なる御解釋を得ましたから、一日もすみやかに讀者へお知らせすべきものと信じますので、特に『言靈反』と題して本巻の巻頭に掲げておきました。

一、靈界物語の編輯上にいろいろと不備な點が少からずありますが、せいぜい努力して讀者の意に副ふものにしたと思つてゐます。第一巻以來既刊の分の正誤表は何れ或る機會を見て、纏めたいと思つています。

大正十一年八月

著者識

信天翁 (二)

天地の元の大神を

齋き祭りし五六七殿

綾の聖場と畏みて

日毎夜毎に身を清め

心を清め大神の

仁慈無限の神諭を

拜聴せむと来て見れば

教の場の一隅に

思ひも寄らぬ怪しからぬ

不都合なことがやつてある

本宮山の神殿の

毀れたあとの材料で

廢物利用か知らねども

假設劇場常置して

野卑な楽器と人の曰ふ

三筋の絲をピンピンと

遊藝氣分で曳き付ける

曳き付けられてワアワアと

腮紐ほどく老若の

顔はまだしも古代冠

頭に載せていかめしく

數多の人を見降して

節面白く婆娘

皺枯れ聲や黄な聲で

汗をたらたら蚊に刺され

上手だ下手だと口々に

社會奉仕の口八仕事

勤める馬鹿の氣が知れぬ

それでも一寸聞いて見りや マンザラ捨てたものでない

平素の夫の不始末や 女房としての盡す道

敬神尊皇愛國の 教の道が徹底すと

うまい言譯拵へて 一夜も缺かさず家の嬪

變性女子のうさ言に 魂を抜かれて肝腎の

大事の夫を輕蔑し 鼻息荒く成る計り

こんな事をば平素より 壓迫して來た女房に

聞かして呉れるものだから 女權は日に日に擴大し

家内に却つて紛亂の 五月蠅の種を蒔き散らし

今まで柔順なりし妻 この頃權幕荒くなり

一々夫を手古摺らせ 二進も三進も手に合はぬ

惡の寫つた緯役が ほざいた靈界物語

泰の始皇ぢやなければ 成る事なれば一冊も

残らず灰にして欲しい 三千世界の大馬鹿の

寝ものがたり
寝物語に夢うつつ
是では夫も堪らない

世間の女房に比ぶれば
概して賢い女房も

インフルエンザの風のやうに
頭の先から足の裏

さつぱり傳染して仕舞ひ
百度以上の逆上方

水をばさして五六七殿
節を付けたり三味線で

信者を酔はす醜業を
止めてやらねば置かないと

捻鉢巻の人がある
必ず心配遊ばすな

良妻賢母にしてあげる
何程火になり蛇になり

火ツ火になつて焦慮つとも
頭の上からザブザブと

冷してかかる「みづ」御魂
どうせ阿房のする仕事

神の使のさにはまで
爲さる賢いおん方の

お氣に入りそな事はない
ア、惟神々々

御靈幸ひましますよ
朝日は照るとも曇るとも

月は盈つとも虧くるとも
たとへ大地は沈むとも

なにほど水をさそうとも 大馬鹿者と譏るとも

四足身魂が騒ぐとも 體主靈従と曰はれたる

大化物の瑞月は 金輪奈落の底までも

決して初心は變じない 神が表に現はれて

善と悪とを立別ける 神に任した瑞月は

たとへ靈界物語 「あく」と言はりよが構やせぬ

只何事も人の身は 神の教に任すのみ

阿房と阿房の集まつた この世の中にエライ人

一人も有りそな事はない 至聖大賢紳士ぞと

威張つたとところで天地の 元を造りし大神の

嚴の御眼に見たまへば 盲聾の娑婆世界

愚圖々々言はずに皆の方 よく味はつて聞くが好い

輕口きくにも金が要る 口八で尊き神界の

先人未發の物語 いやなお方はドシドシと

去いんで下くだされ頼たのみます
憑ついた狸たぬきを去いなす様やうに
エいラソに吐ぬかすと思おもはずに
この世よを造つくりし大神おほかみの
廣ひろき心こころに聞きき直なほし
我わが言こと靈たまの過あやまちを
直なほ日ひに見み直なほせ宣のり直なほせ
樂がく屋や一いち同どうを代だい表へうして
愚ぐ癡ちをだらだら述のべておく
ア、惟かむ神ながら々かむ々ながら
叶かなはん時ときの神かみ頼たのみ
かなはぬからたまちはへませ
かなはぬならたちかへりませ

大正十一年七月十四日

出口王仁三郎

ひさかた 久方の天津御空の八重雲を 伊都の千別きに搔別けて

あも 天降りましたる 諾册の 神の命の二柱

とよあしはら 豊葦原の瑞穂國 造りなさむと千萬に

こころ 心つくしの立花の 天教山の阿波岐原に現れまして

やひろ 八尋の殿を見たてまし 月日も清く澄渡る

みろく 五六七の御代を建てむとて 大海原に漂へる

くに 國の司と豊國の 姫の命の瑞御魂

かむすさのを 神素盞鳴の神を生み 百の神人平けく

をさ 治めしめむとし給ひし 大御心も潮沫の

こおろこおろにかき亂れ 山の尾の上や川の瀬に

やそ 八十の曲津のさやりゐて 山川どよみ國土も

よろづ 萬の物も皆騒ぎ 常夜の暗となり響く

とよくにひめ 豊國姫と現れませる 國大立の大神は

かむすさのを 神素盞鳴と現はれて 月照彦や大足彦

すくなひこかみひろやす
少名彦神弘子の
彦の命を國々に

まも
守りの神と言よさし
天津誠のあななひの

をしへ
教を開き給へども
曲のみたまの猛くして

あだる
天足の彦や胞場姫の
汚れ果てたる分靈

すゑ
末つみたまの鬼大蛇
醜女探女や曲神と

なりてこの世を亂しける
神素盞鳴の大神は

かむいざなぎ
神伊奘諾の大神の
依さしのままに生魂

よも
四方に配らせ給へども
隙行く駒の荒れ狂ひ

あやめ
黑白も分かぬ暗の世の
黄泉の島の戦ひは

かみ
神の稜威に屈ぎつれど
あちらこちらに散りはてし

やまた
八岐の大蛇や曲鬼や
醜の狐の醜魂は

あなど
侮り難き勢の
八洲の國を搔亂す

かきはときは
堅磐常盤の神の世を
經と緯との二柱

あら
現はれまして野立彦
野立の姫の御心を

配くばらせ給たまひて麻あな柱なひの道みちを開ひらかせ天地あめつちに

塞ふさがる醜しこの村むら雲くもを伊い吹ぶ拂きはひに拂ははむと

神かみの御み鼻はなになりませる神かむ素す盞さ鳴の大神おほかみは

天てん教けう地ち教けうの神かみの山やま黄わう金こん山ざんや萬まん壽じゆ山ざん

靈れい鷲しう山ざんに集あつまりし神かみの司つかさに言こと依よさし

大おほ海うな原ばらに漂ただよへる八やし洲しまの國くにを開ひらかむと

青あを雲くも別わけの宣せん傳でん使し白しら雲くも別わけや三みつ葉ば彦ひこ

東し雲の別めわけや久ひさ方かたの彦ひこの命みことを遣つかはして

神かみの稜みいづ威たかも高か彦ひこの天あめ兒の屋こ根やの神かむ司つかさ

天あま津つ祝の詞りの神かみ言ごとに醜しこの雲くも霧きり拂はひ行ゆく

あゝ勇いさましき神かみの業わざ神かみの御み業わざの物もの語がたり

十と餘をり一ひとつまきの卷まきの初はじめに高たか天あま原はらの神かみ々がみの

奇くしき貴たふとき活は動たらを三さん五ごの月つきの面おも清きよく

説とき明あかすこそ目め出で度たけれ。

第一篇 長驅進撃ちやつくしんげき

第一章 クス野ヶ原のがはら（四六八）

天あまの原はら澄すみきり渡わたる青雲あをくもの別わけの命みことの宣傳使せんでんし

名なも高彦たかひこと改あらためて岩戸いはとの前まへにいさをしを

いや永遠とこしへに建たてましし天兒あめのこやね屋根かむつかさの神司

ウラルの山やまやアアメニヤ醜しこの本據ほんきよと立籠たてこもる

ウラルの彦ひこやウラル姫ひめ八十やその曲津まがつを言向ことむけて

豊葦原とよあしはらの瑞穂國みづほくに隈くまなく澄すまし照てらさむと

黄金山わうこんざんを立出たちいでて天あまの眞名井まなみを打渡うちわたり

波なみにさらはれ雨あめに濡ぬれ吹ふきくる風かぜに梳くしげづり

山川幾つ打越えて
神の稜威もアルタイの
山より落つる宇智野川
渡りてここにクス野原
一望千里の草の野に
月日を重ねて進み来る。

目も届かぬ限りの薄野を分けて、ことさら寒き木枯に吹かれながら、疲れし足を「とぼ」とぼと、虎狼のうそぶく聲を目あてに、宣傳歌を歌ひながら進み行く。日は黄昏に近づきて、夜氣陰々と身に迫る。百鳥の聲もピタリと止んで、猛き獸の聲は刻々に高く聞え來たりぬ。

高彦の宣傳使は、一夜をここに明かさむと枯野ヶ原を衾とし、顔に笠を蓋ひ蓑を被つて睡むうち、何處ともなく胸騒ぎがして來た。フト目を開けば、見上ぐるばかりの大怪物、額の中央に鏡の如き一つ目を光らし、鼻は神樂獅子の如く、口は耳まで裂け、青藍色の面をして、高彦を睨みつけた。

高彦は仰臥せしまま默然として一つ目の怪物を目も放たず見つめてゐた。怪物は毛だらけの眞黒な手を差し伸べて、高彦の胸を一掴みにせむと迫り来る。

高彦は心靜かに宣傳歌を唱へた。怪物は怪しき聲を出して、前後左右にキリキリ舞ひを始めた。高彦は益々宣傳歌を高唱する。怪物は次第々々にその容積を減じ、終には白き煙の如き玉となつて次第々々に消え失せた。中空を眺むれば、怪しき黒影魚鱗の淡雲を分けて昇り行く。

高彦「あゝウラル山の鬼奴が、折角疲れを休めて好い鹽梅に眠つてゐたのに、安眠の妨害を致しよつた。このクスの野は油斷のできない所だと聞いてゐた。ヤア、もう少し夜が明けるのに間もあるから、モウ一と寝入りしてから行くこととしよう」

と又もやコロリと横たはり、後は白河夜船、鼾聲雷の如く四邊を響かしてゐる。この時、何者ともなく高彦の身體を目がけて、杖をもつて力限りに打つものがある。高彦は驚いてスツクと立上り、

「無禮者ツ」

と一喝したるに、一人の大男は、

「バ、バ、バ、化物奴が、馬鹿にするな。その手は食はぬぞ。俺を【どなた】と思う

て居るか、恐れ多くも、鐵谷村の酋長鐵彦が門番、今こそ少し年はとつたれ、これでも若い時は小相撲の一つもとつた近所界限に名の通つた時公さんだぞ。何だツ、最前も一つ目の化物となつて、大きな無恰好な口を開きやがつて、青い面してこの方さまを喝かしよつたが、この時さまの宣傳歌の言靈によつて、雲を霞と逃げたそのザマは何だ。今度は手品を變へやがつて、石凝姥の宣傳使の眞似をさらして、こんな所に横たはつて屍をかいてゐやがるんだ。もう承知せん。貴様はアルタイ山の蛇掴みの子分だらう。親分の蛇掴みでさへも、時公さまの御威勢に恐れ、青白い光となつてザマの悪い禪を垂らしやがつて、アーメニヤとかいふ國へ逃げ歸りやがつた位だ。サア、目を剥け、舌を出せ、そんな事でビツクリするやうな時さまとは違ふぞ。あまり見損なひをすな」

高彦「ヤア、時さまとやら、我々は化物ではありませぬ」

時公は一寸舌を出し、頤を「しやく」つて、

「ヤア、時さまとやら、我々は化物ではありませぬ。……とケツかるワイ。その手は桑名の焼蛤だ。グツグツぬかすと、この杖がお見舞ひ申すぞ。目の玉奴が」

高彦「これはこれは化物とお見違ひ、決して決して左様の者ではござらぬ。我々も今その一つ目小僧に出會つたところだ。せつかく安眠してをるのに、中途で起され、眠たくて目の工合が……」

時公「オツト……御免だ。目の話は止めた止めた。こつちも一寸【めい】わくだから……」

「何分眠りが足らぬものだから、熱が出て舌が【もつれ】……」

「オイオイ、その舌はもう言ふな。俺もあの舌にはギョツと【した】」

「何分長途の旅で疲れたものだから、お前さんが見たら人間らしくもなからうが……」

「……わしの顔は蒼白く見えるだらう。それでお前が疑ふのは……」

「疑ふも疑はぬもあつたものかい。顔の蒼い白いは言ふな。貴様は大方蛇摺の兄弟分だらう。今は一體何といふ名だ」

「我は東彦と申す者」

時公「ザマ見やがれ。白状しよつた。アクマ彦奴が。蛙は我と我が口から白状したが、もうアクマと知つた以上は、俺は善にも強ければ悪にも強い時さまだ。」

「あくま」で打ちこらしてやる。俺の顔を冥途の土産に穴の「あくま」で見
ておけ。根の國底の國へ行つてもこの時さんのやうな強いお方は滅多にありやせぬぞ
と言ひながら、携へた鐵棒をもつて打つてかかる。東彦は笠をもつて、その棒を
右に左に避け乍ら、時公の足を「さらへ」た。時公はズデンドーと仰向けに倒れ
た。東彦は、

「ウン」

と一聲靈縛をかけたるに時公は、

「オイ、目の玉、アクマ彦、何うしよるのだ。貴様わりとは惡戯けた事をしよる。
身體はアルタイ山の鬼の化石のやうになつちやつたが、目と口と耳とは「しつか
り」してをるぞ。貴様は一つ目だ。俺は二つ目だ。睨み殺してやらうか」
東彦「アハ、ハ、ハ、やあ、時さまとやら、私を信じて下さい。私も「つい」最前
のこと、その一つ目小僧に出會つたのだ。が、お前さんも途中で出會つて來たの
か」

時公は俄に調子をかへて、

「ハイハイ、一目見るよりビツクリ仰天せむとせしが、待て暫し、アルタイ山の蛇掴みでさへも、この時さまの鼻息で吹き散らしたのだ。何だ、一つ目の化物位と思ひ直してここまでやつて来たが、何だか膝頭が「こそば」くて、笑うたり泣いたりしやがつて、時さんは怒る、膝坊主は泣き笑ひする。酒も飲まぬに、一人で三人上戸を勤めて来ました。私の主人は鐵彦というて、それはそれは餘り偉くない豪傑ですが、三五教の宣傳使の「あななひ」をしてな、アナ有り難いとか何とか言つて石凝姥の宣傳使と、何でも名は忘れたがスイスイ、粹な名のつく別嬪の宣傳使と三人連れで、クスの原を向ふへ渡ると言つて出かけました。さうしたところが俄に奥さまが、病氣になつたものだから、オイ時公、お前は天下無雙の豪傑だ、一つ目小僧の百匹や千匹はビクともようせぬ奴だから、御苦勞だが主人を呼んで来てくれと、奥様が手毬のやうな涙を、こぼして頼むものだから、ヨシきた、たとへウラル彦の軍勢、幾萬來るとも、この時さまが腕力をもつて、縦横無盡に打つて打つて打ちまはし、木端微塵に碎いてやるは瞬くうちと尻ひつからげ、クスの荒野を韋駄天走り、生かじりの宣傳歌を、處々歌つて足拍子をとり乍

らやつて来たところ、向ふに怪しき影がある。ハ―テ訝しやな、この荒野ヶ原に現れ出づる怪物は何者なるぞ、尋常に名を名乗れとやつて見せたり、と思つたが何だか、向ふの舌が長うて【こつち】の舌が捲かれたか、負たか知らないが、こわばつて一寸も時さまの言ふ事を聞きやがらぬので、今度は目の御用だと、クル鏡の如き兩眼を開いて見せた。流石一つ目の怪物も、時さんの勇氣に辟易し、禪下げて西南の天を指して逃げ散つたり」

東彦「アハ、アハ、面白奴だな」

時公「面白いか知らぬが、私は【ねつから】面白くない。かう横に立つて物語をしても、【ねつから】ハバがきかぬ。お前さまも私の傍へ来て、横に立つてつたら何うだ。ゆつくり寝物語でもしようかいな」

「アハ、アハ、どこまでも、徹底した法螺吹きだな。負け惜しみの強い奴だ。そんなら私もお前の傍で、夜が明けるまで添寝をしてやらうか。これだから悪戯小僧を持つ親は困るといふのだ。やあドッコイシヨ」

と、時公と枕を並べて、ゴロンと寝た。

時公ときこう「やあ、アクマ彦ひこも【なか】なか話はなせるワイ。しかし、お氣きの毒どくだが、お時ときさまだと好よいけれど、時公ときこうさまではお氣きに召めしますまい。それでも何なんだか【トキ】トキとしますよ」

東彦あづまひこ「ア、私も退屈たいくつで困こまつてみたところだ。靈界れいかい物語ものがたりぢやないが、一つひとつここで【しつぱり】と仰あふむ向けになつて、寢物ねもの語りでもやらうかい」

東雲しのめの空別そらわけ昇のぼる朝日あさひ子の、東彦あづまひこの宣傳使せんでんしはムツクリと起上おきあがり、時公ときこうの靈縛れいばくを解とき、二人ふたりは途々みちみち神話しんわに耽ふけりながら、際限さいげんも無なき大野原おほのはらを西にしへ西にしへと進すすみ行ゆく。

（大正一一・二・二八 舊二・二 櫻井重雄録）

第二章 一目お化ひとつめばばけ（四六九）

東彦あづまひこの神かみの宣傳使せんでんしは時公ときこうを伴ともなひ、果はてしもなきクス野ヶ原のがはらを進すすみつつ宣傳歌せんでんかを歌うたひ行ゆく。

三五教あななひけつの宣傳使せんでんし 天津御神あまつみかみの神言かみごとに

八十やその曲津まがつの許々ここ多久たくの 醜女しこめ探女さぐめを言向ことむけて

百八十ももやそがみ神や八十やそびと人を 神かみの誠まことの大道おほみちに

救すくはんものと海山うみやまを 越こえてやうやうクスはらの原

北光彦きたてるひこの神かみならで 一ひとめ目の曲まがにおどかさ

圓まどかな夢ゆめを破やぶられて 起おき出いで四方よもを眺ながむれば

虎狼とらおほかみの叫さけび聲こゑ 枯野かれのを渡わたる風かぜの音おと

寒さむさに顫ふるふ其時そのときに 思おもひもよらぬ時ときさんの

時ときに取とつての御愛嬌ごあいけう 大おほきな法螺ほらを吹ふく風かぜに

又またもや眠ねむりを醒さましつ 茲ここに二人ふたりは轉ころび寝ねの

水みづも漏もらさぬ三五あななひの 神かみの教をしへの友ともとなり

寂さびしき野邊のべを賑にぎはしく 進すすみ行ゆくこそ樂たのしけれ

朝あさひ日は照てるとも曇くもるとも 月つきは盈みつとも虧かくるとも

風かぜも荒野あれのの狼おほかみや 獅し子しや大蛇をろちの千萬ちよろつの

曲まがの一度いちどに迫せまるとも
 神かみの教をしへの宣傳使せんでんし
 我が言靈ことたまに追おひ散ちらし
 渡わたりて又またもや荒野原あれのほら
 心の駒こまに鞭むちうちて
 神かみの救すくひの船ふねに乗り
 船ふねを力ちからにア・メ・ヤ
 此世このよを造つくりし神直日かむなほひ
 直日なほひの御靈伊都能賣みたまいづのめの
 神かみの教をしへを杖つゑとして
 進すすみ行くこそ樂たのしけれ
 道奥みちのくまでも恙つつがなく
 心こころも廣ひろき大直日おほなほひ
 鏡かがみの如ごとき琵琶びばの海うみ
 心こころは堅かたき磐いはくす樟すの
 曲まがの都みやこに立たち向むかふ
 虎とら伏ふす野邊のべの膝栗毛ひざくりげ
 誠明志まことあかしの湖みづうみを
 神かみの御水みいき火ふに吹ふき拂はらひ
 人の通とほつた事ことのない様やうなこの曠原かうげんを、
 知らず識しらずの
 日ひの出でかみや木この花はなの

時公ときこう 宣傳使様の御蔭で、
 人の通つた事のない様なこの曠原を、
 知らず識らずの
 間に進んで來ました。然し大分に膝栗毛が草臥れた様ですから一杯水でも飲まし

てやりませうか」

東彦「マア、行かうぢやないか。一足々々アーメニヤに近寄るのだからな。日天

様でも一分間も御休みにならぬのだから、休むのは勿體ない」

時公「一息々々アーメニヤに近づくのは結構だが、この間も石凝姥の宣傳使の言

葉に、吾々は斯うして天下の爲めに活動して居るのは、一息々々墓場に近づいて

行くのだと云はれました。そんなことを聞くと人間も頼りなくて足が倦くて行く

氣になりませぬわ。長い月日に短い命だ。一寸一服しませうかい」

東彦「人間は一息々々墓場へ近づいて、それから墓場の向ふの國へ行くのだ。吾々

の目的は墓場を越えるのだよ」

時公「墓へ近づくなぞと、八力ない浮世か、八力ある浮世か、根つから葉つから

「はか」ばかしくないわ。馬鹿々々しい様な氣がします」

東彦「人生の目的はそこにあるのだ。人は生き變り死に變り、若返り若返り幽界

現界に出入して、永遠無窮の命をつないで行くものだ。千年も萬年も不老不死だ

よ。お前たちもこの世へ生れて、時さまと云うて威張り散らして居るのは僅かに

四十年許りだが、お前の御本體は何萬年前から生れて居るのだ」

時公「一寸待つて下さい」

と云ひながら道ばたの草の上にドツカと腰を下し、眉毛に唾をつけ、

時公「オイオイ化さま、御交際に一服せぬか。化物やアクマは吐す事が通録せぬ

と云ふ事だが、矢張り貴様は尻尾を出しやがった」

東彦「お前また遽に汚なげにものを云ひ出したな」

時公「定つた事だ。化物のアクマ彦に叮嚀なことを云つて關係つて居ようものな

ら、どんな目に會はしやがるか分るものぢやない。そろそろ日が暮れかかつたも

のだから本性を現はしやがった」

東彦「アハ、ハ、ハ、ハ」

時公は、

「分らぬ奴だな」

と首を傾けてゐる。

「人間は一度死んだら二度と死なん代りに、一度生れたら二度と生れるものか。」

生きてたり死んだりする奴は狐か狸だ。狐の七化け狸の八化け、化の皮を現はし呉れむ」

と東彦の尻を半信半疑で一寸突いて見ながら、

「やつてやるか、然し本物だつたら俺に罰が當るから困るし、なんともかとも正體の分らぬ奴ぢや。俺は日の暮になると朝の元氣に引換へて歩き草臥れて足が棒になつて、如何に我慢な時公さまでも一服したい様になつて來るのに、日の暮になるほど元氣付きやがるのが一つの不思議だ。化物といふ奴は夜さりになつたらはしやく奴だ」

と鐵棒を地に突立てながら、東彦の顔をイヤらしきほど睨みつける。

「八、ア十分に目を光らして私の顔を調べて置くが宜い。夜分になつてから誤解されては困るからな」

時公は少し頭を傾け、

「人間が三分に化物が七分か、人三化七、夜分になると、人一化九になるのだから。死んで生れ、生れて死ぬなんて手品師か役者のやうな事を云ひやがつて、

眞面目に白状せんと時さまの腕には骨があるぞ。斯う之を見い

と左の手をニユーと延ばし、節くれ立ったり氣張ったりといふ力瘤だらけの腕を捲り、右の手にて左の腕をたたいて見せる。

東彦「アハ、ハ、ハ、面白おもしろい。こんな寂しい處で結構な俳優を見せて貰つて、旅の疲れも忘れて了つた。斯う云へば又日の暮に「はしやく」化物といふ

か知らんが、本當に生き返つた様な氣がして元氣ますます旺盛だ

時公「賢い様でも流石は曲津神だ。到頭白状しやがった。貴様は鬼の亡者だらう。

死んで居やがる證據には、今生き返つた様な氣がすると吐したではないか。サア

どうぢや。もう斯うなる上は貴様の方から白状したのだから逃げ道はあるまい。

執念深くこの世へ迷うて來よつて……一つ目の化物奴が

東彦「アハ、ハ、ハ、ハ」

時公「亡者と思へば何だか其處らが、もじやもじやして氣分が悪くなつて來た

東彦「お前の目の帳をサラリと上げて、耳の蓋を取つて私の言ふ事を良く聞くの

だ、見違ひ聞違ひをするな。直日に見直し聞直しといふ事がある。さうしたら、

今までお前の【ほざ】いた悪言暴語も發根と善言美詞に宣り直す様になる」
時公「ヘン、馬鹿にするない。一つ目の化物ぢやあるまいし、二ツ目の兄さまだぞ。化物のやうに眼に帳を下したり、耳に蓋をして堪るか。三五教の宣傳歌をみん事聞き【はつ】りやがつて、見直せ聞き直せなぞと莫迦にするない」
この時得も云はれぬ芳香四邊に満ち、錚々たる音樂が何處ともなく聞え來たる。
(大正一一・二・二八 舊二・二 藤津久子録)

第三章 死生觀〔四七〇〕

天を仰いで聲する方を眺めてゐる。
牙え渡る音樂の聲、馥郁たる花の香りに包まれて、忽ち時公は精神恍惚とし、
梅か櫻か桃の花か、翩翩として麗しき花瓣は雪の如くに降つて來る。香はますます馨しく、音樂はいよいよ牙え、神に入り妙に徹する斗りなり。

東彦「オー、時さま、目の帳は上つただらう、耳の蓋は取れたであらう。鼻も活返つたであらう」

「ヤアー、豁然として蓮の花の一度にパツと開いたごとき心持になりました」

「是でも私を化物と思ふか」

「化物は化物だが、一寸良い方の化物ですなア。是丈では時公もトント合點が行

きませぬが、最前貴方のおつしやつた、私の何萬年とやら前に生て居つたとか云

ふ、その譯を聞かして下さい」

東彦「今度は眞面目に聞きなさい。人間と云ふものは、神様の水火から生れたも

のだ。神様は萬劫末代生通した。その神様の分靈が人間となるのだ。さうして、

肉體は人間の容れ物だ。この肉體は神の宮であつて、人間ではないのだ。人間は

この肉體を使つて、神の御子たる働きをせなくてはならぬ。肉體には榮枯盛衰が

あつて、何時迄も花の盛りで居ることは出来ぬ。されどもその本體は生替り死替

り、つまり肉體を新しくして、それに這入り、古くなつて用に立たなくなれば、

また出直して新しい身體に宿つて來るのだ。人間が死ぬといふことは、別に憂ふ

べき事でも何でもない。ただ墓場を越えて、もう一つ向ふの新しい肉體へ入れ替ると云ふ事だ。元來神には生死の區別がない、その分靈を享けた人間もまた同様である。死すると云ふ事を、今の人間は非常に厭な事のやうに思ふが、人間の本體としては何ともない事だ」

時公「さうすれば、私は何萬年前から生て居つたと云ふ事が、自分に分りさうなものだのにチツとも分りませぬ。貴方のおつしやる通りなら、前の世には何と云ふ者に生れ、何處にどうして居つて、どういふ手續きで生れて來たと云ふ事を覚えて居りさうなものです。さうしてそんな結構な事なれば、なぜ今はの際まで、死ぬと云ふことが厭なやうな氣がするのでせうか」

東彦「そこが神様の有難いところだ。お前が前の世では、かう云う事をして來た、靈界でこんな結構なことがあつたと云ふ事を記憶して居らうものなら、ア、ア、ア、こんな辛い戦ひの世の中に居るよりも、元の靈界へ早く歸りたい、死んだがましだと云ふ氣になつて、人生の本分を盡す事が出來ない。總て人間が此世へ肉體を備へて來たのは、神様の或使命を果す爲に來たのである。死ぬのが惜いと云ふ心

があるのは、つまり一日でもこの世に長く居つて、一つでも餘計に神様の御用を勤めさせる爲に、死を恐れる精神を與へられて居るのだ。實際の事を云へば、現界よりも靈界の方が、いくら楽しいか面白いか分つたものでない、いづれ千年先になれば、お前も私も靈界へ這入つて「ヤア、東彦様」「ヤア時様か」「どうして居つた」「お前は何時死んだのか」「さうだつたかね、ホンニホンニ何時やら死んだやうに思ふなア」ナント云つて互に笑ふ事があるのだ」

時公「ア、そんなものですか。そんなら私の様に、この様に長生をして罪を作るより、罪を作らん中に、早く死んだ方が却つて幸福ですなア」

東彦「サア、さう云ふ氣になるから、靈界の事を聞かすことが出来るのだ。この世ほど結構なところは無い。一日でも長生をしたいと思つて、その間に人間と生れた本分を盡し、一つでも善いことを爲し、神様の爲に御用を勤めて、もう是でよいかから靈界へ歸れと、天使の御迎ひがある迄は、勝手氣儘にこの世を去る事は出来ぬ。何ほど自分から死に度いと思つても、神が御許しなければ死ぬ事は出来ぬものだ」

時公「一つ尋ねますが、私が子供の時は、西も東も知らなかつた。昔から生通しの神の靈魂であるとするれば、子供の時から、もう少し何も彼も分つて居りさうなものだのに、段々と教へられて、追々に智慧がついて來たやうに思ひます。是は一體どう云ふ譯ですか」

東彦「子供の肉體は虚弱だから、それに應ずる程度の魂が宿るのだ。全部本人の靈魂が肉體に移つて働くのは、一人前の身體になつた上の事だ。それ迄は少し宛生れ替るのだ」

時公「さうすると人間の本尊は十月も腹に居つて、それから、あと二十年もせぬと、スツカリと生れ替る事が出來ぬのですか」

東彦「マアそんなものだ。併し何ほど靈界が結構だと言つても、人生の使命を果さず、悪い事を云うたり、悪ばかりを働いて死んだら、決して元の結構な處へは歸る事は出來ぬ。それこそ根の國底の國の、無限の責苦を受るのだ。それだから此生の間に、一つでも善い事をせなくてはならぬ」

時公「大分に分りました。一遍に教へて貰うと、忘れますから、又少し宛小出し

をして下さいくだ」

東彦あつまひこ「サア、行かう、夜の旅は却つて面白いものだ」

時公ときこう「エー、終日荒野を歩いて、夜迄も歩くとは、チツト勉強が過ぎはしませぬ

か。日輪様でも夜さは黒幕を下してお休みだのに、それは餘りです」

東彦あつまひこ「夜の旅と云ふ事は寝る事だ。サア、憩うと云ふ事は休むと云ふ事だ、ア

八、八、八。また今晚も茅の褥に肱枕、雲の蒲團でお寝みだ。神の恵の露の御恩

を感謝する爲に、神言を奏上し、宣傳歌を歌つて寝む事としよう」

時公ときこう「新しい宣傳歌は根つから存じませぬ。何でも宜しいか」

東彦あつまひこ「先づ私から宣傳歌を唱へるから、お前はお前の言靈に任して歌ふのだ」

と云ひ乍ら東彦は直に立て、

「天と地とは永久に

陰と陽との生通し

神の水より生れたる

人は神の子神の宮

生くるも死ぬるも同じ事

是をば物に譬ふれば

神かみの世界せかいは故郷ふるさとの戀こひしき親おやのゐます家いへ

此世このよに生まれうたれた人生じんせいは

露つゆの褥しとねの草枕くさまくら

旅たびに出いでたる旅人たびびとの

クス野のを辿たどるが如ごとくなり

辿たどり辿たどりて黄昏たそがれに

いづれの家いへか求めもとめつつ

是これに宿やどりし其時そのときは

此世このよを去さりし時ときぞかし

一ひとよ夜の宿やどを立たち出いでて

又またもや旅たびをなす時ときは

又人またにんげん間うまと生うまれ來きて

神かみの働はたらきなす時ときぞ

生うまれて一いち日にち働はたらいて

死しんで一ひとよ夜よを又また休やすむ

死しぬと云いふのは人ひとの世よの

果はてには非あらず生いく魂たまの

重おも荷に下おろして休やすむ時とき

神かみの御前みまへに遊あそぶ時とき

榮さかえの花はなの開ひらく時とき

歡喜よろこび充みてる時ときぞかし

又またもや神かみの命いのち令つけに

神世かみよの宿やどを立たち出いでて

再ふたび人じん生せいの旅たびをす

旅たびは憂ういもの辛つらいもの

辛つらい中なかにも亦また一ひとつ

都みやこに至いたる限かぎりなき

歡喜くわんきの花はなは咲さき匂におふ
 神かみの御み子こたる人ひとの身みは
 生うまれて死しんで又また生うまれ
 死しんで生うまれて又また生うまれ
 死しんで生うまれて又また生うまれ
 堅かき磐は常とき盤はに榮さかえ行ゆく
 常とき磐はの松まつの美うまし世よの
 五み六ろ七くの神かみの太ふと柱ばしら
 玉たまの礎いし搗すき固かため
 高たか天あま原はらに千ち木ぎ高たかく
 宮みや居ゐを造つくる働はたらきは
 神かみの御み子こたる人ひとの身みの
 勤つとめの中なかの勤つとめなり
 鳴あ呼あ頼たのもしき人ひとの身みの
 鳴あ呼あ頼たのもしき人ひとの身みの
 人ひとは神かみの子こ神かみの宮みや
 神かみと人ひととは生いき替かはり
 死しに替かはりして永とこ久しへに
 五み六ろ七くの世よ迄まで榮さかえ行ゆく
 五み六ろ七くの世よ迄まで榮さかえ行ゆく

時とき公こう「ヤア、面おも白しろい面おも白しろい、有あ難がたい有あ難がたい」
 東あ彦まひこ「分わかつたか」

時公 「ハイ、今度は根つから葉つからよう分りました」

東彦 「分つた様な、分らぬ様な答だなア」

時公 「分つた様で分らぬ様なのが神の道、人生の行路です。この先にどんな化物
が出るか貴方分つてますか」

東彦 「困つた奴だなア」

時公 「奥歯に物のコマツタやうな、困らぬ様な事を云ふ奴だ。アハ、ハ、ハ、ハ」

東彦 「サア、時公、貴様の宣傳歌を聞かう」

時公 「災多い世の中に ヒヨイト生れた時公の

胸はトキトキ時の間も 死ぬのは恐い怖ろしい

どうしてこの世に何時までも 死なず老ずに居られよかと

朝な夕なに案じたが 三五教の宣傳使

石凝姥や梅ヶ香の 姫の命がやつて来て

穴無い教と云ふ故に コイツアー死なでもよいワイと

思つて居たら東彦
人はこの世に生れ来て

墓に行くのが目的と
聞いたる時の吃驚は

矢張り墓の穴有教と
力も何も落ち果てた

一つ目小僧が現れて
一つの穴へ時公を

連れて行かうと云うた時
アナ怖ろしやアナ恐や

案内も知らぬ田圃道
草押し分けて来て見れば

又も一つの化物が
茅の芒の間から

又ツと立ちたる恐ろしさ
コイツも矢つ張り化物と

一目見るより鐵の杖
振つて見せたらヤイ待てと

掛けたる聲は魔か人か
將た化物か何だると

胸もドキドキ十木公が
狼へ騒ぐ折からに

サツト吹き來る木枯の
風より太い唸り聲

虎狼か獅子鬼か
地獄の底を行く様な

厭な氣持になつた時
天の恵か地の恩か

耳爽みみさわかな音楽おんがくは 聞きえて花はなの雨あめが降ふり

心こころの空そらも一時いつときに パツと開ひらいた花蓮はなはちす

コイツアー誠まことの人間にんげんと 覺さとつた時ときの嬉うれしさは

生いきても忘わすれぬ死しんだとて 是これが忘わすれてよからうか

どうぞ一いつしやうし生死しなぬ様やうと 頼たのむ神かみさま佛ほとけさま

妙見めうけんさまもチヨ口臭くさい ウラルの山やまの法螺吹ほらふき嶽だけに

止とどり玉たまふ天狗てんぐさまに 一ひとつお願ねがひ掛卷かけまくも

畏かしこき神かみの御利益ごりやくで 人ひとの生死いきしぬ有あり様さまを

聞きいたる時ときの嬉うれしさよ 斯かうなるからは何い時つにても

死しんでもかまはぬ時ときさまの ヤツト覺さとつた虎とらの卷まき

嬉うれしい 嬉うれしい 有あり難がたい ドツコイ ドツコイ ドツコイシヨ

東彦あづまひこ 『アハ、ハ、ハ、ハ、オイ時公ときこう、ソナ宣傳歌せんでんかがあるか。宣のり直なほせ宣のり直なほせ』

時公ときこう 『宣のり直なほしたいとは思おもへども、生憎あいにく旅たびのこととて肝腎要かんじんかなめの女房にようぼうを、連つれて來き

て居をらぬので………」

東彦あつまひこ「馬鹿ばかツ」

時公ときこう「馬鹿ばかとはどうです。宣のり直なほしたり、宣のり直なほしたり」

東彦あつまひこ「宣のり直なほせとは抜ぬけ目めの無ない男をとこだなア」

夜よは深しん々と更ふけ渡わたる。烈はげしき野の分わきに二人ふたりは笠かさを被かぶつて心こころ持もちよく寢しんに就つきける。

(大正一一・二・二八 舊二・二 岩田久太郎録)

第四章 梅うめの花はな〔四七一〕

東彦あつまひこ、時公ときこうの二人ふたりは草くさ疲たれ果はてて、前後ぜんごも知しらず暖あたかき夢ゆめを結むすぶ折をりしも、前方ぜんぱうより慌あわたしき何なに者ものかの足あし音おとが聞きえ來きた。二人ふたりは此この物もの音おとに目めを醒さまし、折をり柄がら昇のぼる半はん圓えんの月つきに透すかし見みれば、巨きよ大たいなる獅し子しの群むれ幾いく百ひゃくともなく、二人ふたりの眠ねむる横よこ側がはを雲くもを霞かすみと走はしり行ゆくのであつた。時公ときこうは東彦あつまひこの耳みみに口くち寄よせ、

「モシモシ、宣傳使様、千足獅子が通りましたデ、……知つてますか」

東彦 「千足獅子と云ふものがあるか、あれは千足狼だ。お前がシヤツチもない宣傳歌を歌つて宣り直せと云ふに、宣り直さないものだから、神様が怒つて、獅子を遣はしてお前を探して御座るのだ。モウおつつけ此方へ引返して来る時分だ。

早う宣傳歌を宣り直せ」

時公 「そんな事云つて恐嚇たつて、この時さんは、時々この野で千足獅子に會ふのだから、獅子喰た犬に其嚇しは利きませぬで……貴方宣り直しなさい」

東彦 「イヤ、汝はねぶた目で獅子と間違つたのだ、あれは巨大な狼だよ。何でも

大きな大蛇が現はれたので逃げて來たのだ。キット此次は太い奴だ。用心せよ」

時公 「太い奴つて、大蛇ですか」

東彦 「さうだ、大蛇といふものは斯ういふ草原に隠れてるものだ。あまりお前が人間臭い事をいふものだから、大蛇の奴一つ呑んでやらうと思つて現はれたのだ

よ。併し乍ら此高彦さまが御座る間は大丈夫だ。マア安心せい」
時公 「あなた、矢張化物だな。悪魔彦だとか云つて居つたと思へば又驚は鷹だと

か、鳶だとか、鳥とめもない事を言ふ人だ」

高彦「マアどうでもよい。今に長い太い奴がザーツと音を立ててお出ました。一

つ宣傳歌でも聞かしてやらうかい」

時公「さうですなア。宣傳萬歌（千變萬化）の言靈の妙用を試すは此時です」

斯かる所へ忽然として美しき女が現はれた。

女「ヤア、お前は時さまか。どうして斯んな所へ来やしやんしたのだい」

時公「ヤ、出やがったなア。ヤイ大蛇、綺麗な別嬪に化けやがって、俺を誤魔化

さうと思つたつて誤魔化せないぞ。コラツ、俺を何と心得て居る。蛇を掴んで喰

ふ蛇掴みの悪神でさへも、俺のフンと吹いた鼻息で、雲を霞と逃げ散るといふ様

な、古今無雙の豪傑だ。良い加減に姿を隠さんと、掴んで喰てやらうか」

高彦「アハ、ハ、ハ、」

時公「コレコレ、高さん、何が可笑しい、千騎一騎だ。是から時さまの腕試しだ。

チツト都合の良い宣傳歌を歌つて下さい。應援だ應援だ」

高彦「アハ、ハ、ハ、ハ、」

女「ホ、、、」

時公「フン、何を吐しやがる。此寒い時分にホ、、なんて、呆けやつて。鶯の眞似をしたつて誰が其手に乗るかい。呆助奴が、とぼけやがるな。時さんは時を知つて居るのだ。ホ、、と云うて出る奴は、梅の花の咲く時分だ」

女「わたしは梅ヶ香姫で御座います」

時公「ナニツ、梅ヶ香姫もあつたものかい。梅ヶ香姫は、二日前に鐵谷村を三人連で出た筈だ。貴様一人こんな處においとく筈がない。貴様の正體は時さまがチヤーンと見届けてあるのだ。ソレ、太い奴の長い奴だらう。俺の天眼通は百發百中だ。恐れ入ったか、邪神奴が」

女「ホ、、、、時さまのあの氣張り様、わたしはお臍が茶を沸かします。

ホ、、、」

時公「エ、、厭らしい。此野原に夜の夜中に出て來やつて、魔性の姿をして、何をほざきやがるのだ。煙草の脂を飲ましてやるか」

高彦「アハ、、、」

女「妾は時さまの天眼通力に恐れ入りました、お察しの通り、太い長い此クス野ケ原の主で御座います。妾は澤山の獅子を餌食に致して居ります。一口に牛の様な獅子を十足くらゐ喰はねば、齒にも當らぬ様な氣が致します。ホ、ホ、ホ、」

時公「ヤア、厭らしい奴だ。コレコレ高彦さま、あなたも起ぬか。なんぼ死んで生れて、死んで生れると言つても、こんな奴に吞まれて死ぬのは、チツト残念だ。サア起て下さい、早う早う」

高彦「アハ、可笑しい奴だナ。モシモシ大蛇娘さま、お前さま、獅子ばかり喰つて居つても、あんまり珍しくなからう。ここに一つ人肉の温かいのがあるが、是はどうだな」

女「ホ、それは何よりの好物、頂戴致しませう」

時公「オ、それがよい、それがよい。蛇の口から、高彦が喰て呉れと云つてる。此奴をグーと一つ呑んで、それで帳消しだ」

女「イエイエ、時さまが美味さうなお顔付、肉の具合といひ、コツクリと肌の黒い美味さうなお姿。ホ、ホ、ホ、」

時公「エイ邪魔臭い、口開け、獅子の十も喰うて齒に當らぬ様な大きな口なら、俺もトンネルだと思つて喰はれてやろう。其代りに此杖を振つて振つて振り廻し、腹の中に這入つた時に腸を突いて突いて突き廻してやるから、さう思へ。サア、早う正體を現はさぬか」

女「わたしの口は火の様な熱があります。口へ入れたが最期、火の中へ薄氷を投り込んだ様なもの、時さまのお身體も、鐵棒もみんな熔けて了ひます」

時公「コイツ都合が悪いなア。オイ高さま、籤引だ。言ひ出し、放き出し、笑出しだ。屁でもない様な事を云ふものだから俺を喰ふなんて云ひやがるんだ。サア、一緒に附合だ。二人乍ら吞ましてやらうかい」

高彦「アハ、ハ、ハ」

女「モシモシ時さん、嘘ですよ。妾は蛇掴みの岩窟へ清姫さまの身代りになつて、貴方に擔いで往て貰うた梅ヶ香姫です」

時公「嘘の様な、本眞の様な話だが、そんなら何故俺ん所の主人の鐵彦さまと、石凝姥の宣傳使をどうしたのだ」

女をんな「二人共ふたりとも此處ここに居をられます。ア、モシモシお二人様ふたりさま、此處ここへお越こし下くださいませ」
草くさの中なかから二人ふたりの男をとこの聲こゑ

「アハ、ハ、ハ、オホ、ハ、ハ、」

今いままで薄雲うすくもに包つつまれ、ドンヨリとして居あた月光つきかげは皎々かうかうと輝かがき初はじめた。

高彦たかひこ「ヤア、貴方あなたは石凝姥いしこりどめの神様かみさま、珍めづしい處ところでお目めに掛かりました」

時公ときこう「ナンだ。全然まるでお紋狐もんぎつねに魅つままれた様やうだ」

是これより五人ごにんは夜よの明あくるを待まつて、クス野ヶ原のがはらの大蛇をろちを言向ことむけ和やはす事こととなつたのである。

(大正一一・二・二八 舊二・二 松村眞澄録)

第五章 大風呂敷おほぶろしき〔四七二〕

東雲しののめの空そら別わかけ昇のぼる東彦あづまひこ
青雲あをくも別わかけて中天ちうてんに

光ひかりも清きよく高彦たかひこの神かみの命みことの宣せん傳でん使し

二八にはちの春はるの梅うめヶ香かや鐵谷村かなたにむらの鐵彦かなひこが

鐵門かなどを守まもる時公ときこうと聲こゑも涼すずしき宣せん傳でん歌か

謠うたひ謠うたひて進すすみ行ゆく荒野あれのがはらヶ原がはらに吹ふく風かぜは

八岐やまた大蛇をろちか曲神まががみか醜女しこめ探女さぐめの吹ふく息いきか

息いきも吐つかずにすたすたと勢いきほひ猛たけく進すすみ行ゆく

あゝ面おも白しろし面おも白しろし大蛇をろち探女さぐめや醜神しこがみの

假令たとへ幾いく萬まん來きたるとも天あめと地つちとを造つくりたる

御祖みおやの神かみのたまひてし我言わがこと靈たまの神力しんりきに

敵てきするものはあらざらめ敵てきは千里せんりの外ほかでない

心こころの中なかに知しらぬ間まに潛ひそむ【やつ】こそ我敵わがてきぞ

心こころの鬼おにや曲神まががみを伊吹いぶき袂はらひて清きよめたる

神かみの御子みこたる我身わがみには月日つきひの光ひかり遍あまねくて

玉は眞澄の鏡なす

鏡に勝る日本魂

珍の劍を抜き持ちて

我行く道に障りたる

曲の大蛇を寸断し

勝鬨あぐる束の間の

はやくも来るクスの原

新玉原となりける。

高彦「サア皆さん、此處で一息を休めて、いよいよ戦闘準備にかりませう。

まづ先陣は強力無雙の英雄豪傑、時公さまに願ふ事にしよう。我々と梅ヶ香姫は

本陣、東彦さんと鐵彦さまは左右の兩翼となり、三角形に敵の本營に向つて進撃

するのですな」

時公「モシモシ、力の強い者が先へ行つて、萬々一大蛇の奴にがぶつとゆかれて

は終ひだ。後の控がありませぬ。總て戦ひは後の控が肝腎です」

高彦「強さうに云つても弱い男だ。随分空威張の上手な法螺吹きだな。マア兔も

角、神言を奏上して、それからゆつくり作戦計畫を定め、陣容を整へて旗鼓堂々

と敵の牙城に進む事にしませうか」

時公「ヤア、一寸皆さん待つて下さい。私は旦那様に申し上げねばならぬ、肝腎の御用を忘れて居ました。エ、鐵彦様、貴方直ぐ歸つて下さい」

鐵彦「なんだ」

時公「何んでもよろしいが、歸つてさへ下されば分るのです」

鐵彦「コレ、分ると云つたつて肝腎の此場合、何でもない事に駒の首を立て直す

と云ふ事が出来るものか、ハツキリと云はぬかい」

時公「エ、實は申上げ悪い事で御座いますが、貴方が東彦の宣傳使と三人連で

館をお立ち遊ばした二日目の夜半頃、風がザアザア、雨がシヤアシヤア、雨垂の

雫がポトンポトンと、それはそれは淋しい眞闇の、化物でも出さうな晩でした。

其時に奥様が、オ、臭いとも何とも云はずに、便所にお出になりましたところが、

便所の横からニユーと出た絲柳の雨に濡れた冷たい枝が、風と一緒に奥様の顔を

ザラリと撫でた其途端に奥様はあらう事かあるまい事か、アツと云つたきり荒肝

をおつ潰して、其の場に「バタリ」、スワ一大事と門番の時公までが、雨蛙の様

に、胸を「トキトキ」させながら近寄りて見れば、こは抑如何に、呼べど叫べど

何なんの音沙汰おとさたも梨なしの礫つぶての淺間あさましいお姿すがた、手ても足あしも冷つめたくなつて居ゐらつしやる。ア、
どうしたらよからう、奥様おくさまもう一度いちど「もの」を言いうて下ください。旦那様だんなさまは宣傳使せんでんしに
呆ほうけてお出でましになつた留守るすに、貴女あなたがこんな事ことにおなりなされては、この時公ときこう
はどうして旦那様だんなさまに顔かほが合あはれませう、と涙なみだに搔かき暮くれました。

鐵彦かなひこ「ヤア、鐵姫かなひめは死しんだのか」

時公ときこう「ハイ、サツパリ【ことき】れて仕舞しまつて、何なんとも彼かとも仰有おつしやりませぬ。も
うかうなる上うへは旦那様だんなさまの御行方おんゆくへを探さがし、立派りつぱなお葬とむらひをして上あげたならば、せめて

も せめても せめても

鐵彦かなひこ「何なんだ、ハツキリ言いはぬか。奥おくは眞實ほんたうに死しんだのか」

時公ときこう「ハイ、御歸幽おかくれになりました。そこで奥様おくさまが「オイ時公ときこう、愚圖ぐづぐづして居ゐ
時ときでない。早はやく旦那様だんなさまを呼よんで來きて呉くれ」と仰有おつしやりました。そこでこの時公ときこうは

「奥様承知致おくさましやうちいたしました」シテコイナと、七分三分しちぶさんぶに尻引しりひつからげ、禪たすき十文字じふもんじに綾あや
どりて、後鉢卷うしろはちまき「リン」と締め、大身おほみの槍やりを提ひつさげ「ヤアヤア者共遠ものどもとほからん者ものは音おと
にも聞きけ、近ちかくば寄よつて目めにも見みよ、鐵谷村かなたにむらに於おいて英雄豪傑えいゆうがうけつと聞きこえたる我名わがなを聞き

きて驚おどろくな。知る者ものは知る、知らぬ者ものは一寸ちよつとも知らぬ、女をんなの中の男をとこ一匹いっぴき、時公ときこうさまとは我事わがことなるぞ」

鐵彦かねひこ「オイオイ時公ときこう、貴様きさま何云なにいふんだ、眞面目まじめに言いはぬか」

時公ときこう「ハイ、あまり嬉うれしくて一寸逆上ちよつとのぼせしました。奥さまが一旦息いったんいきが切きれて冷つめたくなつて仕舞しまつた。何どうしよう斯かうしようと上うへを下したへと大騒動おほさわどうをやつてる最中さいちゆう、持もつべきものは子こなりけりですな。彼あの優やさしい清姫きよひめさまが、三五教あななひけうの宣傳歌せんでんかを謠うたつて神琴かみこととやらを弾だんぜられたが最後さいご、琴ことの弦つるのやうにたちまち奥様おくさまがピンピンと跳はねかへつて息いきを吹ふき返かへし、殊ことの外ほかの御機嫌ごきげんで「オイ時公ときこう、一時いちじも早く御主人ごしゆじんさまを呼よんで來きて呉くれ、女計りをんなばかでは心細こころほそい、人間にんげんは老少不定らうせうふぢやうだ。亦またもやこんな事ことがあつては取返とりかへしがならぬ。貴様きさまは一時いちじも早く後追あとおひかけて、事ことの次第しだいを細こまやかに悉ことごとく申上まをしあげて、二人ふたりの宣傳使せんでんしに、よく理由ことわけを言いつて歸かへつて來こい」と、殊更ことさらの御頼おたのみ、斷ことわる譯わけにもゆかず、一目散いちもくさんに追おつかけて來きたので御座ございます。若もしやの事ことでクス野ヶ原のがはらの大蛇をろちにでも、旦那様だんなさまが吞のまれて仕舞しまふやうな事ことがあつたら、この時公ときこうは、どうして奥さまに斷ことわりが云いはれませうか」

鐵彦「我々は神様のために決心して、アーメニヤの悪魔を天下のために言向け和すのだから、それが済む迄は、小さい一家の事にかかはつて居られない。特に尊い三五教の宣傳使のお供だ。貴様怖ければ歸つてもよいから、俺は假令大蛇に吞まれたつて神界の御用が済む迄は、決して、決して歸らないから奥にさう言つて言傳をして呉れ」

時公「ヤア旦那様、貴方もよく【ことごと】と仰有います。別に大した事も無いのですから、いつその事大蛇を退治してから歸らして貰ひませう」

梅ヶ香姫「ホ、ホ、ホ、ホ、又しても又しても、時さんの大風呂敷、面白いわ」

時公「ア、さうだ。この大風呂敷で大蛇の奴をぐるりと包んで棒の先にポイと引つかけて、鐵谷村に連れて歸つて、サア、これが時さまのお土産だ、皆寄つて集つて、擲らうと叩かうと、煮いて喰はうと、【だいぢや】ないと嚇かしてやらうかな」

鐵彦「もう好い加減に洒落は止めて呉れ、千騎一騎の場合だ」

時公「千騎も詮索もいつたものか。一氣呵成に突撃を試みるのですなア。サア東

彦さま、東彦さま、お梅さま、私が先陣を勤めませう。千騎一騎、千仞の功を一簣に缺くやうな下手な事は致しませぬ。宣傳萬歌の三五教の宣傳歌で、縦横無盡に言向け和すは案の内、案じるより産むが易い。サア行きませう」

一同は

「面白いなア」

と座を立つて、時公の千切れ千切れの出任せの宣傳歌に笑ひつ倒けつ、新玉原の奥へ奥へと進み入る。

（大正一一・二・二八 舊二・二 加藤明子録）

第六章 奇の都（四七三）

一行は身を没する許りの冬の荒野ヶ原を、草を分けつつ大蛇の棲處と覺しき處へ進んで行つた。此處には大變な大きな長方形の岩ありて、萱の穂を壓して高く

突出してゐる。

鐵彦 向ふに見えるあの岩石の下には大變な大きな穴があつて、その穴に血腥さい膏の様な水が一杯に漂ひ、龍宮まで通つて居るといふ事です。何時も其穴から太い奴が首を突き出して此荒野を通ふ獅子や、虎や、狼、人間などを呑むのです。此大蛇の爲めに結構な原野を耕す者はなく、草の生える儘にしてあるのです。此大蛇を言向和して草野を開き五穀の種子を播き、都をつくつたならば、何れほど世界の者が喜ぶ事か知れますまい」

東彦 「それは面白い。サア愈此處で宣傳歌を歌ひませう」

と一同は岩の近くまで立寄つて神言を奏上し、口を揃へて宣傳歌を歌ひ始めた。宣傳歌の終ると共に、南北百間許り、東西五六十間許りの巖は、強大なる音響をたてて呻り始めた。此音響に天震い地割るるか許り疑はれた。時公、肩を怒らし肱を張り、

時公 「ヤア岩公が吐き出したぞ。コラ岩公、貴様は何も【いは】公だと思つたら中々能う呻りやがる。それ丈け呻る言靈があるなら、時さまが許してやるから何

なりと吐けほげ」

不思議ふしぎや時公ときこうの言葉終ると共に、さしもの大音響だいおんきやうは「ピタリ」と止とまつた。時とき

公こう、得意とくいになり鼻はなを「ツン」とさせながら、

時公ときこう「ヤア、皆みなの方々かたがた、イヤ宣傳使様せんでんしさま、時さんときの言靈ことたまは、まあざつとした所ところで此この

通とほり、とつときの力ちからを出ださうものなら、こんな岩いはくらゐ鼻はなの先さきで假令たとへ百千萬ひやくせんまんでも

吹ふき散ちらすのですよ。なんと信仰しんかうの力ちからは強つよいものでせう」

東彦あづまひこ「さうだ。信仰しんかうの力ちからは山やまをも動うごかすといふからな。此位このくらゐの事ことが出来できないでは

宣傳使せんでんしのお供ともは叶かなはない」

この時とき岩穴いはあなより紫むらさきの煙けむり、幾丈いくぢやうともなく天てんに向むかつて「シュー」シューと音おとをたて

て昇のぼり行く。岩いはの周圍しうゐは紫むらさきの煙けむりに包つつまれて仕舞しまつた。見みれば岩上がんじやうには三人さんにんの娘むすめが

立たつて居ゐる。三人さんにんの娘むすめは日ひの丸まるの扇あふぎを兩手りやうてに持もち、何事なにことか小聲こゝろに歌うたひ乍ながら三人さんにん巴さんにともゑ

となつて岩上がんじやうに淑しとやかに舞まひ始はじめた。梅うめヶ香か姫ひめは不思議ふしぎさうに首くびを傾かたむけて三人さんにんの女をんな

の舞まひを凝視みつめて居ゐた。

時公ときこう「ヤア大蛇おろちの奴やつ、うまい事ことをややりやがる。斯こんな優やさしい姿すがたで舞まひよると、な

んぼ大蛇でも可愛ゆくなつて来る、サアサア、舞うたり舞うたり。モシモシ皆さま、女は魔と謂ひますから御用心なさい」
東彦「イヤ、我々は大丈夫だが時さま、確りしないと美しい女だと思つたら大變だ。それお前の足許に大蛇の尾が見えて居る」

時公は、

「エツ」

と言ひつつ足許を見て何處に何處にと探してゐる。三人の姿はパツと消えた。時公は岩上に再び目を注ぐと三人の姿は影も形も無い。

時公「ヤア、又化けやがつた。今度は何だ。オイ大蛇、所望だ、一つ黄泉比良坂の桃の實の舞をやつて呉れないか。東西々々、只今岩上に現れまする太夫大蛇姫、之から黄泉比良坂の桃の實の舞を御覽に入れます」

東彦「アツハツハ、ハ、ハ、ハ、ハ」

梅ヶ香姫「ホ、ハ、ハ、ハ」

斯く笑ふ折しも、三人の娘は枯れたる萱を分け乍らシトシトと五人の前に現れ

來り兩手をついて、

三人「ヤア、貴方は三五教の宣傳使、お道の爲め、世人の爲め、御苦勞様で御座います」

梅ヶ香姫「ヤア、さう言ふ貴女は、ハザマの國の月、雪、花の三人のお娘御では御座いませぬか」

三人一度に梅ヶ香姫の顔を見て、

三人「ヤア、梅ヶ香姫さま、不思議な所でお目にかかりました。之も全く神様の御引合せ、能うマア無事で御用をして居て下さいました。お姉様の松代姫様、竹野姫様は、御壯健で御座いますか」

梅ヶ香姫「ハイ、有難う御座います。姉妹三人手分けを致しましてお道の爲め、宣傳使になつて廻つて居ります」

時公「ヤア、何ぢや、薩張り見當がとれぬ様になつて來やがった。これこれお岩さまの化け物、お梅さま何の事だ。瞞さうと言つたつて此時さんは瞞されないぞ」

女四人一度に、

「オホ、／＼、／＼、
男三人一度に、」

「ワツハ、／＼、／＼、」

時公ときこう面つらを脹ふくらし手てを組くみ俯うつむ向むいて思案しあん顔がほ。

梅うめヶ香が姫ひめ「今いま此こ處こに居あられまする御方おかたは、東雲別命しのめわけのみことの宣傳使せんでんし東彦あづまひこの神様かみさま、青雲別あをくもわけの宣傳使せんでんし高彦たかひこの神様かみさまで御座ございます。又また此方こちらに居あられる方は鐵谷村かなたにむらの酋長しうちやうで鐵彦かなひこと謂いふ。此處ここに居をられる奴さまは鐵彦かなひこさまの門番もんばんの時公ときこうさんで御座ございます。一寸妾ちよつとわたしが紹介せうかい致いたします」

秋月姫あきづきひめ「ヤアこれはこれは、存ぞんぜぬ事こととて、失禮しつれいを致いたしました。貴神様あなたさまが東彦様あづまひこさまですか、まあ貴神様あなたさまは高彦様たかひこさま、何分女なにぶんをんなの宣傳使せんでんしの事こと、宜よろしく御引立おひきたてを願ねがひます。

これはこれは鐵彦様かなひこさま、能ようまあ來きて下くださいました」

時公ときこう「何なんだ、譯わけが分わからぬ様やうになつて來きたワイ。梅姫うめひめの奴やつ、あんな別嬪べつびんに門番もんばんだの、奴やつさんだのと素破すっぱぬきやがつて、非道ひどい奴やつだ。チツト位氣くらゐを利きかしたつて宜よかりさうなものだなあ」

高彦「ヤア月、雪、花の三人様にお尋ね致しまするが、此處は大蛇の巢窟ではありませぬか」

秋月姫「ハイ左様で御座います。二三日以前に不思議にも姉妹三人は此野中で邂逅ひ大蛇の巢窟があつて種々の災をされると言ふ事を聞きましたので、これも言向け和さねば宣傳使の役が済まぬと思ひましたから、姉妹三人力を協せ俱に神言を奏上し、宣傳歌を謠ひ「チク」チクと迫つた處大蛇は大きな姿を現し涙をボロボロと零し、今後は地底に潜んで決して此處へは出て來ませぬからと誓ひましたので、鎮魂を以て再び出ない様に封じ込みました處で御座います。此クスの原や新玉原は随分お土も肥えてゐます。これから此原野に火をかけて耕作を致しましたら澤山の收穫があがり、數多の人間が喜ぶ事でせう」

東彦「ヤア貴女に功名を先んじられて仕舞ひました。何は兔もあれ結構な事だ。さあ此原野に火を放けませう」

と火打を取り出し、折から吹き來る風に向つて火を放つた。火は見る見る四方に燃え擴がり、さしもに廣き荒野原は焼野ヶ原となつて仕舞つた。

これより宣傳使一同は、鐵彦に此原野の開墾を命じ、時公は喜んで鐵彦の命に従ひ、開墾に従事し家屋を造つてこれに住んだ。五穀は良く實り蔓物は豊に、遂には大變に繁華な都が出来た。これをクスの都と謂ふ。

宣傳使一行は凱歌を擧げ、時公に別れを告げ、又もや宣傳歌を歌ひ乍ら、西へ西へと進み行くのであつた。

(大正一一・二・二八 舊二・二 北村隆光録)

第七章 露の宿〔四七四〕

東彦神、高彦神の宣傳使は、梅ヶ香姫、月、雪、花の宣傳使と共に一行六人新玉原の枯野を分けつつ宣傳歌を口々に歌つて、明志の湖の方面指して進み行く。

日は漸く西に春いて夕暮告ぐる鐘の音は仄かに響いて來た。

東彦「ヤア久し振りだ鐘の音を聞きました。最早人里間近くなつたと見えます。」

併し乍ら日も漸く暮かかりましたから、幸ひ彼方に見える森蔭で一夜を明しませ

うか

一同「さう致しませう」

と森を目當に疲れた脚を速めて進み行く。千年の老樹、梢の先まで苔蒸して晝尚

暗き、「こんもり」とした森蔭である。

東彦「ヤア月影も、星影も見えぬ天然の家の中、今宵は久し振りて悠乎と休みませう」

と云ひ乍ら、例の如く神言を奏上し、宣傳歌を謠ひ始めた。

と云ひ乍ら、例の如く神言を奏上し、宣傳歌を謠ひ始めた。

「神が表に現はれて

善と悪とを立別ける

此世を造りし神直日

心も廣き大直日

唯何事も人の世は

直日に見直せ聞直せ

身の過は詔り直せ

日の出神や木の花の

神の依さしの宣傳使

クス野ヶ原を行き過ぎて

漸やうやう此處ここに【きた】の森もり 神かみの稜威みいづも高彦たかひこや

梅うめヶ香か匂にほふ神かみの道みち 空そらに輝かがやく秋あき月づきの

心こころも清きよく照てり渡わたる 五み六ろ七くの御代みよを深雪みゆき姫ひめ

神かみの教をしへを開ひらかむと 天教てんけう山さんの橘たちばなの

姫ひめの命みことや東彦あづまひこ 世よは常闇とこやみとなるとても

神かみの守まもりは明あきけく 空照そらてり渡わたる東彦あづまひこ

東あづまの空そらを彩いろどりて 豊榮とよさか昇のぼる朝あさ日子ひこの

神かみの教をしへを【まつぶさ】に 明志あかしの湖うみの底そこ深ふかく

コーカス山ざんの峰みね高たかく 【しこ】の【かうべ】を照てらしつ

功いさをは高たかきアーメニヤ 荒振あらぶる醜しこのウラル彦ひこ

ウラルの姫ひめの荒魂あらみたま 三あな五な教ひけうの言靈ことたまに

言こと向むけ和やはす和魂にぎみたま 神かみの教をしへも幸魂さちみたま

悟さとりりの道みちの奇魂くしみたま 曲まがを直日なほひの神魂かむみたま

直日なほひに見直みなほし聞直ききなほし 醜しこの叫さけびを宣のり直なほし

空に輝く月照の

彦の命の治す世に

大足彦や眞澄姫

恵は四方に弘子の

神の力の現はれて

この世に曲は少名彦

かたき教も龍世姫

空照り渡る言靈の

姫の命の御恵に

百の民草純世姫

豊國姫の幸ひて

一度に開く木の花の

姫の命の奇魂

日の出神と現はれて

浦安國と治め行く

ウラルの山の曲神の

八十の曲津も悉く

神の息吹きに吹被ひ

被ひ清むる神の道

朝日は照るとも曇るとも

月は盈つとも虧くるとも

たとへ大地は沈むとも

ウラルの彦の曲業を

矯直さずに置くべきや

詔り直させで置くべきや

奥のわからぬ神の道

底ひも知れぬ神の恩

底ひも知れぬ神の恩

天地に響く琵琶の湖
琵琶の言靈勇ましく

進む吾こそ尊けれ
神の柱ぞ尊けれ

と異口同音に歌ひ終つて、蓑を敷き二男四女の宣傳使は、やすやすと眠に就きぬ。

森蔭より現はれた四五人の男、差足拔足宣傳使の前に近寄り來り、寢息を考へ、

甲「オイ、何奴も此奴も、よく草臥果てて潰れたやうになつてゐやがるワイ。ど

うぢや今の間にソツと頸首に綱をかけて引張つて酋長さんの所へ連れて行つたら

何うだ」

乙「待て待て、若し慌てウラル教の宣傳使だつたら、ドテライ御目玉を喰はにや

ならぬ、それより氣を落つけて調べた上の事にしようかい」

甲「それでも最前宣傳歌が聞えて居つたが、何うやら節廻しが三五教らしかつた

ぞ。月が照るとか、曇るとか云つてみたぢやないか」

丙「定つたことだ。今夜の月を見い。照つたり曇つたりしてゐるぢやないか。三

五教の宣傳使でなくても、俺等も月を見たら、照るとか、曇る位は知つとるワイ、

貴様そんなことで三五教の宣傳使なぞと思つて下手をやつたら詰らぬぞ」

丁「マア、八釜敷う言ふことはない。先方は六人だ。此方は五人、一人宛摺み合

ひしてもモ一人残つて居る。ようマア考へて見よ。衆寡敵せずと云ふことがあ

る」

甲「何を吐すんだい。此方は荒男五人、先方は男が二人に女が四人だ。俺一人で

も女だけは………」

丁「貴様の力はそんなものだ。併し乍ら貴様の家のお福のやうな女だと思つたら、

的が外れるぞ。男の一人や二人は抓んで放すやうな力がなくて、どうして天下を

廻ることが出来やうぞ。たとへ一人對一人で組み合つて見た所で、先方には一人

空手があるのだ。其奴が一人残りやがつて組み合つるとる俺等の頭をコンコンとや

りやがつたら、それこそ犬に噛まれた様なものだ。それだから多勢に無勢、衆寡

敵せずと云ふのだ」

甲「ア、衆か」

丁「莫迦にすない。愚圖々々云つて居ると、目をさましやがつたら大變だ。今の

間うちにもくべ兵衛も八公も吉公も源公も、村中むらぢうの脛腰すねこしの立たつ奴やつは、皆みな寄よつて來きて遠捲とほまきに取捲とりまいて無理むり往生わうじやうに往生わうじやうさしてやらう〃

一同いちどう「さうだ、それもよからう。オイ八公やっごう、貴様きさま一人ひとりここに見張みはりをするのだ。

俺等おれら四人よにんは手分てわけをして皆みんなの奴やつを非常ひじやう召集せうしふだ〃

丁てい「オイ待まて待まて、俺おれも一いっしよ緒しょに連つれて行ゆかぬかい。五人ごにんでさへも危あぶないのに、一人ひとり

居をつて、萬も一し中途ちうとに目めでもさましやがつたら、何どうするか〃

甲かふ「何どうするも、斯こうするも、そんな事ことは知しらぬワイ。八公やっごうが八裂やっざきに會あふ迄までの

ことだ〃

斯かく囁ささやく聲こゑに、梅うめヶ香か姫ひめはフツト目めをさまし、むくむくと起おきあがり、

梅うめヶ香か姫ひめ「ア、何いづれの方かたか知しりませぬが、水みづがありましたら一いっぱい杯あた與えて頂ちやうだい戴たいな〃

甲かふ「ナニツ、水みづくれつて。「みず」しらずの俺おれに向むかつて水みづ一いっぱい杯ちやうだい頂ちやうだい戴たいなぞと、幽いうれい靈れい

か、餓が鬼きのやうに此こいつ奴やつは一寸ちよつと可か笑わらしいぞ。ヤイコラ、幽いうれい々いうれい靈れい々れい奴めが〃

梅うめヶ香か姫ひめ「イーエ、湯ゆでなくても、水みづで結けつ構こうでございます。「れい」は後あとで〃

乙おつ「オイオイ、矢張やっぱり幽いうれいと靈れいとぢや、水みづくれと吐ぬかす筈はずぢや。逃にげろ逃にげろ。キ

ヤアー」

バラバラと足音をさせ乍ら、轉けつ輾びつ逃げて行く。

梅ヶ香姫「モシモシ、皆さま、折角御寢みになつてる所を御目をさまして濟みませぬが、妙なものが参りました、何だか吾々の首に繩をかけて引張るとか、下るとか云うてみました。チツト氣をつけねばなりません」

東彦「ナニツ、首に繩をかける。莫迦にして居る。我々を徳利と間違へやがるな」

高彦「アハ、ハ、ハ、【とつくり】と見ないから間違ふのだ。そんなことは何うでもよい。大分に疲れた。吾々も今晚は、【とつくり】と寝ようかい」

梅ヶ香姫「それでも怪しいことを云つてみました。何でも酋長に【いふ】とか、

【れい】を貰はうとか云うてみましたぜ」

東彦「そら大變だ。彼奴はウラル彦の目付かも知れぬ。油斷は大敵だ。サア、月、雪、花の三人さまも起なさい起なさい。是から戦闘準備だ」

一同は眠りをさまし、身仕度を爲し、幽かに宣傳歌を歌つてゐる。前方を見れば、ワイワイと人聲が聞えて來た。數十の松明は朧夜を照して皎々と輝き乍ら此

方に向つて走つて来る。

東彦「ヤア、捕手だ。皆さま、一人々々は面倒だ。出て来る奴を残らず言向け和

さう。宣傳使は一人旅と定つてゐるのに、妙な拍子に六人連れになつて、神様に

御叱りを受けねばよいがと心配して居た所だ。これ丈澤山やつて来れば、六人前

の仕事には澤山だ。代る代る言向け和すことにしませうかね。併し乍ら何を持

つて居るか分らぬから、氣をつけねばなりません。女の方の宣傳使さまは、吾々

の後の方に屈んで宣傳歌を歌ひなさい。二人は力一杯大聲で唸鳴つてやりませう」

群衆はチクチクと怖さうに松明を振り翳して、森を目蒐けて進んで来た。群衆

の中より一人の男、片肌を脱ぎ、稍酒氣を帯び乍ら彼方へヒヨロヒヨロ、此方へ

ヒヨロヒヨロ、千鳥足危く杖をつき乍ら、つかつかと宣傳使の前に現はれた。

男「ヤイ貴様は何處の奴だい。セ、宣傳使だろ。ここはウラル彦の神様の御領

分だぞ。三五教の宣傳使とか云ひやがつて、生命知らず奴が」

東彦「ヤア貴方は此里の御方と見えますが、我々は御推量の通り三五教の宣傳使

です」

男「コラ、俺は斯う見えても年寄りぢやないぞ。貴様のやうな強さうな面をしよつても、いつかないつかない驚くやうな爺さまドツコイ兄さまだないわ。サア、

「れい」か、幽か、正體か白状せい」

東彦「吾々は現界、神界、幽界の靈に對して」

男「ナニツ、幽界の、靈のつて矢張り怪體な奴だ。オイオイ皆の奴、幽界だ靈界だ。何を怖さうにしてやがるのだい。早う松明を持って來んかい。化物は火を

【つき】出したら消えると云ふことだ」

群衆の中より二三人の男、松明を持った儘、バタバタと男の前に現はれ來り、

「オイ、鴨、何を愚圖々々云つてゐやがるのだ。幽靈でも何でもないわ。擬ふ方

なき三五教の宣傳使だ。貴様日頃の業託に似ず、其の腰付は何だ。逃げ腰になり

やがつて尻を一町程も、後方へ突出しやがつて、其のざまつたら、ないぢやない

か。ヤアヤア三五教の宣傳使、何人居るか知らねども、どうせ六人な奴ぢやある

まい。尋常に手を廻せ」

四人の宣傳使一度に、

「ホ、可^を笑^かしいわ」

鴨公^{かもこう}「ヤアツ、ソ、それ見^みい。ホ、ほうぢや。オイオイ貴^き様^{さま}等^らばかり逃^にげて年^{とし}寄^{より}を一人^{ひとり}「ほつとく」のか」

三人^{さんにん}の男^{をとこ}「エイ八釜^{やかまし}敷^しいワイ。貴^き様^{さま}の事^{こと}どころか、捨^すてとけ、放^{ほう}とけだ」

鴨公^{かもこう}「ヤイ、待^またぬか待^またぬか」

六人^{ろくにん}の宣^{せん}傳^{でん}使^しは悠^{いう}々^{いう}として鴨公^{かもこう}の前^{まへ}に現^{あら}はれた。

鴨公^{かもこう}「コ、こら幽^{いう}霊^{れい}のバ、化^ば物^{けもの}奴^めが、俺^{おれ}を「かもう」と思^{おも}つても、さうは行^ゆか

ぬぞ。俺^{おれ}の名^なは鴨^{かも}さまだ。かもうてくれるな。ソ、それより噛^かみたければ、彼^{あつ}

方^ちに甘^{うま}い奴^{やつ}が、何^{なん}程^ぼでも居^をるワイ」

高彦^{たかひこ}「ヤア鴨^{かも}さまとやら、御^ご心^{しん}配^{ぱい}下^{くだ}さるな。我^{われ}々は化^ば物^{けもの}でも、何^{なん}でもない。三五^{あななひ}

教^{けつ}の宣^{せん}傳^{でん}使^しだ。皆^{みな}の方^{かた}を此^こ處^こへ呼^よんで來^きて下^{くだ}さい。我^{われ}々^{われ}が結^{けつ}構^{こう}な話^{はなし}を聽^きかし

て上^あげよう、盲^{めくら}は目^めが開^あき、聾^{つんぼ}は耳^{みみ}が聞^きえ、腰^{こし}の抜^ぬけた者^{もの}は腰^{こし}が立^たち、躄^{あざり}は歩^{ある}く、

それはそれは結^{けつ}構^{こう}な教^をだ」

鴨公^{かもこう}「ヤイヤイ皆^{みな}の奴^{やつ}、此^こ奴^{いつ}はヤ、矢^{やつ}張^ばり化^ば物^{もの}だ。盲^{めくら}が目^めが開^あくといひ、躄^{あざり}が

立つと云ひくさる。壁が立つても俺の腰は立たぬ。ヤイヤイ噛まれぬうちに助けぬかい助けぬかい」

宣傳使一同「アハ、ハ、ハ、オホ、ハ、ハ、ハ」

又もや群衆の中より頑丈な一人の男、鐵棒を携へ現はれ來たり、

男「何だ、宣傳使とやら、ア、ハ、ホ、ハ、と笑ひやがつて貴様こそ餘程好い阿呆だ。飛んで火に入る夏の蟲、これ程ウラル彦の目付が澤山居る所へ、ウカウカと出て來やがつて、何を偉さうに云ふのだ。これでも喰へ」

と云ふより早く、高彦の肩先目がけてウンと打つた。高彦はひらりと體を躲した。又もや鐵棒を前後左右に水車の如く振り廻してやつて來る。

東彦、高彦は右に左に鐵棒を避け乍ら、ウンと一聲靈をかけた。忽ち鐵棒は葱の如くになつた。其の男は無我夢中になつて、和かになつた鐵棒を振り廻してゐる。高彦は地上に安坐した。男は一生懸命頭上より打ち下す。

男「ヤア、俺はこの界限に名の響いた勝さまだ。何時でも負たことのない、勝つ計りだから勝さまと云はれてゐるのだ。それに此奴はこの鐵棒をこれだけ喰はし

ても素知らぬ顔をしてゐやがる。矢張り【バ】の字に【ケ】の字だ。何ぢや鐵棒が葱のやうになりやがつた」

と云ひながら一目散に駆け出さうとする。東彦はウンと靈縛を施した。勝公は足を踏張つた限り化石のやうになつて了つた。

東彦「オイ勝さまとやら、マア一時ほど懲して縛つて置かう、御苦勞だが此處にさうして居つて下さい。我々はこんな八釜敷い所に安眠は出来ないから、宿換をする。お前が來ると面倒だから硬めて置く。マア御ゆるりと、左様なら」と云ひ乍ら、一行六人は宣傳歌を歌ひつつ又もや西へ西へと進み行く。數多の村人は勝公の靈縛されしに驚いて、各自に逃げ失せ固く戸を鎖し家々の火を消し小さくなつて慄ひみたり。

北の森にと馳けついて 一行ここに眠る時

ひそびそ聞ゆる人聲に 梅ヶ香姫は目をさまし

水をくれよと「おとなへ」ば 怖けきつたる里人は

幽いぢや靈れいぢやと口くち々ぢに 走はつて何ど處こへか身みを匿かくす

暫しばくありて人ひとの聲こゑ 眼まなこをあけて眺ながむれば

提ちやう燈ちん松たい明まつこ彼かし處こ 腰こしの曲まがつた老おや爺ぢさま

酒さけの機き嫌げんで我わが前まへに 現あらはれ來きたり泡あわを吹ふく

又またもや一ひとり人ひとの荒あ男らをとこ 負まけぬ嫌きらひの勝かつさまが

鐵かな棒ぼう打うち振ふり迫せまり來くる 鎮みたま魂しづめの神かむ術わざを

行おこなひ見みれば鐵かな棒ぼうは 葱ねぎの如ごとくに柔やはらかく

打うてど打うてども應こたへぬに 肝きもを潰つぶして吾われ々われを

魔まし性やうの者ものと見み誤あやまり 恐おそれて逃にげむとする時ときに

一ちよつと寸れい靈いをばかかけてやる 忽たちまち化石くわ石せきのやうになり

脚あしを「またげた」その儘ままに 立たつて二ふたつの目めの玉たまを

きよろきよろ見み廻まはす面おも白しろさ あゝ勝かつさまよ勝かつさまよ

月つき日の如ごとき明あきかな 神かみの教をしへに目めをさませ

固かたき心こころを打うち解とけて 心こころを和やはげ氣きを和なごめ

世人よびとに清きよく交まじはれよ

汝なんぢの心こころ柔やはらがば

體からだも共ともに元もとの如ごと

自由じゆう自在じざいに「かへ」るらむ

あゝ勝かつさまよ勝かつさまよ

三五あななひけう教けうの神かみの道みち

夢ゆめにも忘わすれ給たまふまじ

吾われは是これより海うみやま山やまを

越こえて闇やみ夜よを明あか志しう湖み

明あかし暗くらしを立たて別わける

此この世よを造つくりし神かむ直なほ日ひ

心こころも廣ひろき大おほ直なほ日ひ」

と歌うたひ乍ながら、悠いっ々うとして此この場ばを立たち去さりにける。

(大正一一・二・二八 舊二・二 外山豊二録)

第二篇 意氣揚々

第八章 明志丸〔四七五〕

山川どよみ國土揺り

曲神猛ぶ常暗の

雲を晴して美しき

神代を建てて黄金の

世界を造り固めむと

黄金山に現れませる

三五教の宣傳使

東雲別や青雲の

別の命はやうやうに

百の悩みを忍びつつ

神の仕組もクス野原

男女六人の神司

荒野ケ原にめぐり會ひ

西へ西へと北の森

一夜の露を凌ぎつつ

神の教を畏みて

道も明志の湖の

こなたの郷に各自に

袖を別ちて進み行く

錦の木の子散り果てて

北風寒き冬の空

地は一面の銀世界

ゆき 行きつ倒れつ雪の路 春をも待たぬ梅ヶ香の
かきり 薫ゆかしき宣傳使 明志の湖の岸の邊に
ひと 獨りとぼとぼ着きにける。

あかしまる 明志丸は數十の船客を乗せ、今や出帆せむとする時であつた。梅ヶ香姫は急ぎ
せんちゆう 船中の客となつた。骨を裂く様な寒風はヒューヒューと笛を吹きて海面を掃き立
てる。浪に揉まれて船の動揺は刻々に激しくなつて來た。大抵の船客は寒さと怖
さに慄ひあがつて、船底に小さくなりてかぢりつく様にして居る。中に四五人の
をとこ 男は腰の瓢の栓を抜いてソロソロ酒を飲み始めたり。

かふ 甲 空は何んだか、ドンヨリとして日天様も碌に見えず、白い雲が一面に天井を
は 張つて居る。地は見渡す限り眞白けだ、青いものといつたら、此明志の湖と貴様
かほ 顔丈だ。一つ一杯グツとやつて元氣をつけたらどうだい

おつ 乙 iya 俺は下戸で………貴様一人飲んだら宜からう

かふ 甲 〇 oi 八公、貴様は飲ける口だから、お相手にして遣らう

と杓しゃくを突出つきたす。八公やっこうは杓しゃくを受取りうけとて、瓢ひたしより注ついでは飲のみ注ついでは吞のむ。だんだんと酔よひが廻まはり、

八公やっこう「オイ勝公かつこう、貴様きさまは何時いつにない悄氣しよげた顔かほしやがつて、チツト元氣げんきを出ださぬかい。北きたの森もりで宣傳使せんでんしに縛しばられやがつて、それからと云いふものは大變たいへんに顔色かほいろが悪わるいぞ」

勝公かつこう「喧やかましい云いふない。今作戦計畫いまさくせんけいかくをやつて居ゐる所ところだ。アーメニヤのウラル彦ひこの神かみさまから、北きたの森もりへ宣傳使せんでんしがやつて來くるに違ちがひないから、彼奴あいつを縛しばつて連つれて來こいと云いふ命令めいれいを受うけて毎日まいにち日夜ひにち晝よるなしに張はつて居をつた處ところ、大袈裟おほげさにも一度いちどに六ろく人もやつて來きやがつたものだから、如何いかに強がうりき力りきな俺おれも、一寸ちよつと面喰めんくらつたのだ。村むらの奴やつは何奴どいつも此奴こいつも腰拔計こしぬけばかりでビクビクと震ふるひあがつて、みんな逃にげて了しまふなり、俺おれ一人ひとりが何程なんぼ固かたくなつて氣張きばつたところで、どうにも斯かうにも仕方しかたがない、是これからお斷ことわり旁村かたがむらの奴やつの腑甲斐ふがひない事ことを、ウラルの神かみに注進ちゆうしんに行くのだ。オイ貴様等きさまらも弱蟲よわむしの中うちだ」

八公やっこう「えらさうに言いふな、靈縛れいばくとかいふものをかけられやがつて、寒空さむぞらに一日いちにち一

夜も化石の様になつて、目ばつかりギョロつかせて、見つともない涙をボロボロ垂して居たぢやないか、村の奴が居らぬと思つて偉さうに云つても、此處に證據人が居るぞ、貴様が村の者の悪い事をウラル彦に言ふのなら勝手に言へ、俺は村中の總代で、斯うやつて四人が行くのだ。貴様の缺點を全部申上げるのだから、無事に歸れると思ふな」

勝公「馬鹿を云ふな、なにほど強力無雙の勝ちやまでも、雑兵がガチガチ慄して居るやうな事でどうして戦闘が出来るか。オイ鴨公、貴様何だ、慌て一番先に宣傳使の前へ行きやつて逃腰をした時の態つたら、本當に繪にもない様な姿だ。マア喧ましよう言はずと厭でも應でも酒でも喰つて元氣を付けて、ここで一つ和合をしたらどうだ。見直し聞直し詔直しだ」

八公「コラ勝公、貴様そんな事云ふとやられるぞ。知らぬ間に三五教に魂を取られやつて、宣傳歌の様な事を吐くぢやないか。三五教と云ふ奴は、月が照るとか走るとか、雪が積むとか積まぬとか、海が覆るとか潮もない事をほざく教だ。傳染り易い奴だな、全然蟲の子孫みた様な奴だ」

勝公「ナニ蝨の子孫だ、馬鹿にするな、蝨の本家本元は勝ちやまだ。一寸見俺の頭を、一寸搦んでも一合位は養うてあるぞ。蝨と云ふ奴は生れ故郷がないと云うて悔むと云ふ事だが、其生れ故郷と云ふのは勝ちやんの頭だ。何奴も此奴も蝨をわかしやがつて、俺の頭にわいたと吐かさずに、うつつたうつつたと吐かすものだから、蝨の奴生れ故郷がないと云つて泣きやがるのだ。虚偽の世の中と云ふのは是でも能く分る」

鴨、小さい聲で、

鴨公「オイ、今あの隅くらに蓑笠を着て乗つて居る奴、どうやら宣傳使らしいぞ」

八公「さうだ水を呉れと吐かす奴だ」

鴨公「水を呉れと云つたつて、こんな鹽水は飲まれたものぢやない。米の水でも

一杯飲ましてやつて、どうだ退屈ざましに踊らしたら面白からう」

勝公は「ヨー」と言ひ乍ら、酔眼朦朧と女の方を見詰め、

勝公「ヤア占めた、ハア是で北の森の失敗も償へると云ふものだ。船の中だ、彼奴が上陸する時に我々が前後左右から、手を執り足を取り、後手にふん縛つて、ア

メニヤへ連れて行く事にしようか。兔も角酒を呑まして酔はすが一等だ

鴨公「そいつは駄目だぞ。三五教といふ奴は、酒は飲むな喰ふなと吐す奴だ」

八公「ソリヤ表面丈だ、酒喰はん奴が何處にあるかい、御神酒あがらぬ神はない

と云つて神さままでさへも酒を飲まれるんだ。其神のお使が酒を嫌ひなんてぬかす

のは、そりや偽善だ。彼奴の前で美味さうな香をさして、飲んで飲んで呑みさが

してやらう。さうすると、宣傳使が舌をチヨイチヨイ出しよつて唇を甜り出す、

そこで、オイ姐さま一杯と突出すんだ

鴨公「俺は下戸だから酒の様子は知らぬが、そんなものかいなア」

女宣傳使はムツクと立つて、宣傳歌を歌ひ始めた。

神が表に現はれて
常夜の暗を明志丸

救ひの船に乗せられて
憂瀬に沈む民草を

救はむ爲の此首途
千尋の海の底よりも

深き恵の神の恩
教へ導き北の森

堅き巖に腰かけて

茲に六人の宣傳使

息を休らふ折柄に

ウラルの神の間者

二つの眼を光らせて

窺ひ來る可笑しさよ

何れの方と眺むれば

心許りの勝さまや

蛸の様な八さまの

足もヒヨロヒヨロ鴨々と

おどして見たら腰抜かし

「かも」て呉れなと減らず口

高彦さんの鎮魂に

化石の様に固まつて

一夜一日を立暮し

妾一同の後追うて

三五教の宣傳使

取逃がしたる事由を

明志の湖の荒浪に

揉まれて進む氣の毒さ

酒の機嫌にまぎらして

互に泡を吹く風に

勝公「コラコラ何を吐しやがるのだ。女の癖に勝さまだの、蛸だの、鴨だのと、猪口才な三五教の教は善言美詞と吐して居るぢやないか、風引くも引かぬも抛つ

ときやがれ、弱味に附込む風の神さまと云つたら俺の事だぞ。此間は六人も居やがつたので、見逃しておいたのだ。今日は幸ひ貴様一人だ、焚いて喰はうと、煮て喰はうと、引裂かうと俺の勝手だ。サア、モ一つ【ほざ】いて見い、ほざいたが最後貴様の笠の臺は鱧の餌食だ」

梅ヶ香姫「ホ、ホ、ホ、ホ、勝さんとやら、末まで聞いて下さいな」

勝公「エツ、聞かぬ。此大勢の中で、勝さまが勝つたの負けたのと、恥を振舞ひやがつて男前が下がるワイ。斯うなれば意地だ、貴様に勝つたか負けたか、此處で一つ、此湖ぢやないが明志をして、俺のあかりを立てねばならぬのだ。どちらが善か悪か、明志暗しは今に分るのだ」

と言ひ乍ら、鐵拳を振上げて、梅ヶ香姫に打つて掛らうとする。此時襟髪をグツト握つて二三尺ばかり猫をつまむだ様に提げた男がある。

男「アハ、ハ、ハ、サア勝か負か明志の湖だ。此手を離れたが最後、勝は鯉の餌食だ」

勝公「マアマア、待て待て、待てと云つたら、待つたが宜からうぞ。一つよりな

い生命だ大切にせぬかい。俺でも神様の分霊だぞ。俺は貴様に殺されたつてビクともせぬ男だが、貴様が神のお宮の此方を損つたら、貴様に罰が當るから、殺すなら殺せ、地獄で仇討をしてやるから………」

男「減らず口を叩かない、一つ、貴様は酒を喰ひ酔つて大分に逆上て居るから、

調和の取れる様に、水の中へ一遍ドブ漬茄子とやつてやらうかい」

勝公「マアマア待つて下さい、同じ天の下のおほみだからだ。四海同胞だ」

男「ここは魔海死海と言うて、ここは人の死ぬ海だ。此死海へ御注文通り死海ド

ボンとやつてやらう」

勝公「オイ八、鴨、何故愚圖々々としてやがるのだ、此奴の足を攫へぬかい。此

奴を死海ドボンだ」

鴨公「態ア見やがれ、強い方へ附くのが當世だ、貴様が強いと思うて、俺等は何

時も、表向はハイハイハイ言うて居るものの、後向に舌を出してゐるのも知

りやがらずに、よい氣になつて村中で暴れ廻した其報いだ。天道さまは正直だ、

貴様がドボンとやられたら、北の村は餅搗いて祝ふぞい」

勝公「人の難儀を見て、見殺しにするのか」

八公「見殺しも糞もあつたものかい、……もしもし、何處の何方か知りませぬが、さう何時までも提げては、お手が倦いでせうから、今の死海ドボンとやらをやつて下さい」

勝公「コラ貴様までが相槌打ちやがつて、友達甲斐のない奴だ」

男「アハ、ハ、ハ、弱い奴だ、そんなら一寸また後の慰みに見合しておかうかい」

勝公「あとは後、今は今、一寸先や暗の夜、暗の後には月が出る」

八公「月は月だが運の【つき】だ、俺も貴様に愛想が【つき】た」

一人の男は勝公をソロリと船の中に下してやつた。

勝公「ヤ、有難う御座いました、お蔭で生命が助かりました」

男「ヤア、暫くお預けだ」

八公「まるで狎みたいに言はれてけつかる」

男「ヤア、これはこれは梅ヶ香姫様、不思議な所でお目にかかりました。皆の方

はどうなさいました」

梅ヶ香姫「ヤ、あなたは時さまであつたか」

(大正一一・三・一 舊二・三 松村眞澄録)

第九章 虎猫(四七六)

梅ヶ香姫は亂暴者に三方より攻めかけられ稍困りゐる、其處へ時公が現はれて勝公を懲(こら)して呉(く)れたのでヤツト胸(むね)を撫(な)で下(おろ)し、

梅ヶ香姫「ヤア時さま、よい處へ來て下さつた、五月蠅いお方で宣傳したつて聞く耳(みみ)のない蛸(たこ)の様な方(かた)ですからな」

時公「あゝ左様で御座(ござ)います。北(きた)の森(もり)の人間(にんげん)はこの界限(かいがい)でも一番(いちばん)没分曉(わからず)漢(や)の居(を)る處(ところ)ですから」

梅ヶ香姫「貴方(あなた)、【クス】野ヶ原(のがはら)の開墾(かいこん)は何(ど)うなさつたの」

時公「ヤア、開墾(かいこん)も開墾(かいこん)ですが、御主人(ごしゆじん)が……何(ど)うも梅ヶ香姫(うめがかひめ)様(さま)のお身(み)の上(うへ)が案(あん)

じられてならない、可愛い娘の生命を助けて下さった方ですから、村中の者を喚んでそれに開墾させる、お前は跡を慕って目的を達せられるまでお伴をせよ……と仰有ったので、渡りに船だ、何時までも百姓をして居るより貴方のお跡を慕って、知らぬ國を宣傳歌を歌ってぶらつくのも、時に取つての樂みと喜び勇んでやっ来て来ました處が、皆さまの行衛を見失ひもう此湖を渡つてあちらへお出でになつた事と思つて、船の中に乗込みグツスリと寢入つて居ました。處が何だかワイワイと喧嘩の様な聲に目を覺まし見れば貴方のお歌、嬉しや神様のお引合せと思つて居る矢先に、勝公とやらが暴れかけたものだから一寸惡戯をして見ました」

梅ヶ香姫「あゝ左様だつたのですか、これからこの勝さまを何うなさるの」

時公「まだ腹案がありません、何うなとする積です」

勝公「モシモシ時さま、負けて勝つのが勝さまの筆法だ、勝つて兜の緒を締めるといふ事があるが、貴方も三五教の宣傳使の強力と見えるが、唯何事も人の身は直日に見直し聞き直し、身の過ちはのり直せといふ宣傳歌を御承知か」

梅ヶ香姫「ホ、ホ、ホ、まあ勝さまの頓智の好い事」

時公「エイ仕様がな、反對に逆襲しやがつて【よう】神様を笠に被る奴だ」

勝公「それが神様の教です、矢張り神様は豪いものですなア。お神酒あがらぬ神

はないとやら、酸いも甘いもよく知つて居られる、貴方は宣傳使だから酒は飲ん

だら悪いが知らぬが、お神酒はいくらあがつても差支ありませんまい」

時公「オイオイ勝さま、何うやらお前が宣傳使の様だ、丸きり俺がお説教を聞い

て居る様だな」

勝公「それはさうですとも、三五教は天地が覆ると云つたのぢやから、天が地と

なり地が天となり天地顛倒だ。貴方は人の苦しむのを見て天として【カヘリ】見

ぬといふ調子だが地と神の慈悲といふ事を知つて居ますか」

梅ヶ香姫「ホ、ホ、ホ、たうとう勝さんも三五教に負けましたな。これから「負さ

ま」と名を改めなさい」

勝公「ハイ、大神の【まけ】のまにまに」

時公「洒落ない、この寒いのに洒落どころか」

勝公「洒落どころか、洒所だ。マア一寸酒が悪けりやお神酒でもあがつてから、

その六かしい顔を直して梅ヶ香さまのお酌を願つて一杯やつたら如何だ。さうすればお前さまの七六かしい顔も一度に開く梅の花だ。オイ八、鴨、何をクスクス笑ひやがる、此處は「クス」野ヶ原とは違ふぞ

八公「オイ勝公、上には上があるものだな。貴様が強い奴だと思つたが今日の態は何だ」

勝公「なに俺は強いのだ、向方はも一ツ強いだけの事だ」

鴨公「強い事は強いが負けばかり強い男だから可笑しいワイ」

時公「オイ勝公どつこい勝さま、お前さまは今までウラル教の手先をやつてゐたと云ふ事だが船の中では猫を被つて居て上陸したが最後、また目を剥き爪を立てて虎猫の眞似をするのぢやないか」

勝公「トラ」、猫から分りませんな。併しながら人は神の子、神の宮だ、勝さ

まの身魂の中へ木花咲耶姫さまがお鎮まりになつて仰有るのだ。勝さまは矢張り勝さま、懸つた神さまは神さまだ。私の肉體を拜むと思つたら當が違ふが、神さまを拜むと思つてサアサア梅ヶ香さま、時さま、拜んだ拜んだ。有難いぞ、勿體

ないぞ、何でもよう聞かはるぞ、お神酒を供へぬか

時公「馬鹿にするない、此花も彼の花もあつたものかい。獅子舞の様な【はな】

をしやがつて【ハナ】ハナもつて不都合千萬だ

勝公「餘り寒いので冷酒も氣が利かぬから一寸火を入れて神懸りになつたのだ」

一同「アハ、、、」

梅ヶ香姫「オホ、、、」

勝公「ア、、、とか、ホ、、、とか餘り【アホアホ】と云つて呉れない。皆

寄つて集つてアホアホ云ふ聲がゴツチャになつて仕舞つて面白くもない。此間も

三五教の宣傳使の北光の神とかが北の森で小六かしい説教をして居た其時に、世

の終りが来て、世間の人間が今叶はぬと云ふ最後の五分間になると、色々の宗教

を信仰して居る者も信仰せぬ奴も叶はぬ時の神頼みと云つて、夫々の宗教を拜む

聲が一ツになつて、南無アーメン法蓮陀佛、とほかみゑみため、助け給へ、かん

ながら妙々と聞えるので神さまも何れが何うだか聞くのに困るから、世間の奴が

助かりたい助かりたいと一ツになつて、「かむながらたまちはへませ」と云ふ聲

の聞える奴だけ助けてやると云うて居た、それと同じ傳だ。一時に聲を揃へてアホアホと俺を云うたところで、足竝がドツコイ舌竝が揃はぬものだから、間の抜けた顔をして笑ふのだろ。ホントにあほらしい」

八公「オイオイ勝公、そない怒るな。あの海上を見、貴様の友達の「アホ」鳥が羽を擴げて空中を自由自在に翔廻つて居るぢやないか。あいつはアホ鳥と云ふけれど字で書くと信天翁だ」

勝公「ヤアよく「のり」直して呉れた、天教山の神の教を信ずる翁だ、白い髭は生えて居らぬけれど、やがて「オキナ」手柄をして歸つて來る瑞祥だ。オイ八公、鴨公、貴様も信天翁になつて今までのウラル教を掌を覆した様に打遣つて、三五教の信者となつて、いよいよコーカス山に悪魔退治と出掛けたら如何だ」

八公「貴様が改心する程だから屹度良い教だらう。貴様から宣傳使さまに願つて呉れないか」

勝公「願ふも頼むもあつたものか。宣傳使様は神のお使だから、直接に貴様が神さまに願つたら可いのだよ、ナア梅ヶ香姫様、勝公の申す事は間違つて居ますか」

梅ヶ香姫うめがかひめ「それでよろしい、マアマアようそんな氣きになつて下さいました。神様かみさま

は有難ありがたいお方かたです」

時公ときこう「三五教あななひけう、萬歳ばんざい………」

かく話す折をりしも、船ふねは西岸せいがんの「タカオ」の港みなとに安着あんちやくしたりけり。

(大正一一・三・一 舊二・三 池澤原次郎録)

第一〇章 立聞たちぎき〔四七七〕

梅ヶ香姫うめがかひめは時公ときこうに送おくられて、寒風かんふう荒あぶ荒野あれのがはらヶ原がはらを勇いさんで進すすみ行く。勝公かつこう以下いか四

五ごの連中れんちゆうもゴロゴロと後あとを追おうて來くる。傍かたはらの猪小屋ししこやを見みつけ一同いちどうは此處ここに休息きうそくす

る事こととはなりぬ。

勝公かつこう「酒さけの氣けもなく何なんとなくさむしくなつて來きた。見渡みわたす限かぎり青あをい物ものと云いつた

ら一つひとつもなし、天てんも地ちも綿わたを敷しきつめた様やうな眞白まっしろな世よの中なかだ、斯かうして見みると天てん

地の間に黒い物と云つたら、八公と鴨公の顔だけ位のものだ

八公「お前の顔は白いからなア」

勝公「定つた事だい、まだ三五教の宣傳使は素人だもの白いは當然だ」

鴨公「知らぬ者の半分も知らずに俄に白を切りやがつて、白々しい白鷺が孔雀の

眞似したつて遽に玉は出来はせぬぞ

勝公「ヤア其孔雀で思ひ出したが、これから少し向ふに行くと、黒野ヶ原といふ

處がある。今は雪で何も彼も白野ヶ原ぢやが、其處には孔雀姫といふド偉い化物

が居つて、其處を通ると誰も彼も皆吸ひ込まれて了ふと云ふ評判だ。ウラル教の

奴でも三五教の奴でも孔雀姫に一寸睨まれたが最後、皆誑されて一人も歸つて來

る者がないと云ふ事だ

時公「ヤアそれは本當か、孔雀姫といふからには、随分綺麗な女だらう。一體何

を食ふのだ」

勝公「それや定つた事よ。人間を喰ふのだ。俺の様な黒い人間でも孔雀姫にかか

つたら皆喰はれると云ふ事だ」

時公「そいつは面白い、綺麗な顔をしゃがつて人間を喰ふなぞと鬼娘かも知れないよ。」「其聲で蜥蜴食ふかや時鳥」だ。世の中が斯う物騒になつて來ると、彼方にも此方にも金毛九尾の狐や八岐の大蛇がはばりやがつて、何處にも此處にもさういう鬼が現はれて來るもんだ。俺の様に、人でも取つて喰ひさうな怖い顔した奴には本當の悪はないもんだ。美しい顔した奴に人殺しをしたり人を欺いたりする奴が却て多い、約り悪魔は善の假面をかぶつて世の中を亂すものだからな」

勝公「時さま、一ツ肝玉をおつ放出して、孔雀姫の正體を調べて見やうか。何が化けて居るのか知れやせぬぜ」

時公「お前は雪隠の端の猿食はずと云ふ柿の様な男だから、滅多に孔雀姫だつて味が悪いから食ふ氣遣ひはないわ。猿食はずといふ柿は澁くて汚くて細かくて食へぬ奴だからな」

勝公「コレコレ時さま、宣り直しなさい」

時公「また琵琶の湖へ行つて、綺麗な船に乗り直さうかい、俺の様な味のある男は、一寸險難だ。ナア梅ヶ香姫さま、あなたクス野ヶ原で高彦さまを食つて下さ

いと云つたら、イヤイヤ時さんの方が男らしくて色がコツクリ黒くて肉がボテボテして甘さうだから、時さんを食べさして頂戴なんて仰有った、本當に梅ヶ香さんに食つて欲しいわ」

勝公「こんな所で惚けない。餘り惚けるとソレ又大蛇の先生がノコノコとやつて来るぞ」

時公「大蛇姫でも明志丸でも何でも構はん、ノロリノロリと考へてゐる抜け目のない兄さまだ。貴様の様な野呂間とは、ちつとは違ふぞ」

勝公「野呂間とは何だ、宣り直せ。人をノ口はば穴二つだ」

時公「二つも一つも穴があつて堪らうか、あな有難き三五教の宣傳使だ」

一同「アハ、ハ、ハ、ハ」

梅ヶ香姫「皆さまは氣樂な方ですな。貴方方と一緒に歩いて居ると、マルデ天

國の旅行見たいだわ」

鴨公「さうでせう。私の様な抜け目のない、程の宜い、痒い處に手の届く男が加

はつて居るのですから満雪途上黒一點だからねえ」

時公「アハ、ハ、笑はしやがる。萬綠叢中紅一點の梅ヶ香様がござると思つて、

此奴顔の皺を伸ばしやがつて、はしやいで居るな」

勝公「そんな雑談は一切りにして行かうかい。これから梅ヶ香さまに幾層倍とも

知れぬ美しい孔雀姫の顔拜見だ。こんなくだらぬ話をしやべつて居ると、又ノ

口ノ口がやつて來るぞ。此世でさへも限換るとか、立替とかがあるさうだのに限

りのない話を止めて愈膝栗毛の立替立直しだ。サア進め進め。何處も彼處も大雪

で、ゆきつまりだ、詰りて詰らんのは俺の所計りではない。節季になると俺の處

の様なつまらぬ家に詰つてるのは、掛取り計りだ。サアサア、驅け足驅け足。節

季になつても拂ふものがないから雪でも拂つて行かうかい」

勝公は先に立つて道あけをする。梅ヶ香姫の一行は雪道を踏みしめながら、轉

けつ輾びつ孔雀姫の隠家の前に近寄つた。

時公「オイ勝公、サアサアこれからが戦場だ。貴様先陣を承はつて先ず第一に孔

雀姫に食はれるのだ」

勝公「ヤア俺は雪隠の端の猿食はず、俺の様な者が行つたつて孔雀姫は肘鐵砲だ。

太鼓の様な印を捺した様なものだ。それよりも時さま、梅ヶ香さまなら食つて欲しいと云つたでないか。孔雀姫に食はれるのも光榮だぜ」

時公「何が光榮だ。貴様の方が良く肥えてるわ、斯ういふ時には製糞器が調法だ。

此頃は雪が降るので人通りが少いから孔雀姫も飢ゑて「かつ」かつとして待つて居る、詔へ向だ。其處へ勝公がやつて行けば、カツしては盗泉の水を飲むのだ。

イヤ茲で一つ梅ヶ香さまは除外例として四人が其犠牲者の選挙をやらうかい。當選した奴が犠牲になるのだ」

鴨公「一騎當千の勝さんに、行つて貰はう。人の選挙を頭痛に病んでも仕方がないからなあ」

かく無駄口を言ひながら、孔雀姫の館の前にピタリと行き着いた。梅ヶ香姫は手眞似で一同を制し、門の戸に耳を當てて中より洩れ来る微な聲を聞き不審さうに首を傾けて居る。

勝公「モシモシ宣傳使さま、何を思案して御座る。何ぞ人の骨でも齧る音がいたし、ますますかな」

梅ヶ香姫「サア一寸合點がゆきませぬ、聞いた事のある様な聲でウラル教の宣傳歌を歌つて居る様です」

勝公「ヤア夫れは妙だ。矢張りウラル彦の手下の曲神だな、ドレドレ勝さまが聞いて見ませう。梅ヶ香さま一寸退いて下さい」

と云いながら門の節穴に耳を當てて、

勝公「ア、聞えた聞えた、オイ、八公、鴨公、偉い事を云つて居るぞ。曲神といふ奴はエライものだ。何でも彼でも「ちゃん」と知つて居やがる」

鴨公「どんなことを云つて居るのだ。一寸聞かして呉れ」

勝公「聞かすも聞かさぬもあつたものかい。孔雀姫の奴が尖つた嘴をしやがつて、羽をパアと擴げて、カカカモ、カモコカモコ、イヤイヤ ヤツヤツ八公カモカ、八ツ下つて腰が空だ。カモト八と一緒に食はうかクク、なんて、ほざいて居やがるのだ。タツタ今門がギーと開いたが最後、貴様二人は苦寂滅爲樂、頓生菩提氣の毒なりける次第なり」

鴨、八「アンアンアン、オンオンオン」

勝公かつこう「男をとこらしくない、何をなに吠ほえるのだ。見みつともないぞ」

鴨公かもこう「天てんにも地ちにもたつた一つの御命おいのち、定めなき世よと云いひながら今いま此處ここで命いのちを取とられると思おもへば之これが泣なかずに居をられようか、泣ないて明志あかしの捨小舟すてをぶねと取りつく島しまがな
いワイヤイ。アンアンアンアン」

八公やっこう「オーンオーンオーンオーン」

勝公かつこう「アハ、、、嘘うそだ嘘うそだ、鯉節かつぎしが食くひたいと云いつて居ゐるのだ。鯉節かつぎしは、即ちすなは所謂いはゆる、取りもなほさず、へん此勝このかつさんだ。淡雪あはゆきの様な肌はだでお月つきさま様の様やうな眉まゆで緑みどりの

滴したたる様な目めでオチヨボ口くちで此勝このかつさまを食くひたいと仰おつしや有あるんだい、イヤもう時節じせつは待またねばならぬものだ。烏からすの嫁よめに孔雀くじやくひめ姫ひめだ、アハ、、、」

鴨公かもこう「勝公かつこうの奴やつ、人ひとの膽玉きもたまをデングリ廻まはしやがった。よう悪戯いたづらをする奴やつだ」

勝公かつこう「俺おれの言靈ことたまは偉えらいものだらう、悉ことごとく玉たまの宿換やどがへをさす天下てんか無比むひの言靈ことたまだよ」

時公ときこう「ドレ俺おれが一ツ聞きいてやらう」

とまたもや門かど口の節穴ふしあなに耳みみを當あてた。

時公ときこう「ヤアこいつは素的すてきだ。鶯うぐひすの様な【ハンナリ】とした涼すずしさうな、亂みだれ髪がみで

はないが、云ふに云はれぬ、とくに解かれぬ門内の光景、成る程これでは此門前を通つた奴は、知らず識らずに酔はされて吸ひ付けられるのは當然だ
(大正一一・三・一 舊二・三 藤津久子録)

第一章 表教(四七八)

門の戸、細目に開いて一寸覗いた美人は、満面笑を湛へ白き優しき手を伸べて、一同に向ひ手招きをし乍ら早くも門内に姿を隠したりける。

時公「ヤア孔雀姫とか聞くからには、別嬪だらうとは思つて居たが、思つたよりも幾層倍の別嬪だ。一瞥克く天地を覆へすと言ふ絶世の美人だ。大抵の者はあの目で一寸視られたが最後、腰も何も「フニヤ」フニヤになつて仕舞ふだらう。俺も如何やら腰の具合が變になつて來たぞ」
梅ヶ香姫は何か確信あるものの如く泰然としてニコニコと笑ふ。

勝公「ヤア梅ヶ香姫の宣傳使も綺麗と思つたが、貴方のニコニコより彌勝るニコニコだ。一寸こちらを向いてニタニタと笑つた時は、こちらもシタシタと思つたよ。舌々八舌々八舌だ」

鴨公「コレ時さま、お前も腰が變になつたか、俺も變だ」

時公「貴様の腰は抜けたのだ、生憎鮮も無し、困つた事だ」

八公「丸で人を猫みた様に云ひやがる、二進も三進も、斯う腰が抜けては動けたものぢやない」

時公「俺たちは悠然と孔雀姫に御對面遊ばして結構な御待遇に會うて来るから、まあ悠然腰でも下し、ドッコイ抜かして其處中の雪を孔雀姫の白き顔と思つて見てゐるが良いワイ。サアサ、梅ヶ香姫さま、お這入りなさいませ、お見掛通りの茅屋で御座いまするが、これが妾の住家、お心おき無う、ゆるゆる御逗留なして下さいませ」

勝公「オイ時さま、何を言ふのだ、見つともない、腰をペコペコさして大きな口を「オチヨボ」口にしたりつて振ひ付きはせぬぞ」

時公ときこう「マア八釜やかましう言いふない。孔雀姫くじやくひめさまの代かはりを勤つとめてるのだ」

此時このとき、館やかたの中なかより、

飲のめよ騒さわげよ一寸先いっすんさきや暗やみよ

闇やみの後あとには月つきがで出でる

と言いふ女をんなの清すずしい聲こゑが響ひびいて來きた。

勝公かつこう「ヤア、此奴こいつは豪氣がうきだ、矢張やっぱりウラル教けうだ、斯かうなつて來くると三五教あななひけうも餘あんなまり

幅はばが利きかぬ。オイオイ八公やつこう、鴨公かもこう、安心あんしんせい、此處ここはウラル教けうだぞ、貴様きさまたちの

幅はばが利きく處ところだ。ハイ梅うめヶ香かさま、お生憎あひにく様さま、三五教あななひけうでなくて、怨うらめしいウラル教けう、

へん、濟すみませぬな、貴方あなたは門もんの外そとに立たつて居ゐなさい。サアサ、八やつ、鴨かも、心配しんぱいい

らぬ、出でて來こい出でて來こい」

八やつ、鴨かもは此聲このこゑに力ちからを得えて抜ぬかした腰こしを立て直たし、

八やつ、鴨かも「何なに、ウラル教けうか、そいつは面白おもしろい」

と肩臂かたひぢを怒いからして門内もんないに進すすみ入いる。

時公「アハ、、、、、現金な奴だ。これだから貴様の改心も當にならぬと言ふのだ」

勝公「叶はん時の神頼みだ」

と言ひ乍ら勢よく表戸を開けて、

勝公「ヘイ、御免なせい、私は北野の村の勝公と言ふウル教の目付けやくでげす。

今三五教の宣傳使を生捕つて來ました、ちよつくら一寸、手剛い奴だから應援を

お頼みます。折角の玉を取り外したら、お「たまり」零しがありませぬから」

梅ヶ香姫「ホ、、、、勝さま、心配して下さるな。逃げも隠れも致しませぬ。妾

の言靈で美事歸順させて見せませう」

勝公「ヘン、仰有るワイ」

と言ひ乍らドシドシと我家へ歸つた様な心持で奥に進み行く。

一同は勝公の後に跟いて行く。餘り廣き家ではないが、小「ザツパリ」とした

座敷がある。其處に當の主人公たる孔雀姫は一絃琴を前に置いて坐つて居る。梅

ヶ香姫は一目見るなり、

梅ヶ香姫「ヤア、貴方は、ま……………」

と言ひかけて俄に口を袖に包んだ。

勝公「これこれ、梅ヶ香さま、ウラル教の孔雀姫さまに「貴女はまア」だとは何

と言ふ失禮な事を仰しやる。魔でも何でもない、結構な神さまだ」

時公「ヤア、一寸孔雀姫さまとやらにお尋ねしますが、路傍傳ふる所に依れば、

貴女は此處を往來する人間を誰も彼も皆、喰つて仕舞うと言ふ事だが眞實に喰ふ

のですか」

孔雀姫「ハイ妾は往來の人を老若男女の區別なく噛んで呑む様に【言ふ】て上げ

て………」

八公「エ、何と、噛んで呑む、湯であげて丸で章魚を茹でる様にするのですな。

熱い湯の中に入れて茹でられて、丸で【コロモ】揚げにしられて、噛んで呑む様

にするのだなぞと、丸でウラル彦の守護神八岐の大蛇の御化身ですか」

孔雀姫「ホ、、、、、」

勝公「貴女はウラル教でせう。私はウラル教の目付役、斯う云ふ【ケチ】な野郎

ですが、お見知り置き下さつて何卒、可愛がつて使つてやつて下さいませ」

孔雀姫「妾はウラル教では御座いませぬ」

勝公「エ、何と、ウラル教でないと、そんなら何教で御座いますか」

孔雀姫「オモテ教です」

勝公「ハアハ、疊の様な名ですな、疊が破れて仕替へ度いと始終オモテゐる、私も魂が何だか變になつたから仕替へて貰ひ度いとオモテゐる、さうするとウラル

教とは如何な關係があるのですか」

孔雀姫「ウラ、オモテです、畢竟反對の教です。ウラル教のお方が見えたら片つ

端から啗んで嘔めて……」

勝公「もしもし私もオモテ教になりまする、今までウラル教は、面白く無いと思

つて居た處」

時公「ハ、ハ、現金な奴だな」

勝公「心機一轉だ、刹那心だ、こんな切ない思ひをした事はないわ。案に相違の

裏、表、根っから葉っから譯が分らぬ様になつて仕舞つた」

時公「モシモシ梅ヶ香さま、貴女は何處ともなしに此處の御主人に能く似てゐら

る、表、根っから葉っから譯が分らぬ様になつて仕舞つた」

つしやる様だ。貴女もクス野ヶ原で一寸化け損なつた様だが、あの魔とは違ひま
すかな」

梅ヶ香姫「マアマア宜しい」

時公「マアマア宜しい」なんて魔は悪いにきまつたもんだ、アタ魔の悪い、斯

んな處にマゴマゴとして居つたら如何な目に遭ふやら知れやしない」

梅ヶ香姫「世界に鬼はありませぬ。先づ先づ氣を落ちつけなさい」

時公「梅ヶ香さまは何だか妙な目遣ひをして、此處の魔神さまと以心傳心とか言

ふ様な事をやつて居ましたな」

梅ヶ香姫「ホ、ホ、ホ、」

勝公「こいつは變だ、オイ八公、鴨公、此奴は三五教の「やつかも」知れんぞ」

八、鴨「八も鴨も三五教と違ふワイ、オモテ教だ」

時公「貴様、俄に掌を覆してオモテ教だなんて寝返りを打つた處で【大持て】に

【もてる】氣づかひは無いぞ」

八公「神が表に現はれて善と惡とを立別ると言ふ事があるぢやないか、これは

【ヒヨツト】したら三五教の一派かも知れぬぞ
梅ヶ香姫は「スツク」と立つて宣傳歌を歌ひ始めた。
(大正一一・三・一 舊二・三 北村隆光録)

第一二章 松と梅〔四七九〕

梅ヶ香姫 黄泉の島の戦ひに 桃の木實と現はれし

松竹梅の宣傳使 天教山に驅あがり

神の御言をかしこみて 四方の雲霧吹き拂ひ

日の出の御代に照さむと 一度に開く木の花の

霜を凌いで咲き匂ふ 名さへ目出たき梅ヶ香の

姫の命の宣傳使 駱駝の背に跨りて

アシの沙漠さばくを打渡りうちわたり
クス野ケ原のがはらの枉神まががみも

天津祝詞あまつのりとの神言かみごとに
服まつろはさむと進すすみ來くる

神かみの稜威みいづも高彦たかひこの
三五教あななひけうの神かむづかさ

月雪花つきゆきはなの三柱みはしらに
新玉原あらたまはらに巡めぐり逢あひ

こここゝに逢あふ瀬せを喜よろこびつ
東雲別しののめわけの東彦あづまひこ

鐵谷村かなたにむらの時ときさまと
三人みたり逢あうたり六柱むはしらの

心こころも清きよき一行いっかうは
西にしへ西にしへと北きたの森もり

雪踏ゆきふみわけて進すすみ來くる
雪ゆきより清きよき神かみの子こは

コ―カス山ざんの枉神まががみを
打うち拂はらはむとめいめいに

右みぎや左ひだりに手分てわけして
明志あかしの湖うみに只ただ一人ひとり

進すすみ來きたれる折柄をりからに
跡追あとひ來きたる時ときさまの

從神みともの神かみに助たすけられ
孔雀くじやくの姫ひめの枉神まががみを

只一言ただひとことの言ことの葉はに
神かみの大道おほぢに導みちびきて

助たすけやらむと來きて見みれば
思おもひもかけぬ孔雀くじやく姫ひめ

神 <small>かみ</small> の教 <small>をしへ</small> のかがやきて	みるくの御世 <small>みよ</small> を松代姫 <small>まつよひめ</small>
姫 <small>ひめ</small> の命 <small>みこと</small> の住處 <small>すみか</small> ぞと	さとりし時 <small>とき</small> の嬉 <small>うれ</small> しさよ
さはさりながら竹野姫 <small>たけのひめ</small>	姉 <small>あね</small> の命 <small>みこと</small> は今 <small>いま</small> いづこ
雪積 <small>ゆきづ</small> む野邊 <small>のべ</small> を彼方 <small>あち</small> 此方 <small>こち</small> と	さすらひ給 <small>たま</small> ふか痛 <small>いた</small> はしや
嗚呼 <small>あ</small> 姉 <small>あねうへ</small> 上 <small>あねうへ</small> よ姉 <small>あねうへ</small> 上 <small>あねうへ</small> よ	天 <small>あま</small> の岩戸 <small>いはと</small> の開 <small>ひら</small> くごと
心 <small>こころ</small> も晴 <small>は</small> れし今日 <small>けふ</small> の空 <small>そら</small>	八十 <small>やそ</small> の曲靈 <small>まがひ</small> を言 <small>こと</small> 向 <small>む</small> けて
功績 <small>いさを</small> も高 <small>たか</small> きア一 <small>たか</small> メニヤ	神 <small>かみ</small> の都 <small>みやこ</small> を立 <small>たて</small> 直 <small>なほ</small> し
天教 <small>てんけう</small> 地教 <small>ちけう</small> の山 <small>やま</small> に在 <small>ま</small> す	野立 <small>のだち</small> の彦 <small>ひこ</small> や野立 <small>のだち</small> 姫 <small>ひめ</small>
高照 <small>たかてる</small> 姫 <small>ひめ</small> のおん前 <small>まへ</small> に	勳功 <small>いさを</small> をたつる常磐木 <small>ときはぎ</small> の
色 <small>いろ</small> も妙 <small>たへ</small> なる松代 <small>まつよひめ</small> 姫 <small>ひめ</small>	神 <small>かみ</small> の世 <small>よ</small> 松 <small>まつ</small> の世 <small>よ</small> みるくの世 <small>よ</small>
松 <small>まつ</small> の神世 <small>かみよ</small> に因 <small>ちなみ</small> たる	姉 <small>あね</small> の命 <small>みこと</small> のいさをしを
喜 <small>よろこ</small> び祝 <small>いは</small> ひ奉 <small>たてまつ</small> る	

と歌うたつて座ざに着ついた。

八は小聲で、

「おいおい、勝公、鴨公、どうやら、こりや風が變つて來た様だぞ。貴様は明志丸の中で弱味につけこむ風の神だとか、風を引いたとか引かぬとか、吐いて居やがつたが、こいつは又つけたいな、風の神かも知れぬぞ」

勝公「「かつかつ」ながら、どうも怪しいものだな、美しい宣傳使だと思つて居たら、孔雀姫の妹だつて。きよるきよるして居ると最前の様に茹であげて、噛むで食ふと吐かしたが、本當かも知れぬぞ」

時公「サア勝公、どうだ。貴様の刹那心を聞かうかい、心機一轉はどうだ」

「心機一轉どころか、神經興奮だ。オイオイ時さま、道連の誼で一つ御斷りを申上げてくれぬか」

時公「斷りは斷りだが、そんな事は時さまの方から平にお斷りだ。どうで貴様は北の森で三五教の宣傳使を苦しめた奴だから、其お禮返しだ。マア覺悟をしたがよからう。人間は刹那心が大事だ。なんぼ切なくても觀念せい」

勝公「第一着に苛めた奴は鴨公だ、その次が八公で、第三番目が此勝さまではな

「ワイ。モシモシ松代姫さまの孔雀姫さま、私は一寸も知りませぬ、茹でて喰ふのなら八ツ足の蛸か鴨が味がよろしい。私の様なものをおあがりになつても、
【かつ】かつして、岩を噛む様であんまり美味はありませぬぜ」

時公「ハ、ハ、ハ、アハ、ハ、ハ、ハ」

梅ヶ香姫「オホ、ハ、ハ、ハ」

松代姫「ヤア皆さん、よう来て下さいました。うまい都合です。鯉だとか、鴨だ

とか、蛸だとか、本當においしさうな御名の方ですな」

時公「噛んで食ふ様に云うてあげて下さりませ。さうせぬとなかなか此奴は頑固

な男で腹へは這入りませぬ」

勝公「コレコレ時さま、要らぬ事を云うて智慧を付けてくれない、化物の腹の中

へ這入つてたまるものか。お前が居ると危なくて、【はら】はらするワイ、腹の

立つ奴だ。アーアー、夢か現か鬼か蛇か、我身に來る災難を被ひ給へ清め給へ」

時公「ウハハ、ハ、ハ、ハ、モシモシ孔雀姫様、貴方と梅ヶ香姫さまと三人よつて、一

つ宛頂戴しませうかい。孔雀が鴨を食ふのは鳥同志で共喰になつて面白くないか

ら、時さまが鴨をいただくなり、お梅さまはちよつと酸い名だから、八足の八公を三杯酢につけて食ふなり、松代姫様は勝公をおあがりなさい、松の魚は鰹だ。

丁度誂へ向きの獻立だ。アハ、ハ、ハ、

勝公「おい時さま、一體どうだ、本當にお前食ふつもりか。何だか變な奴だと思つて居たら貴様ら二人は俺達を計略にかけて、斯んな魔窟へ連れて來やがったのだな。もう斯うなる上は死物狂ひだ。サア時公、時の間も猶豫はならぬぞ。此奴はアルタイ山に住んで居る悪い奴かも知れぬぞ。此勝さんが貴様の【どたま】を【かつん】とやつてやるか、もう仕方がない破れかぶれだ。八は此奴を八裂にするなり、此方から反對に【かも】うかい。のー鴨公」

時公「馬鹿だなあ、みんな嘘だよ。なんでも最前の宣傳使の歌を聞けば、姉さまらしい、よく御顔を視くらべて見よ。少しおからだが大い様だが、眼から鼻から口の工合からまるで瓜二つだ、マア安心せ、滅多に食はれる氣遣ひはない」
勝公「腹の悪い男だ、人の肝玉をひつくり覆しやがった。オイオイ八公、鴨公、もう大丈夫だ」

時公ときこう「肝玉きもたまがひつくり覆かへつたのぢや無なかろう、貴様きさまの刹那心せつなしんで正念玉しやうねんだまがひつくり覆かへつたのだ。オイ、ま一遍いっぺんひつくり覆かへして、萬劫末代まんがふまつだいもう覆かへらぬ様に三五教あななひけうに歸き依えするか」

勝公かつこう「するとともに、味噌みそもすれば白うすもする。もう是これから、此處ここの味噌摺みそすりやつ奴こになつて使つかうてもらはうかい」

松代姫まつよひめは「にこ」にこしながら立ちあがり、宣傳歌せんでんかを歌うたひ始はじめた。

松代姫まつよひめ「常磐堅磐ときはかきはに動うごきななき みるくの御世みよを建たてむとて

日ひの出神でのかみや木この花はなの 神かみの教をしへをあななひて

荒野あれのがはらヶ原ををひらき行ゆく 松竹梅まつたけうめの宣傳使せんでんし

ウラルの彦ひこの枉神まががみの 醜しこの荒すさびを治をさめむと

竹野たけのの姫ひめはコーカスの 深山みやまを指さして出いで行ゆきぬ

妾わらはは暫しばし孔雀野くじやくのの 雪ゆきかきわけて世よの人の

心こころの暗やみを照てらさむと 往來ゆききの人の松代姫まつよひめ

光眩ゆき玉銚の道踏み分けて今ここに
 孔雀の姫と身をやつし 青人草をことごとくに
 神の御國に救ひつつ 常夜の暗の岩屋戸を
 開く常磐の松代姫 待つ甲斐ありて我が慕ふ
 梅ヶ香姫に今ここで まめな姿を三つの桃
 大かむづみの神業を 照す時こそ來りけり
 常磐堅磐の時さまよ 曲のみたまの盛り居て
 天に勝つてふ勝さまよ 天定まれば人に勝つ
 八の島根の八しま國 八さま鴨さま諸共に
 三五の月の御教に 心を照せやひら手を
 拍ちて御神を讃へかし あゝ梅ヶ香よ梅ヶ香よ
 神の稜威も一時に 開く常磐の松代姫
 時を移さず時さまと コーカス山に驅けのぼり
 猛き曲津に悩み居る 竹野の姫の神業を

翼^{たす}けあななひ奉^{まつ}るべし 天^{あめ}と地^ちとは祭^{まつ}りあひ
相^{あひ}み互^{たがひ}に神^{かみ}の道^{みち} 誠^{まこと}を一つ^{ひと}の松^{まつ}代^{よひめ}姫^め
ここに五^ご人^{にん}のいづみたま 雪^{ゆき}より清^{きよ}き眞^ま心^{こころ}の
いきを合^あはして進^{すす}むべし 雪^{ゆき}より清^{きよ}き眞^ま心^{こころ}の
いきを合^あはして進^{すす}むべし 雪^{ゆき}より清^{きよ}き眞^ま心^{こころ}の
いきを合^あはして進^{すす}むべし

時^{とき}公^{こう}「ヤア是^{これ}で何^{なに}も彼^かも、春^{はる}の雪^{ゆき}と疑^ぎ問^{もん}がとけて了^{しま}つた。とけて嬉^{うれ}しい相^{あひ}生^{おひ}の、
松^{まつ}にまつたる神^{かみ}世^よの初^{はじ}まり、開^{ひら}くは梅^{うめ}の花^{はな}ばかりではない、俺^{おれたち}達^{たち}の心^{こころ}も【さらり】
と開^{ひら}いた。サアサア皆^{みな}さん皆^{みな}さん、早^{はや}くこの場^ばを開^{ひら}いた開^{ひら}いた」
松^{まつ}代^{よひめ}姫^めは梅^{うめ}ヶ香^か姫^{ひめ}と共^{とも}にコーカス山^{さん}に向^{むか}ふ事^{こと}となつた。さうして勝^{かつ}公^{こう}は此^{この}館^{やかた}に
留^{とど}まつて、一^{いつ}生^{しやう}懸^{けん}命^{めい}に三^{さん}五^ご教^{けう}の宣^{せん}傳^{でん}歌^かを歌^{うた}つて枉^{まが}神^{かみ}を言^{こと}向^{むけ}和^{やは}す事^{こと}となつた。
時^{とき}公^{こう}、八^{やっ}公^{こう}、鴨^{かも}公^{こう}は二^{ふた}人^{たり}の宣^{せん}傳^{でん}使^しに隨^ず従^{じゆう}して、威^ゐ勢^{せい}よくコーカス山^{さん}に向^{むか}ふ事^{こと}と
なつた。

(大正一一・三・一 舊二・三 井上留五郎録)

第一三章 轉腹〔四八〇〕

松代姫が、妹の梅ヶ香姫に面會したる嬉しさに歌を歌つて居る眞最中、表門に現はれたる黒頭巾を被つて手に十手を持つた男、門内の様子を窺ひながら、

甲 〇 オイ俺達もアーメニヤのウラル彦の盤古神王から命令を受けて此處に捕手に向つたのだが、どうも内の様子が怪しいぞ。ぐじやぐじや一人ぢやないらしい、何でも五六人の聲がして居る。一人の「ぐじや」ぐじや姫でさへも、こんな荒男が五人も出て來な手に合はぬのに、五六人も居るとすれば一寸容易に手出しは出來ない、なんぼ「ぐじや」ぐじや姫でも一寸ぐじやりとは仕居らぬかも知れぬ」

乙 〇 貴様何を吐すのぢや、ぐじやぐじや姫ぢやと云ふ事があるか、くしやくしや姫だ」

丙 〇 馬鹿云ふな、「九尺姫」と云ふのだ、貴様のとこの嬢も九尺二間の破れ家に、棟つづき小屋に暮して、九尺々々吐かして居るが、マアあんなものだらうかい」

丁 〇 さあ、くしやくしやと惡口を云うと、今頃にや、貴様のところのお鍋が、く

しやんくしやんと、くしやみ姫になつて居るかも知れないぞ」

戌「分らぬ奴だなあ、杓姫と云ふのだ、杓子のやうな顔をして居るから杓姫だよ、さてもさても汲み取りの悪い奴だ。貴様の様な奴に相手になつて居ると癩に觸つて仕様がな、いづれ何處かの飯盛女でもやとつて来て嬢にしやがったのか、誰やらの作つた川柳にも「飯盛りをしてるお鍋の杓子顔」と云ふ事がある、マアそんな代物だらう」

甲「馬鹿言へ、【ぐじや】ぐじや姫は天下の美人だと云ふ事だ。其奴に睨まれたが最後、どんな奴でも、【ぐじや】ぐじやになつて仕舞ふ。それで、【ぐじや】ぐじや姫と云ふのだ。オイオイ一寸聞いて見る、三杯酢にするとか、茹でて喰ふとか、美味からうとか、言つて居やがるぞ。貴様愚圖々々しとると、【ぐじや】ぐじや姫の化女に喰はれて仕舞ふか分らぬぞ」

丙「オイ、臆病風に誘はれて、大事の使命を果せない様な事が出来たら、それこそ歸つて上役に何と言つて噛みつかれるか分りやせぬ」

丁「此方で噛みつかれるか、歸んで噛みつかれるか、どちらにしても助かりつこ

はない、前門の狼、後門の虎だ。一つ肝玉を出して亂入に及ぶとしようかい」

戌「オイ、亂入は結構だが、彼奴【ぐにや】ぐにや姫だから、ニューだぞ」

甲「何がニューだい」

戌「それでもニューはニューだ。古狸の化入道だ。八疊敷の鞆丸を投網をうつた

やうにパーツと被せやがったら、それこそ【たま】つたものぢやない。直喰はれ

て仕舞つて白骨になつて曝されるのだ。それだからよく言ふ事だ。晨の【鞆丸】

夕の白骨だ」

乙「厚顔は貴様の事だ。本當に鐵面皮な奴だから、かういふ時にや貴様先導にや

都合がよい。愚圖々々せぬと、サアサア貴様から這入つたり這入つたり。オイ松

公、梅公、何を愚圖々々しゃがるのだ。オチオチして居ると今度は竹さまが拳骨

をお見舞申すぞ」

門内にて時公は此聲を聞き、

時公「何だ、失敬な奴だ。松代姫さまを松公だの、梅ヶ香姫さまを梅公だの、竹

公だのと馬鹿にして居やがる。愚圖々々吐かすと摘み潰してやるぞ」

梅ヶ香姫「コレコレ時さま、お前さまはそれだから困る。二言目には摘み出すなぞと、そんな亂暴はやめて下さい。人が鼻摘みして厭がります」

時公「鼻摘みしたつてあんな事言はして置いて男甲斐もない、黙つて居るのが詮らぬぢやありませんか。つまり、要するに、即ち、狐に魅まれたやうなものですな。兔も角一寸門口を覗いて来てやりませうか」

梅ヶ香姫「覗いて来るのも宜敷いが、温順しくして相手にならぬやうにしなさいや。神様のやうに誠の道の方へ摘み上げてやるのは宜敷いが、鷺が雀を抓んだやうな亂暴な事をしてはいけませんぜ」

時公「ハイハイ、承知致しました。摘み上げてやります、【かみさま】の方へ」と云ひながら肩を揺つて門口に向つた。

時公「サア、梅ヶ香様のお許しだ。摘み上げるなら、【かみ】の方へだと云ふ事だ。俺の髪の上まで掴み上げてやらうかい。最前から腕が鳴つて【りう】りういつてた所だ。マアこれで溜飲が下がると言ふものだ」

と獨語ながら門をガラリと開けた。五人の捕手は十手を握つた儘、不意の開門に

鳩が豆鐵砲をくつたやうな面構へして、時公の巨大な姿を凝視めて居る。

時公「ヤイヤイ、古今獨歩、天下無類、絶世の美人孔雀姫様が御門前に立つて、

愚圖々々吐かすは何奴なるぞ。その方はウラル教の捕手と見える。其十手は何だ

ツ。此處へ持つて来い。そんな芋殻のやうな細い奴を持ちやがつて、百本でも千

本でも一緒にかためてぼきぼきと折つて仕舞つて遣らうか。オイコラ、蛇掴みの

やうに貴様も掴み上げてやらうか」

松公「ヤア、この方は貴様の云ふ通り、ウラル教の捕手の役人だ。尋常に手を廻

せ」

時公「この方は、アルタイ山の蛇掴みの親分、大蛇掴みだ。サア尋常に目をまは

せ。ヤア、言はんさきに目を眩しやがつて、倒れて居やがる。腰の弱い奴、いや

目の弱い奴だ。改心致さぬと「まさか」の時にキリキリ舞を致して眩暈が来るぞ

よ」

かかる所へまたもや勝公がやつて来た。

勝公「オヤ、此奴ア面白い、黒ン坊、屁古垂れ、猪口才な、貴様は捕手の役人ら

しいが、早く捕へて歸らぬかい。愚圖々々致すと神の道へ掴み上げるぞ。こんな弱い奴には、俺のやうな豪傑は喰ひ足らぬ。八公と鴨公に茹で上げさせて噛んで喰はしてやるかい。大分豪い寒じでさむがつて居るのだから、茹でて、天麩羅にして喰つたら、ちつとは暖まるかも知れぬなア。時さま、序に一人づつ掴み上げて、孔雀姫様にお目にかけてたらどうだらう」

時公「それや面白い。俺は四人の奴を兩の手で掴んで、【かみ】の方へ掴み上げるから、貴様一人だけ掴み上げて来い」

と言ひながら、強力無雙の時公は四人を一時に兩手に握り、頭上高く捧げながら、時公「ヤア、門が邪魔になる。困つた【もん】だ、小さい門だ、低い門だ、おまけに此奴は弱い【もん】だなア」

と言ひながら、「ピシヤリ」と門を閉めた。閉めた拍子にガタリと樞はおりた。

勝公は外から、

勝公「オイオイ、開けぬか開けぬか。此奴は中々手強い奴だ。オイオイ、助け船

だ」

時公「オイオイ、八、鴨、勝公が外で泡を吹いて居る。お前も加勢に往つて来い」
八、鴨「よし来た」

と二人は樞を開けて表門に駆け出した。やつとの事で一人の捕手を擔いで這入つて来た。

時公「サアサア、捕手のお方、躓く石も縁の端だ。マア一杯御神酒を頂戴なさい。決して毒は入つて居はしない、私が毒味をして見せる」

と言ひながら、神前の神酒をおろし、

時公「お先に失禮」

と云ひながら、自分が一杯【ぐつ】とやり、

時公「サア、この通りだ。頂いた頂いた」

松公「これはこれは思ひがけない。殺されるかと思つたら、御神酒を頂くのか。

何より好物だ」

竹公「夢に牡丹餅だ」

梅公「地獄で酒だ。サア春公、秋公、貴様も一杯頂戴せい」

松公「ヤア、これはこれは酌姫様」

鴨公「お生憎此處には酌姫は居ない、この鴨さまがついで上げませうかい。鴨の

肴で一杯飲つて、後は宣傳歌の珍しい歌を聞かして貰ふのだ」

竹公「思ひがけない御馳走に預かり、命を助けて貰つて有難う御座います。ヤア、

もう捕手の役人では氣が利かない、今日から「すつかり」廢業しませう」

時公「捕手の役人はお前の天職だ。それをやめたら何をする積りだ」

竹公「私は元來の藝無し、これと云ふ仕事もありませぬ」

時公「さうだらう、此世の中に何もせず暮す奴は穀潰しだ、娑婆塞ぎだ。捕手の

役人はお前の天職だからやめてはいかぬ。俺をアーメニヤ迄連れて歸つて、お前

の手柄にせい」

松公「メ、滅相な。貴方のやうなお方を連れて歸らうものなら、それこそ大騒動

が起ります」

時公「ハ、ハ、ハ、何と弱い捕手だなア」

梅公「ア、何と仰有つても捕手の役は嫌になつた。何時命が無くなるか分つた

ものぢやない。仕事の多いのに人の厭がる捕手の役人になるとは、何たる因果の生れつきだ」

とそろそろ酒が廻つて泣き出す。

勝公「ウハ、面白面白い。泣き上戸が現はれた」

時公「今お前は命が危いから、捕手の役を止めると云つたが、さう無茶苦茶に死

ぬものではない。生くるも死ぬるも皆神様の思召だ。なんぼ死なうと思つても神

様のお許しが無ければ死ぬ事は出来ぬ。死ぬまい死ぬまいと思つても神様が幽界

へ連れて行くと仰有つたら酒を呑みながらでも死なねばならぬぞ。飯食ふ間もど

うなるか分らぬ人の命だ。何事も神様にお任せして其日の勤めを神妙に勤めるが

よからう」

茲に五人の捕手は意外の響應に感じ、いづれも三五教の熱心なる信者となつた。

松代姫の一行は寒風に梳られながら、喜び勇んで雪の道を、ザクザクと進み行

くのであつた。

(大正一一・三・一 舊二・三 加藤明子録)

第一四章 鏡丸（四八一）

松代姫、梅ヶ香姫は時公等を引伴れ、一望千里の雪野原を、日數を重ねて遂に琵琶の湖の岸邊に着いた。湖上風波烈しきたため已を得ず、二三日此の岸邊に空しく日を過し、漸く船中の人となつた。此の船の名を鏡丸と云ふ。數十人の乗客は先を争うて鏡丸に乗り移り、一行五人もやつと安心したものの如く船中の客となりける。

松代姫「ヤア、随分偉い雪でしたな。此の鹽梅ではコーカス山は、随分積んで居りませう」
時公「イヤ、御心配には及びませぬ。貴方のやうな色の白い宣傳使がお出でになれば、雪の方から遠慮して消えて了いますよ。アハ、、、此處にも勝公の様な奴が乗つて居ると宣傳に都合が好いのだが、ネエ梅ヶ香姫さま、船に乗ると思ひ出しますわ」

梅ヶ香姫「ホ、、、、歌でも歌つたら、又ウラル教の方が乗つてみて一芝居始ま

るかも知れませぬな」

此の湖は明志の湖に比べて餘程廣く随つて波も高く、航路も日數がかかるので

ある。船客は退屈紛れに口々に彼方此方に一團となつて、世間話に耽つてゐる。

甲「世の中には妙な事があるものだな。アルタイ山には蛇掴みと云ふ目玉の四つ

ある悪神が居つて、大蛇を喰つたり、人を喰うさうだし、クス野ケ原には一つ目

の化物が出たり、大蛇が人を呑んだり、随分物騒な世の中だ」

乙「そんな事、知らぬものがあるかい、彼程名高い話を、夫れよりもモツトモツ

ト珍しい話がある。お前達の後れ耳には未だ這入つて居るまい」

甲「莫迦云へ、俺は八つ耳だ。世間の噂は一番に此耳に這入るのだ。さうして目

もよく利く、鼻もよく利く、口もよく利く、俺の舌は酒の善悪もよく利くなり、

手も足も利くなり、腕も利けば、威喝も利く、夫れでも俺の精神は、きかん氣者

だぞ。愚圖々々吐すと承知をしないぞ」

乙「アハ、ハ、ハ、ハ、蠶螂のやうな三角な面しやがつて、目ばつかりギヨロギヨロ剥

いて偉さうに云ふない」

甲「そんなら何だい。聞いてやらうかい」

乙「それ見たか、確り聞け。このごろ黒野ヶ原に雪婆のやうな玲瓏玉の如き孔雀姫と云ふ、それはそれは頗る別嬪の魔神が現はれて、其處を通つた奴は、誰も彼も皆喰はれて了ふと云うことだ」

甲「ウンさうか、それは初耳だ。天に口あり、壁に耳ありと云ふ事だが、俺の所の家は俺の體と同じやうに壁の肉が皆落ちて、骨ばかりだから、壁からも聞かして呉れなんだのだ。マアお前の御壁で珍しい話を骨折つて聞かうかい」

珍公「オイオイ、お前達そんな古い話を今頃に何云つてるのだい。モツトモツト新らしい珍無類の珍談があるのだ。此珍さまは耳が敏いからな」

甲「オイ珍公、口上ばつかり列べやがつて後を言はぬかい」

珍公「今云うて聞かすから小男鹿の耳振り立てて、畏み畏み聞き召せ」

甲「早く云はぬかい」

珍公「八釜敷云ふない。さう安賣りしては値打が無いわ。貴様ん所の嬢の尻のやうな名の付いた神さまが現はれたといのう」

甲「俺ん所の嬢の尻みたいなとは何だ。臼の化物でも出たのか」

珍公「臼ぢやないわ、貴様もよつぽど薄野呂だ。何でも大きな團尻姫とか云ふ神

さまが現はれたのだ」

乙「アハ、ハ、ハ、フン何を吐しやがるのだ。偉さうに聞きはつりやがつて、知り

もせぬ癖に知り顔しやがつて、尻が呆れるワイ」

珍公「オ、尻で思ひ出した。大氣津姫だ」

甲「その大氣津姫が何うしたと云ふのだ」

珍公「マア黙つて聞け。何でも其奴はな、美味ものが好きで、美しい着物が着た

うて、綺麗な、立派な家を建てて、澤山の男衆や、女子衆を使つて、榮耀榮華に

暮す奴だと云ふことだ」

甲「誰だつて、美味物は好きに定つて居る。身體に掻き破りの出来るような着物

を着るより、お蠶の柔かな着物を好むのは、別に大氣津姫ぢやなくつても、俺の

所の大尻姫でも同じ事だ。世界中に美味物嫌ひな奴があるか。人間は着たり、喰

うたりするのが楽しみだ、珍しさうに何吐しやがるのだ」

珍公ちんこう「わかりきつた、定きまつたこと云いふのが、珍めづらしいのだ。今いまの世よの中なかは分わからぬこと、定きまりの無ない事を云いふ奴やつが、皆みな彼あいつ奴やつは賢かしこいとか、學がくしや者しやだとか、恠りかう巧たうだとか言いはれる世よの中なかだ。本ほん當たうの眞ま直すぐな事ことを云いふ奴やつは、皆みな莫ばか迦かにする世よの中なかだ。これが逆さか様さまの世よの中なかと云いふのだよ」

甲かふ「考かんがへて見みれば、そんなものだなア。夫それでも世よの中なかは裏うら表おもてがあるものだ。マア一寸ちよつとこの湖うみを覗のぞいて見みい。斯こうして船ふねに乗のつて頭あたまを上うへにして、吾われわれ々は乗のつて居ゐる積つもりだが、鏡かがみの池いけの水みづ鏡かがみを覗のぞいて見みると、船ふねは下した向むきになりやがつて、貴き様さま等の頭あたまが下した向むきになつてゐるわ、これが世よの中なかの事ことが鏡かがみに映うつつて居ゐるのだ」

時公ときこうはこの話はなしを耳みみを澄すまして興おも味しろがつて聽きいてゐた。忽たちまち身みを起おこし、三さん人にんの前まへにバタリと胡あぐら床ををかき、

時公ときこう「ヤア、最さい前ぜんから御おは話なしを承うけたまはれば、珍めづしさうな珍めづしくないやうな、妙めうな御おは話なしを聽ききました。一いつ體たいその大おほ氣げ津つ姫ひめとやらは、何ど處こに居をるのですか」

甲かふ「お前まへさまは何ど處この人ひとか知しらぬが、人ひとに物ものを尋たづねるのに名な乗のりを上あげずに何なんのことだ、名なを名な乗のりなさい。行ぎやう儀ぎを知しらぬ人ひとだな」

時公「アー、これは失禮しました、私の名は時々脱線すると云ふ時公と申します」

乙「あまり大きな男がやって来るので、胸が【どき】どきした。大氣津姫の話な

ら私が本家本元だ。聽いて貰ひませう」

時公「ア、それは有難う」

乙「その大氣津姫はコーカス山の山奥に、立派な宮殿を造り、澤山の家來を従れ

て、何でも人民の膏を搾つて、自分等の眷屬ばかりが榮耀榮華に暮して居るさう

です。此間も素盞鳴命さまの御使とやらが、大氣津姫を一つ歸順さすとか、何と

か言つて行つた限り歸つて來ませぬと云ふ専らの評判です」

時公「それは何といふ方です」

乙「サア、何といふ方が名は忘れたが、何でも長いやうな名であつた」

甲「その女は大蛇姫と違ふか。大蛇と云ふ奴は随分長いものだ。さうして女だて

らにそんな處へ一人で行くなんて、よほど太い奴だぜ。大方クス野ヶ原の大蛇の

化物かも知れぬ。大蛇姫と大氣津姫との戦ひは随分見物だらう」

珍公「でも竹のやうな名だつたぞ」

時公ときこう「竹野姫たけのひめと云いふ御方おかたと違ちがふか」

珍公ちんこう「アー、その竹野姫たけのひめだ。その女をんなが雪ゆきの降ふるのに只ただ一人ひとり、月つきは照てるとも虧かくると

も、雪ゆきは積つむとも解とけるとも、大直日おほなほひだとか、大氣津姫おほげつひめだとか、見直すとか、斬きり

直なほすとか、偉えらさうに云いつて山やまへ登のぼつた限り、雪ゆきに鎖とぎされたのか、大氣津姫おほげつひめにして

やられたのか一向いつかうその後の消息せうそくがわからぬといふことだ。女をんなだてらに豪膽がうたんにも、

彼あんな猛獸まうじゅうや大蛇だいじやばかりの山やまへ往ゆくから、そんな目めに遭あうのですな」

時公ときこう「はてな」

梅ヶ香姫うめがかひめ「モシモシ姉さま、今の話はなしは中なかの姉さまのことぢやありませんまいか。若も

しさうだつたら私何わたくしどうしませう」

松代姫まつよひめ「イヤ、心配しんぱいなさるな。何處どこへ行いつても神様かみさまと二人ふたり連れだ。この地つちの上うへは

皆みななくにはるたちのみことさま、金勝きんかつ要神様よかみさまと、素盞すさの鳴命様ののみことさまとが御守護ごしゆごあそ遊あそばす御地面ごぢめんだから、屹度きつと

神様かみさまの御用ごようをして居ゐる竹野姫たけのひめ、滅多めつたなことはありませぬよ」

梅ヶ香姫うめがかひめ「姉さま、さうでしたねエ。餘あまり心配しんぱいしてつひ迷まよひました。一日いちにちも早はやく

コーカス山ざんとやらへ行いつて、姉さまに力ちからをつけて上げませうか」

まつよひめ 松代姫 「まだ貴女は心配をなさる。そんな取越苦勞は要りませぬ」

うめがかひめ 梅ヶ香姫 「ホ、ホ、」

ときこう 時公 「モシモシ御姉妹様、何うやらこれは竹野姫さまのことらしい様に思はれま
す。一つコーカス山へ驅け上つて、時公が一働き致します。マー見てみて下さい」

まつよひめ 松代姫 「何うなさるの」

ときこう 時公 「その大氣津姫と云ふ奴改心すればよし、改心せぬとあれば素盞鳴命様の御
威勢を借つて、斬つて斬つて斬り廻し、乾兒の奴らを残らず血祭りにしてやりま
せうかい」

うめがかひめ 梅ヶ香姫 「又しても時さま、そんな亂暴なことを云ひますか。詔り直しなさい」

ときこう 時公 「明志丸から今鏡丸に乗り直したとこです」

うめがかひめ 梅ヶ香姫 「マアマアよろしい。悠然と氣を落つけて手荒いことをせぬやうに、三
なひけう 五教の宣傳歌で言向和しませう」

ときこう 時公 「三五教は表教と云ふのですか。誰も彼も此歌を聞くものは賛成せぬものは
ありませぬ、大持てに好う持てる大持て教ですな。其處で神が表に現はれると云

ふのでせう。これからコーカス山へ驅け上つて、善と悪とを立別ませうかい」
五日五夜の航海も無事に、漸く船は西岸に着いた。乗客は先を争つて上陸する。
五人は悠々として歌を歌ひ乍ら又もや西北指してコーカス山目「あて」に進み行くのであつた。

(大正一一・三・一 舊二・三 外山豊二録)

第三篇 言靈解

第一五章 大氣津姫の段(一)〔四八二〕

「於是、八百萬の神共に議りて、速須佐之男命に千位の置戸を負はせ、亦鬚を

切り、手足の爪をも抜かしめて、神追ひに追ひき」

爰に天照大神と速須佐之男命の天の眞奈井の誓約によりて、清明無垢の素尊の御魂、三女神が現はれ玉ひしより、素尊部下の諸神等の不平勃發し、終に天の岩戸の大事變を湧起せしめ、一時は天津神國も、葦原の中津國も常暗の世となり、次で八百萬の神等が天の安河原の神集ひに集ひて、神議りに議り玉ひ、結局大海原の主神たりし速須佐之男命に千位の置戸を負はせ、亦鬚を切り、手足の爪をも抜かしめて、天上より神追ひに追ひ玉ふの止むを得ざるに立到つたのであります。『千位の置戸を負はせて』と云ふ意義は、一天萬乗の位で、群臣、百僚、百官の上立つ高御座を負はせ即ち放棄させてと云ふ事でありませぬ。父伊邪那岐大神より、大海原なる大地球の統治權を附與されて、天下に君臨し玉ふべき素尊であります。高天原に於ける天の岩戸の變の大責任を負ひて、衆議の結果千萬の神の上に立つ千位の置戸を捨て玉ふに致つたのであります。凡て萬神萬有の一切の罪科を一身に負擔して、自ら罪人となつて、天地の神明へ潔白なる心性を表示されたのであります。斯の温順善美なる命の御精靈を稱して瑞の御魂と謂ふの

である。基督が十字架に釘付けられて萬民の罪を贖ふと云ふのも、要するに千位の置戸を負うたと同じ意味であります。世界一切の萬類を救う爲に身を犠牲にする事は、即ち千位の置戸を負ふのである。現今の如く罪穢に充ち、腐敗の極に達せる地上も亦、至仁至愛なる瑞の御魂の神の贖罪ある爲に、大難も小難も成り、小難も消失するのである。ア、一日も早く、片時も速かに、天下國家の爲に犠牲となる可き、瑞の御魂の守護ある眞人の各所に出現して、既に倒壊せむとする世界の現状を救済せむことを希望して止まぬ次第である。

「亦鬚を切り」と云ふ意義は、

【ヒ】は、靈であり、日の御子の朝に仕へて政治を照す言靈であり、

【ゲ】は實名職掌である。

即ち自分が官吏ならば官職を辭し、會社の重役を辭すと云ふ事を、【ヒ】【ゲ】を抜くと云ふのである。俗に何も知らずに高い處へ止まつてエラサウに吐すと、鬚を抜いてやらうかなぞと言ふのも、不信任を表白した言葉である。高位高官の人や、大會社の重役や、大教育家などが大本の教義でなくては天下國家を救ふ事

が出来ない事を心底より承認し乍ら、未だ充分の決心がつかずして現在の地位に戀々として、自己の名利榮達にのみ腐心して、大本の教を人眼を忍んで遠くより研究し、世人に知られる事を憚つて居る如うな立派な人士が澤山に在るが、斯の如き人は至忠思君思國の日本魂を振起して、公然大本の信者と名乗り、現代の高位地なり、名望を眼中に置かず、止むを得ざれば現位地を擲つて、天下國家の爲に、大本の主義を天下に實行する様になつた時が、所謂鬚を切つて、眞個神明と大君と社會とに奉仕の出来る時であります。

「手足の爪まで抜かしめて、神追ひに追ひ玉ひき」と云ふ意義は、手足の爪とは私有財産の事である。手の爪は現代の所謂動産物で足の爪は不動産物である。要するに一切の地位を擲ち、一切の財産を顧みず、物質的欲望を捨てて神明の道を天下に宣傳する事が、神追ひに追ひきと云ふ事になるのである。従來の俗界を離れて、至聖、至美、至直なる大神の道に仕へ奉る事を神やらひと謂ふのである。

【ヤ】【ラ】【ヒ】の言靈を調べる時は、

【ヤ】は天地自然の大道に歸り、世界の親たる覺悟を以て萬民を教へ導き、八方の事物を明かに指示する事である。

【ラ】は、俗より眞に反りて、從來の體主靈從的行動を翻然として改め、無量壽にして生死の外に超然として産靈の大道を實行し、靈系高皇産靈神の神業を翼賛し、極乎として間斷なく惟神の大道を天下に宣傳し、實行して、寸暇無き神業奉仕者となる事である。

【ヒ】は、天理人道を明かにし、神妙不可測の神機に透徹し、過去、現在、未來を明かに了知し、達觀し、天地經綸の大司宰者たる人の本能靈德を顯はし、以ての根底を結び護り、無上の尊嚴を保つ事である。

故に神追ひは、神様を追放したり、退去させたりすると云ふ意義では無い。

【追】の漢字と【退】の漢字の區別ある事を能く反省すべきである。この點は古事記撰録者の最も意を用ゐたる點にして、實に其の親切と周到なる注意とは感謝すべき事でありませぬ。

『神追ひ』と云ふ事を大本に寫して見る時は、第一に各役員の如きは、總て鬚

を切り手足の爪まで抜きて大本へ神追ひに追はれ玉うた人々であります。併し乍ら現今の社會の總てが右諸子の如くに神追ひに追はれ、且又鬚を切り手足の爪まで抜かしめられては却つて天下の政治を亂し、産業の發達を阻止し、國力を弱める事になりますから、神様は神業に直接奉仕すべき身魂の因縁ある眞人のみに綱を掛けて、大本に御引寄せに成つたのであります。故に身魂に因縁の無い人々は、最初から何程熱心に神業に奉仕せむとしても、神様から御使ひに成らぬから、何等かの機會に不平を起して脱退せなくてはならぬ様な破目に陥り、終には某々氏等の如く犬糞的に惡胴を据ゑて、一生懸命に大本の攻撃を始める様に成るのであります。亦深い因縁の有る人士で、鬚を切り兼ね、手足の爪を抜き兼ねて、遠くから奉仕されて居る人々もまだまだ澤山にあります。大本の神業に直接奉仕する眞人と、又間接に神業に奉仕されて居る人士とがあります。是は鬚を切ると切らないとの差異でありますが、因縁ある人士は勇猛果斷一日も早く、神業に直接參加せられたいものであります。さうで無ければ天下に跳梁跋扈せる八岐の大蛇を亡ぼし、天の下を至治泰平ならしむる神業を完全に遂行する事が出来ないのでは

ります。世の中には小官小吏が鬚計り蓄へて尊大振り眞意も了解出来ぬ癖に、鱧や鯰の如うな貧乏鬚を揉みながら、大本は淫祠だの邪教だのと、大きな口を開けて泥を吹き、田螺や蛙を脅かして、大本へ入信せむとする可憐な純良な同胞の精神を濁さむとして居るのが澤山ある。亦世の中には、手足の爪を抜くどころか、爪の先に火を點して利己主義一遍の人物があつて日に夜に爪を研ぎすまし、鷹が雀を狙ふ様に、我れよしに浮身をやつして居る厄介な現代である。亦現代の如き詰込み主義の教育法は常に精神の自由を束縛し、自然の良智良能の發達を妨害して居るのであるから、床の間の飾物に成る鉢植の面白い珍木は出来るが、家の柱となる良材は到底出来るものでない。天才教育を閑却し無理無態に枝を伐つたり曲げたり、細い銅線で縛り付けたり、突介棒をかうたり、葉を斷つたり、捻つたり、四方八方へ曲げまはして、小さい樹を拵へて、高價に賣り付ける植木商と同じ教育の行り方であるから、到底碌な人材は産れ出づるものでない。一日も早くこの爪を抜き除つて了はねば、帝國の前途は實に風前の燈火であります。現代は個人有つて國家あるを忘れ、自黨ありて他黨あるを忘れて居る。他黨と雖も亦國

家社會の一部で、同じく是れ人間の儔侶たるものであるが、全く之を知らざるが如き状況である。故に朋黨内に相鬭ぎ、外環境の虎視眈眈として間隙に乗ぜむとするの危きに備ふるの道を知らず、實に國家の前途を憂へざらむとするも能はざる次第である。ア、今の時に於て大偉人の出現し、以て國家國民の慘状を救ふもの無くんば帝國の前途は實に暗澹たりと謂ふべきである。世には絶対の平等も無ければ、亦絶対の差別も無い、平等の中に差別あり、差別の中に平等があるのである。蒼々として高きは天である。茫茫として廣きは地である。斯の如くにして既に上下あり、何人か炭を白しと言ひ雪を黒しと言ふものがあらう乎。政治家も、宗教家も、教育家も此時此際、差別的平等なる天理天則を覺知し、以て天下萬民の爲に、汝の蓄ふる高慢なる城壁を除き、以て其大切に思ふ處の鬚を切れ。其の暴力に用ゆる手足の爪を抜き去り、以て不惜身命、天下の爲に意義ある眞の生活に入れ。斯の如くにして始めて天壤無窮の皇運を扶翼したてまつり、御國を永遠に保全し、祖先の遺風を顯彰し、以て神國神民の天職を全うする事が出来るのである。

『又食物を大氣津比賣の神に乞ひたまひき』

食物の言靈返しは、「イ」である。「イ」は命であり、出づる息である。即ち生命の元となるのが食物である。また「クイ」物の「クイ」は「キ」と約る。衣服も亦、キモノと云ふのである。「キ」は生なり、草也、氣なりの活用あり。故に衣と食とは、生命を保持する上に最も必要なものである。故に人は「オシ」物の「イ」と「クイ」物の「キ」とに因つて、「イキ」て居るのである。又人の住居を「イへ」と云ふ。「イへ」の靈返しは、「エ」となる。「エ」は即ち餌であり、胞である。要するに、衣食住の三種を總稱して、食物と云ひ、「エ」と云ひ「ケ」と言ふのであります。

大氣津姫といふ言靈は、要するに、物質文明の極點に達したる爲、天下擧つて美衣美食し大廈高樓に安臥して所在贅澤を盡し、體主靈從の頂上に達したる事を、大氣津姫と云ふのであります。糧食（「かて」）の靈返しは、「ケ」となり、被衣の靈返しは「ケ」と成り、家居の靈返しは亦「ケ」となる。故に衣食住の大に發達し、且つ非常なる驕奢に、世界中が揃うてなつて來たことを大氣津姫と云ふ

のであります。

『乞ひ玉ひき』と云ふのは、【コ】は細やかな言靈、【ヒ】は明かの言靈である。要するに、素盞鳴尊は八百萬の神に對して、正衣正食し、清居すべき道を、お諭しになつたのを『乞ひ玉ひき』と、言靈學上謂ふのであつて、決して乞食非人が食物を哀求する様な意味では無いのであります。

『爾に大氣津比賣、鼻、口及尻より、種々の味物を取らで、種々作り具へて進る』

鼻と云ふ事は、華やかなるの意義であつて、立派な高價な衣服のことである。口と云ふ事は食餌を意味する。尻と云ふ事は、尻を落着けて起臥する、家居を意味するのである。『種々の味物』とは、色々な臭氣紛紛たる獸肉や蟲類の事である。亦『種々作り具へて進る』と云ふ事は、獸類の毛皮を被たり、骨を櫛や筭や、其他の道具に愛用したり、鳥や蟲の毛や皮で、日用品を造つたり、人間の住居する家の中に便所を造つたり、天則を破つて人の住居を作るに檜材を用ゐたり、屋根を葺くにも檜皮で、恰も神社の如うに、分に過ぎた事を爲したりする事を、種々

作り具へて進ると云ふのである。奉ると云ふのは、下から上位の方へ上ることであるが、此の御本文の進ると云ふ意味は、進歩すると云ふことである。要するに物質文明の發達進歩せる結果、國風に合致せざる、衣食住の進歩せる惡風潮を指して、クサグサ進ると云ふのであります。

(大正九・一・一六 講演筆録 谷村眞友)

第一六章 大氣津姫の段(二) (四八三)

「時に速須佐之男命、其の態を立伺ひて、穢汚もの奉るとおもほして、乃ち其の大氣津比賣神を殺したまひき」

鼻、口、尻なる衣食住の非理非道的に進歩發達したる爲に、生存競争の惡風、天下に吹き荒み、その結果は、遂に近來に徴すれば、歐洲大戦争の如き慘状を招來し萬民皆塗炭に苦しむの現状は、所謂「穢汚もの奉進る」の實例である。試み

に考へて見よ。天地も崩るる許りの大騒動、大戦亂の砲聲殷々たる慘状が漸く鎮靜したかと思へば、忽ち世界を擧げて轟々たる社會改造の聲と化し、一瀉萬里、何の國境もなく、雷電の轟き閃くが如く、今や我皇國にも轟き渡つて來たのである。最近起りつつある生活問題も、労働問題も、思想問題も、要するに生活難の響きに起因するのである。只單なる世界の思潮に刺戟せられた一時的の現象であるかと云ふに、決してさうでない。如何に世界的思想であらうが、如何に好事者の巧妙なる煽動、乃至教唆であらうが、國民の要求に於て痛切に感ずる所が無ければ、決して共鳴するものではないのである。故に是を一時的の現象位に思つて、冷然として袖手傍觀し、爲政者や學者たるものが、何等の反省もせず且又其の起るべき根本の原因を究めずして、狼狽の餘り、急速に之を防止しようとして徒に壓迫を加へたりすると、ますます紛糾して、終には救ふ可からざる一大禍亂を激發せないとともに限らない。これ實に指導の任に當れる政治家、宗教家、教育家、および有志家の考慮し、奮起し、以てその大原因たる大氣津姫から根絶改良せねばならぬのである。大氣津姫を殺さむとする、現代のいはゆる改造の叫びは、何が

大原因となつて、天下の人民の多數者が、斯の如く猛烈に共鳴心隨するかと謂へば、一つに鼻、口および尻なる衣食住の生活問題に歸するのである。人間の苦しみの最大なりとするものは貧窮である。即ち衣食住の三類の大缺乏である。日々新聞を見ると、貧苦の爲に身を淵川に投げたり、首を吊つたり、鐵道往生や毒藥自殺をしたり、發狂したり等の悲惨事は日に月に増加して居るのである。之を見ても、貧苦と云ふものは、死するよりも辛い苦しいといふことが明かである。死ぬよりつらい處の貧苦を免れんが爲に、ここに激烈なる生存競争が起つて來る。其の結果は優勝劣敗弱肉強食と云ふ、人生に於ける慘澹たる餓鬼道の巷となつて來たのである。體主靈從、利己主義の結果は、徳義もなければ、信仰も無く、節操も無く、勝者たる大氣津姫神は常に意氣傲然として、入つては大廈高樓に起伏し、出ては即ち酒池肉林、千金を春宵に散じて、遊惰、安逸、放縱を之れ事として、天下に憚らない。一方には劣者たる貧者は、營々として喘ぎ、尚ほ且つ粗雑なる食に甘んじ、以て漸くその飢餓たる口腹を満たすに足らず、疲憊困倒して九尺二間の陋屋に廢殘の體軀を横へ、空しく愛妻愛兒の饑餓に泣くを聞いて居る。

その心情は富者勝者の到底夢裡にだも窺知すべからざるの慘状である。古諺に曰く、『小人窮して亂を爲す』と、終に或は非常識となり、軌道を逸し、身投げ、首吊り、または監獄行きを希望するに至るのである。又これが群衆的の行動となる時は、大正七年の米騒動や、進むでは焼打暴動ともなり、同盟罷工や、怠業的行動ともなり、日比谷運動や、革新的氣分ともなるのである。故に恐るべきは、この結果を醸成する所の生活問題である。之を閑却して、思想の惡化や勞資の衝突を防止せむとして、如何に政治家や、教育家や、宗教家が力説怒號して見た所で生命の無い政治家や、宗教家、教育家の力では、容易にその効果の現はるるものではない。故に大本は、神示に依りて明治二十五年以來、是が救済の神法を、天下に向つて指導しつつあるのである。古來名君と仰がれ、賢相と謳はれた人々は國民生活の安定を以て、先決問題としたのである。而して一方に於ては、宗教と教育の權威を發揮して以てその無限の欲を塞ぎ、その奢侈を矯め、公共心の涵養に務め、貧富の平均を保つて來たのである。既に生活の安定さへ得れば、民の之に従ふや易しで、喜びて善に向ふものである。要するに、現代の生活問題を、

根本的に改善せむとするには、どうしても、大氣津姫の改心に待たなければならぬのであります。

『種々』と云ふ事は、臭々の意味であつて、現代の如く、一も二も無く、上下一般に四足動物を屠殺しては舌鼓を打ち、肉食の汚穢を忌み、正食のみを攝つて、心身の清淨を保つてゐる我々大本人を野蠻人民と嘲笑するに立到つたのは、心身上に及ぼす影響の實に恐るべきものである。肉食のみを滋養物として、神國固有の穀菜を度外する人間の性情は、日に月に慘酷性を帯び來り、終には生物一般に對する愛情を失ひ、利己主義となり、かつ獸欲益々旺盛となり、不倫不道徳の人非人となつて了ふのである。虎や狼や、獅子なぞの獰猛なるは常に動物を常食とするからである。牛馬や象の如くに、體軀は巨大なりと雖も、極めて温順なるは、生物を食はず、草食または穀食の影響である。故に肉食する人間の心情は、無慈悲にして、世人は死なうが、倒れやうが、凍て居らうが、そんな事は毫末も介意せない。只々自分のみの都合をはかり、食色の欲の外天理も、人道も、忠孝の大義も辨知せない様に成つて了ふのである。斯う云ふ人間が、日に月

に殖ゑれば殖ゑる程、世界は一方に、不平不満を抱くものが出来て、終には種々の喧しき問題が一度に湧いて來るのである。爲政者たるものは、宜しく下情に通ずるを以て、急務とし、百般の施設は、之を骨子として具體化して進まねばならぬのである。素盞鳴尊は止むを得ずして、天下の爲に大氣津姫命を殺し玉ひ、食制の改良を以て第一義と爲し玉うたのである。西郷南洲翁は、政とは、情の一字に歸すると斷じ又孟子は、人に忍びざる心あれば茲に人の忍びざる政ありと云つて居る。然るに爲政者は、果してこの心を以て、之に立脚して社會改良を企畫しつつあるであらう乎。政治家なるものを見れば、徹頭徹尾、黨閥本位であり、權力の鬭争であり、利權の争奪である。斯の如き勢利のみに没頭せる人間に依つて組織され、運用される政治なるものは、因より國利民福と没交渉なるべきは、寧ろ當然であらうと思ふ。斯の如き世界の政治に支配されつつある國民が、不安の終極は、改造の叫びと成つて來るのは之も當然かも知れぬ。併し乍ら斯の如き肉食尊重、利己主義一遍の政治家を推選したる國民は全く自業自得にして、神界の戒めである。自ら火を採つてその手を焼いた様なものである。ア、一日も早く皇

祖うその御遺訓ごあくんと御事跡ごじせきに鑑みかんが、上下しやうか擧こつて日本固有にほんこいうの美風良俗びふうりやうぞくに還かへらねば、到底現たうていげん代だいの不安ふあん、暗黒あんこくの社會しやくわいを改良かいいりやうし、以もつて神國しんこくの一大使命いちだいいしめいを遂行すゐかうする事は出來できないのである。先まづ何なによりも、大本神諭おほもとしんゆに示しめさせ玉たまへるが如ごとく、第一だいいちに肉食にくしよくを廢はいし身魂みたまを清きよめて、神かみに接せつするの道みちを開ひらくを以もつて、社會改良しやくわいかいいりやうの第一義だいいちぎとせねばならぬのであります。

(大正九・一・一六 講演筆録 松村仙造)

第一七章 大氣津姫の段おほげつひめ だん (三) (四八四)

故殺かれころさえたまへる神かみの身みに生なれる物ものは、頭かしらに蠶かひこ生なり、二ふたつの目めに稻種いなだね生なり、二ふたつの耳みみに粟あは生なり、鼻はなに小豆あづき生なり、陰ほとに麥むぎ生なり、尻しりに大豆まめ生なりき。故是かれここに、神産かむみむ巢日すびのみ御祖命おやのみこと茲これを取とらしめて、種たねと成なし賜たまひき」

「殺ころさえたまへる」と云いふ事は、大神おほかみの御法則ごほふそくに違反あはんせる、汚穢をなる衣食住いしよくぢうの

方法を根本的に撤廢せられたと云ふ意義であります。

「神の身に生れる物は頭に蠶生り」と云ふ事は、頭は總て國民の上に立つ治者の謂である。蠶は言靈學上、

【力】は、蒙せ、覆ふ活用であつて衣服を意味する、また光輝き、晴れ明け、氣體透明の言義である。

【イ】は身に從ひ成る也、身の足して動かす也。これも衣服の活用である。

【コ】は天津誠の腦髓であり、子の活用である。故に萬民の上に立つべき役員

は、第一に蠶の如く其身を空しうし、犠牲となつて國家の爲めに盡さねばならぬ。

天人道を明かにし、神智神識を感受し、以て上は一天萬乘の大君に純忠の至

誠を捧げ、下は人民を愛撫し、以て天津誠の實行者たるの覺悟を持ち、政治は完

全無缺、錦繡綾羅の神機を織出すてふ、天下經綸の大道に奉仕するに至る瑞祥の

世態を稱して、「頭に蠶生り」と謂ふのであります。

「二つの目に稻種生り」と云ふ事は、目は正中を司どるものである。世界の一切を見極め、善惡美醜を判明する神機である。二つの目とは左右兩眼の意義で、

ひだり 左は上を代表し、右は下を代表する目である。萬有一切皆この目の無いものはない。然るに上流社會は上流のみの事を知り、下流社會は下流のみの事より見ないとすれば、いはゆる片目である。現代は大抵皆片目の政治家や教育家計りであつて、二つの目の活用が足りないので、天下は益々無明、暗黒、常暗となつて來るのである。また顯幽兩界を達觀し得る人は、いはゆる二つの目が照るのであります。

稻種の

【イ】は成就る言靈で、大金剛力であり、基である。

【ナ】は萬物を兼ね統る言靈にして、能く行届く事である。

【イナ】はまた【イネ】と云ひ、五穀の主であり、眼である。イネの靈返しは餌となる、また米の返しは【ケ】となる。大氣津姫の氣である。また【よね】とも云ふ。【よね】の返しもまた餌であり、糧の返しは【ケ】となる。人の眼は夜分に寝るを以て夜寝（米）と云ひ、寝るを以て、寝（稻）ると云ふ。人の眼に似て形小なるが故に、小目（米）と云ふのも、言靈學上面白き解釋である。

凡て穀食を爲す時は、心血自然に清まりて、明けく、敏く、顯幽を達觀し、下を洞察し、以て天下の趨勢を知悉し得るのである。故に萬民の頭に立つべき治者は、心血を清め、神智を備へて、天下に臨まねばならぬのである。是の原理天則が、頭に立つ人々に判つて來て、汚穢の食を廢し皇國固有の正食に改め、以て善政良治を布くに致る事を、「二つの目に稻種生り」と謂ふのであります。

また宗教家なれば、第一に顯幽一本の眞理を達觀して、生死往來の神機を知悉し、萬民を教化するに致りたるを「二つの目に稻種生り」と謂ふのであります。顯幽一致、上下合一、陰陽和合、君民和平、内外親睦、神人合一の境地に入れる眞相を稱して、また「二つの目に稻種生り」と謂ふ事が出来るのであります。

「二つの耳に粟生り」と云ふ事は、二つは前に述べた通り、左右の意義であり、左は上流、右は下流社會なる事は勿論である。耳の言靈の約りは【三】である。【三】は農工商の三種であり、實業であり、形體具足の言義であり、身體である。要するに、一切の生産機關を總稱して耳と云ふのである。故に左は資本家や、大地主を意味し、右の耳は労働者や、小作人を意味するのである。また耳は一方よ

りその活用を調ぶる時は「キク」と曰ふ事が主眼である。手が利く、耳が利く、目が利く、鼻が利く、口を利く、腹が利く、舌で酒を利く、腰が利く、これを八ツ耳と曰ふのである。また靈的方面に於ても同一に、神眼、神耳、天言等やはり八ツ耳である。斯の如く靈體共に完全無缺なる、幽顯十六耳の意義を取りて十六菊の御紋章を制定されたのは最も深遠なる御慮の御在します所である。神八井耳命、彦八井耳命、忍穂耳命、または聖徳太子を八ツ耳命と申すなぞは、みな前述の意義から、名付けられたものであります。

「粟生り」の

【ア】の言靈は大物主であります、地であり、顯體であり、大本である。

【ハ】の言靈は、延び開く也、花實也、數多き也の活用である。

要するに「粟生りき」と云ふ意義は、物質、靈界共に圓滿に發達し、國利民福を招來し、鼓腹擊壤の聖代の、出現せし事でありませぬ。御神諭に、

「今の人民は盲と聾計りであるから、何程結構な誠を爲て、眼の前に突出してやりても一つも見えず、一寸先は眞の暗であるぞよ。神は世界を良く致して、上下

揃へて人民を歡ばして安樂な神世に致して、花を咲かし、實を結ばして、松の世、五六七の神世に立直して與らうと思つて、明治二十五年から、色々と申して、呼ばはりて聞かしても、耳が蝸に成りてをるから、狂婆が何を吐すと申して、我身の足下に、火が燃えて來て居りても、少つとも耳に入れぬが、見て居じやれよ、今に盲が目が明き、聾が耳が聞える様に成りて來るが、さうなりてから、俄に周章て神の申す事を聞く氣に成りても、モウ間に合ぬぞよ。聞くなら今の中に聞いて置かぬと、後の後悔間に合はぬぞよ、眼も鼻も開かぬ如うな、慘い事が今に出て來るが、神の申す誠の警告を聽く人民は、世界にないぞよ、困つたものであるなれど、是を説いて聞かして、耳へ入れさして置かねば、神の役が濟まぬから、嫌になる所まで、クドウ氣を付けるから耳の穴を能く掃除致しておくが良しぞよ云々

とあるのは、耳に粟を生り出でしめむとの、神様の深き思召しであります。

「鼻に小豆生り」と云ふ事は華美なる衣服を改め、實務に適する制服を改定されることと云ふ事である。大臣は大臣の服装、小臣は小臣、神職は神職、僧侶は僧侶、

軍人は軍人、農工商は農工商の制服を定め、主人は主人、奴婢は奴婢の制服を一定し、一見してその官吏たり、宗教家たり、農夫たり、主人たり奴婢たり、勞働者たる事の、辨別し易き服装を制定さるる事を「鼻に小豆生り」と曰ふのであります。現代の如く服制に嚴格なる定規なく、神職や僧侶などが洋服を着用したり、奴婢が紋附羽織を着流し、絹の足袋を穿ち大道を憚らず闊歩するが如きは、實に不眞面目の至りにして、亡國の因となるのである。「アヅキ」の「ア」は光り輝く事で、照妙、和妙なぞの、高貴なる織物であります。「ア」は顯譽の地位に在る眞人である。故に大臣とか、神官神職とかの、着用すべき衣服である、その他の臣民の着用すべきものでないのだ。絹物は着ぬもの也との滑稽語は、實際の戒めとして服膺すべき言葉である。「アヅキ」の「ヅキ」は着キと云ふ事であつて、治者たる大臣高官および神官神職に限りて着用すべきものであると云ふ事を、決定されたのを「鼻に小豆生り」と曰ふのであります。鼻は人體に取つては呼吸の關門であつて、人民生息の主要點である。故に一國の安危を背負つて立てる國家の重臣を鼻と云ふのである。神諭にも、

「此の事成就致したら、良の金神の鼻は、カラ天竺は愚、天まで鼻が届くぞよ」と豫告されてあるのも、世人が尊重畏服するとの神意である。世俗が一つの功名手柄を顯はしたる時に於て、鼻が高うなると謂ふのも人の上に卓絶したる意義である。今日のやうに國家の重臣や、清淨なる神明に奉仕する神官等が、小豆を着用せずして、獸畜の毛皮を以て作れる、衣服を着用するなぞは、實に天則違反の行爲であります。

「陰に麥生り」と云ふ事は、西洋人は麥を常食とすると云ふ意義であります。日本およびその他の東洋諸國は陽の位置にある國土であるから、陽性の食物たる米を常食とするのが、國土自然の道理である。西洋は陰の位置にある國土であるから陰性の食物たる麥を常食とするのが國土自然の道理である。故に西洋人は麥で作つたパンを食ひ、東洋人殊に日本人は米食をするのが天賦の本性である。然るに、今日の日本人は上流に成るほど西洋崇拜者が多く現はれ、文明人らしき顔付をして、自慢でパンに牛酪なぞを附けて無味ものを美味さうに、平氣で喰つて居るが、麥は日本では、牛馬の喰ふべき物と決定つて居るのである。故に日本人

は米を喰ひ、陰所たる西洋に生れた人種は、麥を喰ふことに成るのが「陰所に麥生り」と云ふのであります。

「尻に大豆生りき」と云ふ事は、同じ日本國でも北海道などは、日本國の尻である。大豆は脂肪に富んだ植物であるから、寒い國の人間は、如何しても大豆類を食する必要がある。大豆を喰つて居れば、寒い國でも健康を害すると曰ふ如うな事はない。併し是は大豆計り喰ふと曰ふ意味では無い。米と混じたり或は炙つたり、粉末にして喰へば良いのである。北海道に後志と云ふ國名のあるのも尻の意味であります。筑後の國を「ミチノシリ」と訓むのも、國の端と云ふ意味である。要するに、この段の古事記御本文は、第一に各自の國土に應じたる食制を、神界より定め玉うたのであります。

故、是に神産巢日御祖命、茲を取らしめて、種と成し賜ひき「高御産巢日御祖神は靈系の祖神であり、神産巢日御祖神は、物質体系の祖神である。」茲を取らして」と云ふ事は、前記の御本文の御食制を、採用されてと云ふ事で、素盞鳴尊の食物に關する御定案を、直に御採用遊ばした事でありませう。「種と成し玉

ひき』と云ふ事は、この食制を基として、天地改良の神策を樹立し玉うたと云ふ事でありませぬ。故に人間はこの天則に違反して、暴食する時は大切なる神の宮居たる身體を毀損するやうな事になつて、天壽を全うする事が出来ぬやうに成るのであるから、人間は日々の食物には、充分に注意を拂ふ可きものであります。

(大正九・一・一七 講演筆録 谷村眞友)

第四篇 満目荒寥

第一八章 琵琶の湖 (四八五)

さしもに寒き冬の日も
 何時しか暮れて春霞
 靉く時を松代姫
 神徳薫る梅ヶ香の
 姫の命の宣傳使
 三人の随伴を引連れて
 魔神の猛ぶコーカスの
 山の神達悉く
 神の御水火に言向けて
 三五教を開かむと
 夜を日に繼いで雪の路
 ゆき疲れたる膝栗毛
 心の駒もはやりつつ
 早くも琵琶の湖の邊に
 月照る夜半に着きにけり
 明くれば廣き琵琶の湖
 浪に漂ふ汐干丸
 朝日を受けてコーカスの
 御山を指して走り行く
 コーカス山の山嵐
 降る雪さへも交はりて
 齒の根も合はぬ寒空に
 神の恵の暖かき
 救ひの船と喜びつ
 言靈清く琵琶の湖
 浪音立てて進み行く。

琵琶の湖には松島、竹島、梅島といふかなり大きな島がある。松島は全島一面に鬱蒼たる松樹繁茂し、竹島は斑竹一面に發生してゐる。さうして梅島には草木らしきものは一つもなく、殆ど岩石のみ屹立した島である。

船は漸くにして梅島の麓に着いた。斷岸絶壁、紺碧の湖中に突出し、見る者をして壯烈快絶を叫ばしむる絶景である。この島には天然の港がある。折しも風波激しければ、岩窟の港に船を横たへて、暫く此處に天候の靜穩になる日を待つ事とした。

是より三日三夜颶風荐りに至り、波高く、已むを得ず三日三夜を岩窟の港に過す事となつた。船客は百人許りも乗つて居る。船の無聊を慰むる爲に、彼方にも此方にも歌を歌ふ者、雑談に耽る者が現はれた。船中の客は七八分まで鑿や鉋や槌などの大工道具を持つて居る。時公は四五人の男の車座となつて、何事か雑談に耽つて居る前に胡床をかき、

時公「一寸お尋ね致します。この船のお客さんは大抵皆大工さまと見えますが、これ程多數の大工が何處へ行かれるのですか」

甲 「俺は黒野ヶ原から来た大工だが、これからコーカス山に引越すのだ」

時公 「コーカス山には、それ程澤山の大工が行つて何をするのですか」

乙 「お前さんは、あれ程名高いコーカス山の御普請を知らぬのか。ソレハソレハ立派な御殿が、彼方にも此方にも建つて居る。さうして今度新しい宮さまが建つ

のだ。それでコーカス山の大氣津姫とかいふ神様が家來をそこら中に配置つて、遠近の大工を御引寄せになるのだ。ヤツコスやヒツコスやクスの神が毎日日日、

コーカス山に集まつて大きな都が開けて居るのだよ」

時公 「ヤツコス、ヒツコス、クスの神とはソラ何んだ。妙な者だナ」

乙 「お前何にも分らぬ男だな、大きな圖體をしやがつて、それだから獨活の大木、柄見倒しといふのだ、大男總身に智慧が廻り兼ねだ。マアわしの言ふ事を聞いた

が宜かるう。山椒は小粒でもヒリリと辛いといふ事がある、俺はお前に比ぶれば根付の様な小さい男だが、世界から、あの牛公は牛の尻だ牛の尻だと言はれて居

るお方だぞ。どんな事でも知らぬ事はやつぱり知らぬ、知る事は皆知つとる。聴かして欲しければ胡床をかいて傲然と構へて居らずに、チンと坐つて、御叮嚀に

お辭儀せぬかい」

時公「ア、仕様ないなア。マア辛抱して聞いてやらうかい」

牛公「開いた口が塞がらぬ、牛の糞が天下を取ると云ふ譬を知つとるか。何でも、

三五教の小便しいとか大便使とかいふ奴が、こないだ、そんな事云つてコーカス

山へ行きやがつて、頭から糞かけられて、今ではアババのバアぢや。アツ

ハ、ハ、ハ、」

時公「随分前置きが長いなア」

甲「モシモシ貴方、そんな奴に物を聞いたつて何が分りますか。此奴は何時も猿

の人真似で、偉さうに威張るのが藝だ、モウあれ丈云つたら後はないのです。私

が何でも知つてますから、分らぬ事があれば問うて下さい。三五教の宣傳使ぢや

ないが、大は宇宙の真相から小は蟲の腸まで能く御存じの馬さまだ。あなたも牛

を馬に乗替へて、牛の尻の物知らずの牛糞の言ふ事は、テンから取上げぬが宜し

い。馬さまが【ウマ】く説明して上げます」

牛公「コラコラ、モウ止めぬか、馬鹿な奴、コレコレ大きなお方、彼奴の【ウマ】

い話に漫然乗らうものなら、牛々いふ様な目に遭はされて馬鹿を見ますで……
馬公「コラ牛公、何を吐かしやがるのだ。他人の事に横槍を入れやがって……」
丙「オイオイ、貴様達は牛飲馬食と云つて、酒計り喰つて飯は五人前も十人前も
平気で平げやがつて、臆ばかり達者な法螺吹きだ。この鹿さまはその名の如く

シツカリとして御座る鹿さまだ」

牛公「鹿公、貴様は鼻ばかり高くしやがつて、下らん事を能う轉るから、彼奴
は【ハナシカ】だと云うて居るぞ、大工のやうな事は職過ぎとる。モシモシ大き
な男のお方、此奴の言ふ事は皆落話で、聞落し、言ひ落し、見落し、人嚇し、烏
嚇しの様なものです。聞かぬが宜しいで」

鹿公「愚圖々々吐かすと【シカ】られるぞ」

牛公「牛と見し世ぞ今は悲しき、といふ様な目に會はしたるか。鹿が【シカ】み
ついてやつた。ナンダ蟹の様な【シカ】見面をしやがつて、牛の尻もあつたもの
かい」

時公「ヤ、モウモウ牛さまの話で馬鹿を見ましたワイ。本當に旅をすると、馬

鹿々々しい目に會うものだ。この島ぢやないが、「ウメ」イ話はないかい」

丁「ありますともありますとも。コーカス山にマア一寸登つて見なさい、美味しい

酒は泉の如くに湛へられてある。肉は澤山に吊下げてある。それはそれは酒池肉

林だ」

馬公「コラ虎公、なんぼウメイ物があつても、話丈では根つから氣が行かぬぢや

ないか、其奴は皆八王や奇の神が食ふのだ。貴様達は指を銜へて、朝から晩まで

カンカンコンコンとカチワリ大工をやつて、汗をかいて汗の脂を舐つとる位が關

の山だ。ヒツコスにはヒツコスで引込んで」

時公「ヤ、其ヤツコスとかヒツコスとか云ふのが聞きたいのだ」

虎公「八王といふのは、世界中の贅澤な奴が澤山な金を持ちやがつて、ウラル姫

とか常世姫とか云ふ偉い贅澤な神が、大けな尻を振りやがつて大尻姫などと言つ

てる。その家來が皆家を持つて家を建てて方々から移轉して來るのだ、それをヤ

ツコスと云ふのだ。昔は十二も八王とか、八王とか云つた偉い神さんが、天山に

も、青雲山にも、鬼城山にも、蛸間山にも、その外にも澤山あつたさうぢやが、

今度の八王はそんな氣の利いた八王ぢやない、利己主義の、人泣かせの、財産家連中の樂隱居をするのを、是れを稱して即ち八王といふ。へん」

馬公「コラ虎公、何をへんなんて空嘯きやがつて、馬鹿にするない。ヒツコス奴が」

虎公「貴様もヒツコスぢやないか、甲斐性なし奴が。カチワリ大工の其處ら中で恥を柿のへタ大工奴が使用主がないものだから、刃の缺けた鑿を一本持ちよつて、荒削りの下役に行くんぢやないか、アラシコ大工奴が。斯う見えても此方さまは上シコだ。せめて中シコ位にならねば巾は利かぬぞ。大工も上シコ鉋を使ふ様になれば、占めたものだ」

馬公「貴様はシコはシコだが醜神だ。悪い事には一番に四股を入れやがつて、他人の膏をシコタマ搾りやがる醜女だ。チツト是から俺が天地の道理を説いて、貴様を仕込んでやらうか。仕込杖も一本や二本持つて居るから、愚圖々々吐かすと、貴様のドテツ腹へ仕込むでやるぞ」

時公「オイオイ大工同志、喧嘩ははづまんぢやないか、酒を鑿ぢやとか、カンナ

ぢやとか、冷酒だとか言はずに、マアマア心を落付けて、カンナガラ靈幸倍坐世を唱へたらどうぢや」

馬公「ナントあんたは馬い事を云ひますね。そら爛した酒の味は耐りませぬ、チツトち割つて呉れと仰有るのか。現代の奴は利己主義だから中々チワルのチハイマスのと云ふ様なお人善はありませぬ。酒も酒も曇つた世の中だ。……酒に就て思ひ出したが、ナンでも酒の姫とか云ふ小便使がコーカス山へ大尻姫と穴競べとか、尻比べとかに行きよつたさうだ。そして所がその小便使は穴無い教だとかで、薩張り大氣津の神に取つ詰られて、岩窟の中へ投込まれたと云ふ話だ。三五教だから穴の中へ入れて貰ひよつたのだらう」

時公「酒の姫、そりやあなたの御聞違ぢやありませんか。竹野姫と云ふ女の方ぢやあるまいかなア」

馬公「ナンデも、青い様な長い様な名だつた。ウンさうさう、この湖には竹島という島があるワイ。琵琶の湖の島に能く似たまた二人の姉妹があると云ふ事だ。梅とか、松とか云ふ小便使が、コーカス山へ小便垂れに來ると云ふ事だから、其

奴を捉へたら、それこそ大したものだ

時公 「それは誰がそんな事を言つて居たのだ」

馬公 「イヤ誰でもない、その竹野姫が岩室へ打込まれる時に、ア、松島、梅島助

けて下さいとほざけやがったのだ。それでまだ二人の小便使があると云ふので、

それを大氣津姫が手を配つて探しに廻らして居るのだ。そいつを捕へたら最後、

我々も御褒美を頂戴して、かち割大工を廢め、引越すから直に八王になるのだ

時公 「コーカス山には大概八王が幾許程居るのだ」

馬公 「サア、大概八百八十八位あるだらうなア」

牛公 「うそ八百云うな、貴様は嘘馬と云うて村中の評判だ」

馬公 「糞碌大工牛の尻黙れツ、愚圖々々云うと、化が露はれて糞が出るぞ。牛糞

が天下を取り損ねるぞ」

松代姫、梅ヶ香姫は被面布を除き、牛公、馬公の前に現はれ、

「妾がお話の松代姫、梅ヶ香姫で御座います。竹野姫の姉と妹、何卒妾を連れて

大氣津姫とやらの側へ案内して下さいさらぬか。あなた方のお手柄になりますから…

…」

時公「これはしたり御兩人様、大膽不敵な其お言葉……オイオイ牛、馬、鹿、

虎、嘘だぞ嘘だぞ。この方は小便使でも何でもない。松でも、梅でもないのだ。

お前達があまり「ウメ」イ事を言うて、牛糞が天下を取る世を待つもんだから、

滑稽交りに妾が松だとか、梅だとか、「ウメ」イ事を仰有るのだ。全く戯談だ。

斯んな女を引張つて行かうものならそれこそ大騒動が起つて仕末におえぬぞ」

松代姫「オホ、々々、時さま、嘘言つてはいけませぬ、宣り直しなさい」

時公「こんな所で宣り直して堪まりますか、この船の客は残らずヒツコスばつか

りだ。ウツカリした事おつしやると大變ですデ」

梅ヶ香姫「ホ、々々、時さんの弱いこと、愚圖々々云つたら、ヒツコスの首を残ら

ずヒツコ抜く迄のことですよ」

時公「これはこれは、あなたこそ宣り直しなさい」

梅ヶ香姫「イエイエ、皆さま達の體主靈從魂が黄泉の國に引越して、神の國の身

魂が皆さまの腹の中へ引越すといふ事です」

時公ときこう「アハ、ハ、ハ、ハ、梅ヶ香うめががさま、【ウメ】イ事ことを仰おつしや有る」

松代姫まつよひめ「ホ、ハ、ハ、ハ、」

斯かくする間うち、三日みつかみよさ三夜の颯ぐふう風はピタリと歇やんだ。船ふねは再ふたび真ま帆ほに風かぜを孕はらんで、西北せいほく指さして疊たたみの樣やうな、凧なぎ渡わたつたる浪なみの上うへをスルスルと迂すべり行く。

(大正一・三・三 舊二・五 松村眞澄録)

第十九章 汐干丸しほひまる (四八六)

松代姫まつよひめは轟すつく然と立たつて、

松代姫まつよひめ「心こころも廣ひろき琵琶びはの湖うみ 惠めぐみも深ふかき琵琶びはの湖うみ

浪なみに浮うかべる松まつの島しま 千歳ちとせの松まつの青あを々と

繁しげり榮さかゆる神かみ心こころ 一いちど度どに開ひらく梅うめの島しま

處狭き迄なよ竹の

風に揉まるる竹の島

荒風強く渡るとも

假令深雪にたわむとも

千代に八千代にさき竹の

悩みも知らぬ勇ましさ

妾は神世を松代姫

この世を亂す大氣津の

姫の奢侈りを戒めて

心の仇花咲き散らし

天津御神の賜ひたる

我が言靈に逸早く

開く梅ヶ香姫の神

竹野の姫の窟戸に

立て籠められて千萬の

憂に逢瀬を助けむと

進む時こそ来りけり

憂しや辛しの世の中に

我身一人はうまうまと

鹿の妻戀ふ奥山に

みづの御あらか立て構へ

虎狼に勝りたる

醜の曲津の曲業を

被ひ清めむ松代姫

梅ヶ香姫と諸共に

待ちに待ちたる時津風

吹く春こそは樂しけれ

竹野の姫の消息を

はしなく聞きし船の上
飢な、まかるな、なよ竹の

女ながらも神國に
盡す誠の竹野姫

救ひの神と現はれて
茲に三人の姉妹の

語り合ふ夜も束の間の
堪へ忍びの荒魂

勇みて待てよ妹よ
汝が身を思ふ松梅の

魂は通へよ千引岩
窟の中の妹が邊に

窟の中の妹が邊に

と歌つて元の座に就きける。

牛公「オイ兄弟分へ少し小聲になつて」今の「のた」が聞えたか

馬公「のた」と云ふ事があるかい。何でも長たらしい、のたのたと譯の分らぬ

事を「のた」つとつたではないか

鹿公「オイ違ふよ。ありや歌と云ふものだ」

牛公「ア、さうか、何でも、「うた」がほしい事をウタウタと囀つて居つた。彼

奴は歌よみの乞食かも知れぬぞ。「歌々と歌を轉る歌作り【うた】うた出来ぬ身

こそ【うた】てき」

馬公「何を吐しやがるのだ。【うた】つ目には【うた】うた轉りやがつて、そんな處かい。彼奴が例の代物だ、彼奴を、俺等が力を合してふん縛つて了へばもう占めたものだ。松だとか梅だとか白状し居つたではないか」

鹿公「しかし乍ら一寸見た處、なかなか豪膽な女らしい。二人や三人の艇に合ふ様な奴ぢやあるまい。それに貴様あんな大きな男がひつついて居るのだから、到底そんな野心を起しても駄目かも知れぬぞ」

虎公「しかりしかり、而うして聊か以て手強い奴だ。下手にマゴ付くと、スツトコドツコイのオタンチン、チンチクリンのチンチクリン」

馬公「そりや何吐す」

鹿公「まことに【はや】、しだいがらだ」

牛公「時に取つての儲け物だ。うまいうまい、【しか】と虎まへるのだな」

馬公「俺等の名を竝べやがつて、【うま】い事吐きやがる」

牛公うしこう 【もう】斯こうなつては、廐うまやの隅すみにも置おいとけぬワイ〃

鹿公しかこう 【しか】りしかり 【しか】も座敷ざしきの眞中まんなかか、コーカス山ざんの中なかのお宮みやの御おん

住すまひ〃

虎公とらこう 【とら】マア結構けつこうな事ことだなア〃

牛公うしこう 洒落しやれやがるない。人ひとの眞似まね計ばかりしやがつてモウそんな話はなしは止やめようかい〃

馬公うまこう 【ば】かばかしいからな。【うま】い話はなしと化物ばけものとは滅多めつたに會あはれるものぢ

やない〃

鹿公しかこう 【しか】し乍ながらコーカス山ざんには澤山たくさんな化物ばけものが集あつまつて居ゐると云いふ事ことだ。

【うま】い話はなしも澤山たくさんあるぢやないか〃

虎公とらこう 虎とらでも、獅子ししでも、狼おほかみでも、熊くまでも、狐きつねでも、狸たぬきでも、犬いぬでも、猫ねこでも、

杓子しゃくしでも、瓢箪へうたんでも、酒さけの粕かすでも、コーカスでも、狡猾かうくわつな奴計やつばかりが集あつまつて利己われ

主義よしをやつて居ゐるのだと云いふ事ことよ。これから虎さんもちつと狡猾かうくわつになつて猫ねこでも

被かぶつて虎猫とらねこになつて見みよう、ニヤーンと妙案めうあんだらう〃

時公ときこう 〇オイオイ牛うし、馬うま、鹿しか、虎とら、俺おれが最前さいぜんから狸たぬきの空寝入そらねいりをして貴様等きさまらの囁ささやき

を聞いて居れば、太い奴だ。牛公の儲け話、馬公の甘い算段、鹿公の狡猾目的、虎公の猫被り、トラ猫のコーカス野郎、大氣津姫が呆れるワイ。サア、ま一度時さまの前で云つて見よ」

八公「こら四人の獣、四足、俺は八さまだぞ。知つてるか四ツの倍が八だ。ぐづぐづ吐すと八裂だぞ」

鴨公「ヤイ、貴様等、松がどうだの、梅がどうだのと何をかまふのだ。「かも」て呉れるな。此方は三五教の宣傳使だ。何も「か」も御承知だから「かも」さまと云ふのだ。貴様の悪い企はちやんと看破して居るのだ。どうだ何も「かも」白状するか」

牛公「もう」もうもう何も彼も白状致します」

馬公「うま」うま待つて下さい」

鹿公「しか」鹿つめらしい顔して「しか」つて下さるな」

虎公「とら」お前さま等に「とら」まへられぬ先に尾を捲きます」

鴨公「かも」宜しい。これから何も「か」も氣を付けるが宜からうぞ」

時公ときこう

アハ、ハ、ハ、ハ

時公ときこうはすつくと立つて、
宣傳歌せんでんかを歌うたひ始はじめた。

浪音なみおと高たかき琵琶びはの湖うみ

鳴なる言靈ことたまの此處ここ彼處かしこ

また來くる春はるを松島まつしまや

浪風なみかぜ高たかき竹たけの島しま

見みても強つよそな梅うめの島しま

浮うかぶ景色けしきも面白おもしろく

一寸ちよつと三島みしまの沖越おきこえて

眞帆まほに風かぜをば孕はらませつ

此處ここまで來きたる時ときも時とき

【ぎう】と詰つまつた船ふねの客きやく

【うし】や苦くるしと泡あわを吹ふく

角つのの立たつたる牛公うしこうや

尻しりの始末しまつに馬うまさまが

豆屁まめへの様やうな法螺ほらを吹ふき

欲よくと酒さけとにからまれて

心こころは紅葉もみぢ鹿しかの鳴なく

【しか】め面づらした鹿しかさまや

荒肝あらぎも【とら】れた虎とらさまの

コーカス山ざんの物語ものがたり

大氣おほげつひめ津姫あきが呆あきれたと

屁へを放ひる様やうな小理屈こりくつを

やつとかました八公やっこうの

骨も身もないかけ合ひだ 墨を吹いたる蛸の様な

禿ちやま頭の鴨公が かもかかもかと威張り出す

朝日は照るとも曇るとも 月は盈つとも虧くるとも

コーカス山の曲神を この時さまが現はれて

時をうつさず言靈の 誠の道を説き分けて

欲に迷うた曲神の 心のもつれ解いてやる

牛の糞でも天下取る 【うま】い話にのせられた

船の上にてうつかりと ほざいた鼻鹿物語

叱り散らすは易けれど 【とら】まへ處のない虎公

直日に見直し聞直し 宣り直し行く船の上

牛馬鹿虎のみならず この船中の人々よ

鑿や鉋や鋸の 働く如く今よりは

心の曲をきり拂ひ 垢を削れよ三五の

神の教にまつらうて 榮耀榮華に暮し居る

おほげつひめ
大氣津姫の眞似をすな

すなを
從順に心改めて

はやの
早く乗り換へ神の船

この世を救ふ神の船

めなしかたま
目無堅間の救ひ船

なみかぜあら
浪風荒き世の中も

おほ
溺れる案じあら波の

なみ
浪に漂ふ松代姫

かみ
神の教の一時に

ひら
開く梅ヶ香姫の神

このふたかた
此二方の宣傳歌

しつか
確り聞いて改めよ

この世ばかりか先の世の

ちから
力となるは神の教

のり
教の友船幾千代も

おい
老ず死らず天津日の

かみ
神の御國へ救ひ行く

かみ
神の救ひの御船に

ひとひ
一日も早く乗り直せ

の
乘れよ乘れ乘れ神の船

しこ
醜の言靈詔り直せ

かみ
神は汝と俱にあり

あ
嗚呼有難き神の恩

あ
嗚呼有難き神の徳

しあん
とつくり思案した上で

かみ
神に貰うた生粹の

こころ
心の色を現はせよ

コーカス山は高く共

神かみの恵めぐみに比くらぶれば 足元あしもとさへも寄より付つけぬ
琵琶びわの荒湖あらかみ深くとも 深ふかき恵めぐみに比くらぶれば
たとへにならぬものぞかし 畏かしこき神かみの御教みをしへに
まつろひまつれ諸人もろびとよ 禍多わざはひき人ひとの世よは
神かみを離はなれて易やす々と くれ行く事ことは難むづかしい
ほめよたたへよ神かみの徳とく 祈いのれよ祈いのれ神かみの前まへ
前まへや後うしろや右みぎ左ひだり 神かみの御水み火いきに包つつまれて
生きて行くゆくなる人ひとの身みは 神かみに離はなれな捨すてられな
ア、惟かむながらかむながら 御靈みたま幸さいはひましまして
世よの諸人もろびとの身魂みたまをば 研みがかせ給たまへ研みがきませ
心こころの岩戸いはと押おしあけて 清きよき月日つきひを照てらせかし
清きよき月日つきひを照てらせかし

と歌うたひ終をはつて元もとの座ざに就つきけり。

(大正一一・三・三 舊二・五 藤津久子録)

第二〇章 醜しこの窟いはや〔四八七〕

梅うめヶ香か姫ひめは立たち上あがり、

四方よもの山さん野やを見み渡わたせば 雪ゆきの衣ころもに包つつまれて

見みるも清きよけき銀ぎん世せ界かい 世せ界かいの曲まがや塵ちり芥あくた

蔽おほひかくしてしらじらと 表うは面への光ひかる今いまの世よは

何ど處こも彼か處しこも〔ゆき〕詰つまる 青あをきは海うみの浪なみばかり

青あを木きヶ原がはらに現あれませる 神かむい伊い邪ざ諾なの大おほ神かみや

木この花はな姫ひめの御み教をしへを 照てらし行ゆくくなる宣せんでん傳し使し

乘のりの友とも船ぶね人ひと多おほく 皆みな口くち々ぐちに囁ささやきの

言の葉風に煽られて

心も曇る胸の闇

闇夜を照す朝日子の

日の出神の命もて

曲津の猛ぶコーカスの

大氣津姫のあれませる

雪積む山に向ひたる

竹野の姫は如何にして

岩窟の中に捕はれし

嗚呼我々は千早振

神の光を身に受けて

黑白も分ぬ岩窟の

憂に曇る姉の君

救ひまつらで置くべきか

コーカス山の山嵐

何かあらむや神の道

踏み分け進む我一行

時は來れり時は今

天の窟戸押し分けて

コーカス山に集まれる

百の魔神を言向けむ

言向和す皇神の

廣き心の神直日

恵の露も大直日

曲の身魂をスクスクに

直日に見直し聞直し

宣り直させん宣傳使

千變萬化の神界の

神の御業を畏みて
言靈清き琵琶の湖

渡りて進む五人連
心竹野の姫の神

神を力に神嘉言
讚美へて待てよ今暫し

暫し隠るる星影も
雲たち退けば花の空

月は盈つとも虧くるとも
虧けてはならぬ姉妹の

月雪花の桃の實は
意富加牟豆美と顯はれて

黄泉戦に勳を
建てたる如く今一度

天照神の御前に
岩戸開きの神業を

つかへまつらむそれ迄は
虎狼や獅子熊の

醜の刃をかい潜り
清き命を保つべく

守らせ玉へ金の神
神須佐之男大御神

國治立の大御神
三五教を守ります

百の神達八十の神
松竹梅の行末を

厚く守れよ克く守れ
下國民の血を絞

膏あぶらをぬ抜ぬきてただ唯一ひとり人

奢おごりをつく盡つくすおほげ大氣つひめ津つ姫ひめの

神かみのみこと命あはとあら現あらはれし

ウおにがみラルやそまのまが姫つにまつ附まつきまと纏まとふ

八やまた岐をろち大しこぎ蛇つねやしこ醜しこ狐つね

醜しこのおにがみ鬼やそま神まが八つ十つ曲つ津つ

神かみのみいき御ことごと息ごとにことごと悉ごとく

服まつろいまへいままときつときるとき今いまやとき時とき

アとき、とき時ときさまやつよやつ八やつさまよよ

牛うし馬うま鹿しか虎とら鴨かもさまよよ

勇いさみすす進すすんでこーかカすの

山やま吹ふきままくるしこ醜しこのかぜ風かぜ

皆みな一ひと息いきにふ吹ふきは拂はひ

被はひきよ清きよむかみるかみ神かみのくに國くに

神かみとくに國くにとおんのため御おん爲ために

力ちからをあは合あはせみ身みをつく盡つくし

鑿のやかん鉋なをすふすりす捨すてて

神かみのみち道みちのあゆみあゆ歩あゆみあゆつあゆつあゆ

神かみのみたま御かむ魂なのかむ惟な神かむ

靈たまのちはひ幸ちはひをう受うけうようかうし

進すすめすすよすす進すすめすすいすすざすす進すすめ

進すすめすすよすす進すすめすすいすすざすす進すすめ

とうた歌うたひを了はりはぬ。

時とき公こう 八やつさまかも鴨かもさまどうだ。

最さい前ぜんからず隨ず分ぶん噪はしいであ居あただい大だい工いくさまの牛うし、うま馬うま、しか鹿しか、とら虎とら

の四つ足、オツトドツコイ四人さまは、どうやら時さまの宣傳歌で歸順したらしいぞ。これも時の力と云ふものだ。貴様はいつも俺を、時々脱線する男だから時さまだナンテ、冷かしよつたがどうだ、時々功名を現はすたふ【とき】尊【とき】時さまだぞ

八公「何を偉さうに時めきやがる。たふ【とき】も尊【とき】も同じ事ぢやないか。貴様クス野ケ原で梅ケ香姫のお洒落にかかった時と、一つ目小僧に出逢つた時の状態は何だい。知らぬかと思つて法螺を吹いても、チヤンと此八さんは天眼通力で調べてあるのだ。八耳の八さまと云へば俺の事だ。この八さまにはどんな奴でも尾を捲くのだぞ」

時公「八は【やつ】だが、負惜みの強い奴、悪い奴、法螺を吹く奴、困つた奴」
八公「コラコラ時さま、そらまだ八だない四つだ、奴が四ツより無いぢやないか」
時公「奴が四つと貴様の身魂が四つ足だからそれで合して八ツになるのだ。分らぬ奴だなア」

鴨公「アハ、ハ、ハ、コイツ氣味が良い。胸がスツとした。何でもかでも、八かま

しうする奴だから、村の者が愛想を盡かして、厄介者扱ひにしとる位だから、コ

イツ餘程酷い奴だ

牛公「オイ、八さま、ギウ牛云はされて居るな」

馬公「馬鹿野郎、状態見やがれ」

鹿公「シカ」られ通しにして居やがる

虎公「トラ」れてばつかり居やがる、揚げ足と油を

時公「時にとつての御愛嬌だ」

かく雑談に耽る折しも船は岸に着いた。船客一同は船を見捨てて思ひ思ひに雪

の道を進み行く。松代姫の一行五人に牛、馬、鹿、虎を加へて九人連れ、宣傳歌

を歌ひ乍らコーカス山目蒐け、人の往來の足跡をたよりに、谷間を指して進み行

くのであつた。

満山一面の大雪にて、彼方の谷にも此方の谷にも雪の重さにポンポンと樹木の

折れる音頻々と聞えて居る。

鴨公「ヤア、モーそろそろ日が暮る時分だ。そこら一面雪で明くなりやがつて、

晝だと思つて居る間に、夜になつて仕舞ふのは雪の道だ。何處ぞこの邊に猪小屋でもあつたら一服して、都合がよければ一泊やらうかい」

八公「さうだ、俺も最前から宿屋を探して居るのだが、是から一里許り奥へ行けば、何百軒とも知れぬ、立派な家が建つて居るのだから、そこ迄無理に行く事にしよう」

しように

時公「ヤア、待て待て、其處まで行つたら最早敵の繩張りだ。それ迄に一夜を明し、草臥を休めて、明日の元氣を養ふのだ」

牛公「私は何時もこの邊を往來する者です。山の勝手は能く知つて居ますが、此谷は少しく右へ下りると岩窟がある。其處で一夜を明す事にしませうか」

時公「どうです松代姫さま」

松代姫「ハイ、宜敷からう、今晚は久し振で岩窟に逗留さして貰ひませうか」

と衆議一決して、牛公の案内につれ、小さい谷を目あてに進み行く。牛公の云つた通り二三十人は氣樂に寝られる、立派な岩窟があつた。ここに一行は蓑を敷き、携へ持てる無花果を食つて、逗留する事になつた。

梅ヶ香姫「ア、都合のよい岩窟ですなア。此岩窟を見るにつけ、想ひ出すのは姉様の事、姉様が押し込められて居る岩窟と云つたら、こんなものでせうか」
牛公「滅相もない。コンナ結構な處ですか、この山奥には七穴と云つて、七ツの岩穴がある。さうしてその穴の中は、こんな平坦な座敷の様な處ぢやない。私も一ぺん這入つて見た事があるが、穴の中は眞暗がりで、底が深くて、なんでも龍宮迄續いて居ると云ふ事で、あんな處へ入れられようものなら、ゆつくり腰を掛ける事も出来やしない。兩方が岩壁になつて居る。そこへ岩の尖に足を掛けて、細い穴を股を擴げて踏ン張るのだ。一寸居眠りでもしたが最後、底なき穴へ落込んで仕舞ふのだ」

時公「そんな穴が七つもあるのか」
牛公「さうです。此間も何ンでも淤藤山津見とか云ふ強い奴が出て来て、大氣津姫を歸順さすとか云つて登つて來たところ、大勢の者が寄つてたかつて攻めかけたら、奴さま其穴の中へ隠れよつた。そこで大勢の者が寄つてたかつて岩蓋をピシャーンとしめて、外から鍵を掛けた。それつきり百日許りになるのに何の音沙

汰も無い。大方穴の底へ落つこつて死んで仕舞つたやらうとの噂だ。それから暫くすると、背のスラリと高い竹野姫とか云ふ小ン便使が、小ン便歌を歌つてやつて来た。そいつは日が暮て泊るところがないものだから、自分から穴の中へコソコソとはいつて行きよつた。馬鹿な奴もありや有るもんだなア

馬公「オイオイ、さう口穢く云ふな。御姉妹が居られるぞ」

牛公「ア、さうだつたなア。その竹野姫と云ふ小ン便使様が、雪が降つてお困りで見えて、穴の中へコソソリとお這入遊ばした。さうすると大氣津姫様の手下の悪神様が、「サア御出なさつた」と待ち構へて居らつしやつて、外からピシヤリと戸を御しめ遊ばした。竹野姫さまは中から金切聲を立ててキヤーキヤキ御ぬかし遊ばした。外からは悪神様が「サア斯うなつたら百年目だ、底無き穴へ落つちて、クタバリ遊ばすか、飢ゑて御死に遊ばすか、二つに一つだ。是で吾々の御心配もとれて、マアマア御安心だ」と仰有つて……」

馬公「コラコラ、叮嚀に云ふもよいが、餘り叮嚀過ぎるぢやないか。竹野姫様の事を御叮嚀に御話してもよいが、悪神の方は好い加減に區別せぬかい」

牛公うしこう「そんな融通ゆうつうの利きく位くらゐなら力ちから手て割わり大工だいこうをやつたり、ウラル教けうの目付役めつけやくをし
とるものかい」

時公ときこう「牛うしさん随分ずぶん現金げんきんな男をとこだなア」

牛公うしこう「長い物ものには捲まかれ、強いものには従したがひ、甘い汁あまじりは吸すへ、苦にがい汁じりは擲ほかせと

云いふ世よの中なか、人間にんげんは時とき世よ時じ節せつに従したがふのが徳とくだからなア」

時公ときこう「お前まへ等は今いま初はじめて聞きいたが、ウラル教けうの目付役めつけやくだと云いつたね」

牛公うしこう「イーエ、ソラ違ちがひます。ホンの一寸ちよつと口くちが滑すべつたのでモ一いっ牛うしあ上あました」

時公ときこう「イヤ、さうだなからう」

牛公うしこう「左様さやう々々さやう、さうだなからう」

松代姫まつよひめ「皆みなさま、モウ寝ねませうか、サア、是これから神言かみごとを奏上そうじやうして、宣傳歌せんでんかを一いち同どう

揃そろつて上げませう」

時公ときこう「それは宜敷よろしからう。併しかし今日けふは私わたしに考かんがへがありますから、籤引くじびきをして一いち

當あたつた者ものから、發聲はつせいする事ことにさして下ください」

松代姫まつよひめ「時ときさまの御隨意ごずゐいに……」

時公ときこう「サアサア、これから籤引だ。御婦人方は免除だ。男七人が籤引だ。一番長
い奴を引いた者が發聲するのだ」

と云ひながら草蓑の端を千切つて長短をこしらへ、

時公ときこう「サア、引いたり引いたり」

と六人の前へ突き出した。六人は争つて是を引いた。

時公ときこう「ヤア、牛公が一番長いのを引いたぞ。サア牛公、お前から宣傳歌の發聲だ。

アレ丈だ船ふねの中なかでも教をしへてあるなり、途々聞かしてあるから云へるだらう」

牛公うしこう「ハイハイ、確たしかに云へます。一遍聞いたら忘れぬと云ふ地獄耳だから、何で

もかでも皆覺えて居る。ソナラ皆様今日は私が導師だ。後から附いて來るのだ

よ

と云ひ乍ら牛公は宣傳歌を歌ひ始めた。

牛公うしこう「神が表に現はれて

膳と茶碗を立て別ける

この世で甘いは爛酒ぢや

心持よき大御酒ぢや

唯何事も人の世は 酒と女が一ツちよい
呑めよ騒げや一寸先や闇よ 闇の後には月が出る

一同「アハ、ハ、ハ、ハ」

鴨公「コラ牛公、貴様は矢張ウラル教だ。一寸先や闇だなんて吐きやがつて、宣り直せ。膳と椀とを立て分けるとは何だ。法螺事ばかり云ひやがつて」

牛公「定つた事よ、大氣津姫の家來だもの、食ふ事と、呑む事と、着る事より外には何も無いのだ。その癖食つたり呑んだりする口から出るのだもの、食ふ事や

飲む事を云ふのは當り前だ。サア、鴨とやら、もう一口云ふなら云つて見い。徳利の口ぢや、一口にやられるぞ。土瓶の口ぢや、二口と云ふなら云つて見い」

時公「エー、仕様のない奴だ。こんな處で洒落どころか、仕様がな、發起人の俺が導師になつて、宣傳歌を唱へるから、お前達や隨いて來るのだ」

と云ひつつ宣傳歌を歌ひ始めた。一同は其あとに隨いて歌つて居る。この時幾百人とも知れぬ足音が岩窟の外に聞えて來た。牛公は岩戸の隙間より一寸覗いて、

牛公うしこう「ヤア、御出た、御出た、是れ丈味方があれば何程時公ときこうが強つようても大丈夫だだいぢやうぶ」
と口走くちばしつた。時公ときこうは、
時公ときこう「これは大變たいへん」
と牛公うしこうに當あて身みを喰くらはした。牛うしはウンとその場ばで倒たふれた。足音あしおとは次第しだい々しだいに遠とほざ
かり行くのであつた。

(大正一一・三・三 舊二・五 岩田久太郎録)

第二章 俄改心にはかかしん〔四八八〕

岩窟がんくつの外そとには大勢おほぜいの聲音あしおと、雪ゆきをクウクウと踏ふみ鳴ならし乍ながら風かぜの如ごとくに通とほり越こし
た。油斷ゆだんならじと時公ときこうは中なかより岩戸いはとをシツカと閉しめ、牛公うしこうの息いきを吹ふき返かへさせ四人よにん
を前まへに据すゑて、
時公ときこう「愈貴様達いよいよきさまたちは怪あやしい奴やつだ。眞實ほんとうに猫ねこを被かぶつて居をるな。我々われわれを計略けいりやくを以もつてコ―

カス山かすざんに誘いざなひ岩窟いはやの中なかへでも投なげ込こむ積つもりだらうが、さうは往ゆかぬぞ。古手ふるてな事ことを致いたして後悔こうくわいするな。サア有ありてい態たいに白はくじやう状じやうせよ。貴様きさまは牛公うしこうとは詐いつはり、牛雲うしくもわけ別べつと謂いふ曲神まががみであらうがな。その他のた三人さんにんの者共ものども、何れも皆みなその方ほうの手下てしたの者共ものどもだ。汐干しほひま丸るの船中せんちゆうに於おいてワケも無い喧譁けんくわを致いたして我等われらを欺あざむき、この岩窟がんくつに誘いざなふ工夫たくみであらうがな。そんな事ことの分わからずして天下てんかの宣傳使せんでんしが出來できると思おもふか。サア斯こうなる上うへはもう量見りやうけんはならぬ。有ありてい態たいに包つつまず隠かくさず白はくじやう状じやうせよ。その外ほか三人さんにんの者共ものども、一々いちいち實じつ状じやうを述のべ立たてよ」

牛公うしこう「ア、ア、仕方しかたがありません。生命いのちを助たすけて下くださるならば申まをし上げませう。當山たうざんの大氣津姫おほげつひめと言いふのはその實じつはウラル姫命ひめのみこと、昔むかしは常世とこよひ姫命ひめのみことと謂いつた神かみであります。夫をつとのウラル彦ひこは今いまはアーメニヤに居をりますが、夫婦手分ふうふてわけをして萬々まんまん一いち、日ひの出神でのかみとやらがやつて來きてアーメニヤが保たもてなくなつた時ときは、このコーカス山ざんの隱處かくれがへ逃のがれる積つもりで數多あまたの家來衆けらいしゆうを引寄ひきよせ、各自めいめいに立派りつぱな屋敷やしきを造つくり、第二だいにのアーメニヤの都みやこを開ひらかして居をるのです。それ故ゆゑこの山やまは大祕密郷だいひみつきやうであつてウラル姫命ひめのみことの系統けいとうの者ものでなければ、一人ひとりも登のぼられないと嚴きびしく見張みはつて居ゐる山やまです」

時公「さうだらう、さうすると貴様は大工に化けて、我々の所在を探して居たのだな」

牛公「マア、そんなものです。然し貴方等を夫れと知つたら、「ウツカリ」船の中で喋るのではなかつた。何分にも酩酊して居たものだから、ツイ喋り過ぎて看破されて仕舞つたのです。この間も淤滕山津見と言ふ強相な神がやつて来て、大氣津姫を三五の道に歸順させると云つて居ましたが、その時此處に居る馬公、鹿公、虎公が今日の様に巧く計略を以て岩屋へ引つ張込み、逸早く三人は抜け出して外から岩戸をピシヤリと閉め、鐵の錠を卸して置きました。その隣の穴には竹野姫さんがお這入りになつて居らつしやいます。へい」

馬公「コレコレ牛公、自分の事を棚へ上げて、何だ、馬鹿々々しい。それや貴様がしたのぢやないか」

牛公「ウン、貴様だつたかいの」

馬公「定つた事だ、貴様だ。貴様は眞實に仕方の無い奴だ」

時公「その淤滕山津見は其後如何なつたのだ。サア牛公、白状せい」

牛公「如何なつたか、斯うなつたか、岩の戸を閉めたぎり、覗いた事は無いものだから、開けて見な分つたものぢやない。然し外を通る度に岩に耳あてて聞いてみると中でコツンコツンと音がして居る」

時公「もう、穴へ放り込まれたと言ふのは二人丈か、まだ外にあるだらう」

馬公「ありますとも、ツイこの間、獨眼の北光とか、曇りとか言ふ宣傳使が其次の穴に、あな恐ろしや、放り込まれよつた」

時公「それは誰が押し込むのだ」

馬公「へい、それは、マアマアマア、へい……何でも夫れは……」

時公「何だ、頭計り掻きやつて、貴様が計略で押し込んだのだらう」

虎公「お察しの通り馬公の仕事です」

時公「貴様等四人は同じ穴の狐だ。サア之から俺が行つて岩戸を叩き割つて、三人の宣傳使を救ひ出し、その後釜に貴様等四人を一つ穴に一つ宛、祭り込んでやらう。マア、楽しんで夜を明かすが宜からう」

牛公「今日は何とした運の悪い日だらう。オイオイ皆の奴、改心すると言はんか

い。もしもし時さん、私は第一番に只今限り、實に、誠に、眞から改心を致します。何卒見直し聞直して助けて下さい」

時公「赦し難い奴なれど、今迄の悪を改めて眞實に善に復歸するならば赦してやら

う。その代りにお前等の仲間で岩窟の外まで案内するのだ」

馬公「案内は致しますが、其お代りは困ります」

八公「ハ、ハ、ハ、ハ、到頭尻尾を出しよつたな。只の狸ぢやないと思つて居つた。田

納喜助、乃木常介などの矢張り連中だ」

鴨公「それだから悪は出来ぬと言ふのだ。オイオイ四人の連中、三五教はウラル

教の様に惨酷な事はせぬ教だ。みんな言向和すのだから、改心すればその時から

善と認めて待遇ふのだから、安心して休むが良からう」

時公「ヤア、マア、これで一と切りにして神言を奏上し、宣傳歌を歌つて休まし

て貰はう。サア松代姫様、梅ヶ香姫様、貴女から導師をやつて下さい」

松代姫、梅ヶ香姫は岩窟の中央に端坐して神言を宣り始めた。折しも岩窟の外

に雪をザクザクと踏み分け来る跫音がして岩窟の前にピタリと止まりける。

第二二章 征矢の雨(四八九)

岩窟の中には二人の宣傳使を始め、時公外六人は、足音が岩戸の前にピタリと止りしより、頭を傾け思案に暮れ居たり。暫くありて時公は、

「今外に立ち止つて中の様子を窺つて居る奴は、ウラル教の間者か。よもや三五教の宣傳使ではあるまい。松代姫様どうでせう、いつその事、戸をガラリと開いて、ウラル教であれば言向け和してはどんなものでせうなア」

松代姫「心配は入りませぬ、開けて下さいませ」

時公「承知致しました」

と、ガラリと岩室の戸を引張り開けた。戸に凭れて居た男は戸を引くと共に岩窟の中にゴロリと轉げ込んだ。見れば石凝姥の宣傳使である。

時公ときこう「ヤア、貴方あなたは東彦様あづまひこさま、エライ失禮しつれいをしました。これは又また不思議ふしぎな處ところでお目にかかったものです」

石凝姥いしこりどめは起き上り、塵ちりを拂はらひながら、

東彦あづまひこ「ヤア、貴方あなたは時さま、ヨウ梅ヶ香さま、これはこれは不思議ふしぎの御對面ごたいめんと申まをすもの、も一人ひとりの女をんなの方は誰人どなたで御座ございますか」

梅ヶ香姫うめがかひめ「ヤア東彦さま、よう来て下さいました。妾わらはの姉あねの松代姫まつよひめの宣傳使せんでんしでございます。姉さまの竹野姫たけのひめがコーカス山の岩窟がんくつに、惡魔あくまのために閉ぢ込められて

居ゐると聞ききました今救いますくひ出しに行ゆかうとする途中とちうです」

東彦あづまひこ「それは誠に都合つがふのよい事こと、我々われわれもこの山やまにはウラル彦ひこの一派いっばが立籠たてこもると聞きき、その魔神まがみを言向ことむけ和さむと、雪搔ゆきかき分わけて唯一ただひとり人ひとやつて來きましたところす。

斯様かやつな所ところにお目めにかかるも神かみのお引合ひきあはせ、明日あすは花々はなばなしく働はたらきませう。我々われわれもこの岩戸いはとの前迄まへまで二人ふたりの男をとこに案内あんないさして出でて來きましたが、外そとに立たつて漏もれ來くる聲こゑを耳みみ

を澄すませて聞きけば、三五あななひけう教せんの宣傳歌せんでんか、これは不思議ふしぎだと戸とに凭もたれて窺うかがつて居ゐますと、二人ふたりの奴やつは、ウラル教けうの間者まはしものと見みえて雲くもを霞かすみと引返ひきかへして仕舞しまひました。いづ

れ彼等かれらは我々われわれの此處ここに居ゐる事ことを大氣津姫おほげつひめに報告ほうこくにいつたのでせう。油斷ゆだんは大敵たいてき、サア、これから皆みなさま御一緒ごいつしょに前進ぜんしんする事ことと致いたしませう。先さきんずれば人ひとを制せいすと云いふ事ことがある」

松代姫まつよひめ「初めてお目めにかかりました。貴方あなたは名高なだかい石凝姥いしこりどめの宣傳使様せんでんしさまですか。梅うめ

ヶ香姫がかひめがお心安ごころやすう願ねがつたさうです。どうぞ私わたしもお心安ごころやすう願ねがひます」

八公やっこう、鴨公かもこう「ヤア、石凝姥様いしこりどめさまとやら、私わたしは八やつ、鴨かもと云いふ俄信者にはかしんじやで御座ございます、何どう

卒ぞお心安ごころやすく願ねがひます」

牛公うしこう「私わたしは三五教あななひけうの古ふるい古ふるい信者しんじやで御座ございます、何卒どうぞお心安ごころやすう」

八公やっこう「ハ、ハ、古ふるいは古ふるいだが今いまの前まへまで悪事あくじが現あらはれて、菟弱こんじやくのやうにピリピ

リとフルイ震ふるい信者しんじやさまです。こんなお方かたの仰有おつしやる事ことは根ねつから當あてになりませぬ」

時公ときこう「ヤア、喧やかましい奴やつだな。小供こどもは小供こどもらしう寝ねるのだよ」

鴨公かもこう「これがどうして寝ねられませうか。竹野姫たけのひめさまを救すくひ出すまで」

時公ときこう「それもさうだ。併しかし心配しんぱいして心こころを痛いためて體からだを弱よわらすより、刹那せつなしん心しんだ。寝ねる

時は悠ゆつくと寝ねて、働はたらく時ときにや働はたらけばよいのだ」

かく云ふうち、岩窟の外には、ワイワイと數多の人聲聞えて来た。

時公「ヤア、来た来た。ヤア、一緒にこんな岩窟へ閉ぢ込まれては働く事は出来ない。皆さま出て下さい。オイ牛、馬、鹿、虎、貴様等が出る事ならぬ、何時裏返るか知れぬ」

と云ひながら時公は飛び出した。

白壁に澤山の蠅が止まつたやうな黒い影、ワイワイと刻々に岩窟目蒐けて押寄せて来る。

松代姫「ヤア皆さま、たとへ幾萬の敵が来ても、我々には誠の神様がついてゐらつしやいますから驚くに及びませぬ。皆さん此處で悠くり神言を奏上しませうか」
東彦「ヤア、松代姫さま、梅ヶ香姫さま、貴女方は此處に悠りと神言をもつて應援して下さい。私は時公さまと二人で活動いたします」

と言ひながら、東彦は岩戸を開けて外に現はれ、泰然自若として寄せ来る群衆を眺めて居る。

矢は雨の如く東彦、時公に向つて、ヒウヒウと集まつて来る。時公は来る矢を

両手に掴んでは落しながら大音聲、

時公「ヤアヤア、此方は古今無雙の英雄豪傑天地の間に名の轟いた時雷の大神だ。

三人五人は面倒だ。百人千人億萬人、束に結うて一度にかかれツ、蝨潰しにして

やるぞ」

群衆の中より一人の大男、又ツと前に現はれ來り、右の肩を無理に聳かし、左

の肩をトタンと落とし、體を斜に構へ、眼を「くしや」くしやさせながら、

男「ヤアヤア、此方はヒツコス神の棟梁のビツコの熊さまだ。三五教の宣傳使の

奴、三人までは此方の指揮によつて生擒にいたした豪の者、時雷の瘦せ浪人、今

に一泡吹かせて呉れん。覺悟を致せよ」

東彦は歌ふ。

「朝日は照るとも曇るとも 月は盈つとも虧くるとも

雪は積むとも解けるとも コーカス山に立籠る

大氣津比賣の曲業を 言向け和しておくづきの

敵は幾萬來るとも
神の御靈の増鏡

照らして雲霧吹き拂へ
ビツコの熊も諸共に

高い鼻をば打ち碎き
噛んで碎いて神の道

腹に詰め込み洗てやる
八王神やヒツコスや

クスの神まで打ち揃ひ
天の岩戸を速かに

開く時こそ來りけり
神が表に現はれて

善と悪とを立てわける
此世を造りし神直日

心も廣き大直日
直日に見直し聞き直し

曲の言靈宣り直せ
コーカス山の峰の雲

伊吹き拂ふは神の息
勢猛き曲津見の

曲の砦を言靈の
玉の功に打ち碎き

心を碎く宣傳使
大氣津比賣の改心を

神に祈りて松代姫
心も固き石凝の

姥の命の宣傳使
春待ち兼ねし梅ヶ香の

姫の命の姉の君

竹野の姫を今此處に

送り來りて天地の

神に罪をば贖へよ

北光彦や淤藤山の

神の命の宣傳使

三つの御靈を揃へたて

早く返せよ返さねば

神が表に現はれて

コーカス山を立替へる

善と惡との眞釣合ふ

松の神代の宣傳使

心直くなる竹野姫

朝日は昇る東彦

光に笑める梅ヶ香の

惠の露のかかる時

かかる例も烏羽玉の

闇世を開く時さまの

神の化身の宣傳使

三十三相の其一つ

光現はれ北光の

彦の命と諸共に

コーカス山を照らすなり

日は照る光る月は盈つ

三五の月の御教に

心の雲を掻き分けて

神の御靈に立ち歸れ

本津御靈に立直せ

一度に開く梅の花
一度に開く梅の花

一度に開く梅の花

と歌ひ終つた。雨と降り来る矢の音は、この言霊と共にピタリとやみて、數多の捕手はいづれも雪の谷道に蹲まり、中には感涙に咽び、聲を放ちて泣くものさへもありけり。

松代姫、梅ヶ香姫は此場に現はれ、一同に向つて三五教の教理を懇に説き諭しけり。數多の捕手は神の清き言霊に打たれて、いづれも心を改め、遂には大氣津姫の部下の八王神の歸順に全力を盡す事となりぬ。

神の誠の心を知り、言霊を清め、身も魂も神に等しく、勇智愛親四魂の活用全くなりし神人の宣傳は、如何なる惡鬼邪神と雖も、其言霊に歸順せざるものは無いのである。故に宣傳使たるものは己先づ身魂を研ぎ、總ての神人に對し、我身に對すると同様の心懸を持たねばならぬ。此心懸なき宣傳使は、如何に智を振ひ辨を盡すとも、神の御國に救ふ事は出来ないものたるを知るべきなり。

第二三章 保食神〔四九〇〕

黄泉比良坂の戦に、常世の國の總大將大國彦命、大國姫命その他の神々は残らず日の出神の神言に言向和され、悔い改めて神の御業に仕へ奉ることとなつた。其爲め八岐の大蛇や、金毛九尾の惡狐、邪鬼、醜女、探女の曲神は暴威を逞しうする根據地なるウラル山に驅け集まり、ウラル彦、ウラル姫を始め、部下に憑依して其心魂を益々惡化混濁せしめ體主靈從、我利一遍の行動を益々盛んに行はしめつつあつたのである。惡蛇、惡鬼、惡狐等の曲津神はウラル山、コーカス山、アーメニヤの三ヶ所に本城を構へ、殊にコーカス山には莊嚴美麗なる金殿玉樓を數多建て列べ、ウラル彦の幕下の神々は、茲に各根據を造り、酒池肉林の快樂に耽り、贅澤の限りを盡し、天下を我物顔に振舞ふ我利々々亡者の隱處となつてし

まつた。かかる衣食住に贅を盡す體主靈從人種を稱して、大氣津姫命と云ふなり。
大氣津姫の一隊は、山中の最も風景佳き地點を選び、莊嚴なる宮殿を建設する
爲め、數多の大功を集め、晝夜全力を盡して、宮殿の造營に掛り、漸く立派なる
神殿を落成し、愈神靈を鎮祭する事となりぬ。流石のウラル彦夫婦も、天地の神
明を恐れてや先づ第一に國魂の神として、大地の靈魂なる金勝要大神を始め、大
地の靈力なる國治立命及び大地の靈體なる素盞鳴命の神靈を鎮祭する事となつた
のである。數多の八王神は競うて稻、麥、豆、粟、黍を始め非時の木の實、其他
の果物、毛の粗きもの、柔きもの、鱈廣物、鱈狹物、沖津藻菜、邊津藻菜、甘菜、
辛菜に至るまで、人を派して求めしめ、各自に大宮の前に供へ奉る事とした。此
宮を顯國の宮と云ふ。此祭典は三日三夜に涉り力行された。數多の八王神、ヒツ
コス、クスの神達は、祝意を表する爲め、酒に溺れ、或は歌ひ、或は踊り舞ひ狂
ふ様、恰も狂人の集まりの如き状態なりき。
顯國の宮は祭典始まると共に、得も言はれぬ恐ろしき音響を立てて唸り始めた
り。ウラル姫は全く神の御喜びとして勇み、酒宴に耽りつつあつた。八百有餘の

八王神を始め、幾千萬のヒツコス、クスの神は、

サアサアヨイヂヤナイカヨイヂヤナイカ 酔うてもヨイヂヤナイカ

泣いてもヨイヂヤナイカ 笑つてもヨイヂヤナイカ

怒つてもヨイヂヤナイカ 死んでもヨイヂヤナイカ

倒けてもヨイヂヤナイカ お宮が唸つてもヨイヂヤナイカ

天地が覆つてもヨイヂヤナイカヨイヂヤナイカ 山が割れてもヨイヂヤナイ

カヨイヂヤナイカ

三五教でもヨイヂヤナイカヨイヂヤナイカ ウラル教でもヨイヂヤナイカヨ

イヂヤナイカ

勝てもヨイヂヤナイカ 負けてもヨイヂヤナイカ

何でもヨイヂヤナイカ 三日のお祭り四日でも、五日でも

十日でもヨイヂヤナイカ 人はどうでもヨイヂヤナイカヨイヂヤナイカ

自分丈けよければヨイヂヤナイカヨイヂヤナイカ ウラルの教が三千世界で

一番いちばんヨイヂヤナイカヨイヂヤナイカヨイヂヤナイカ
ヨイヤサのヨイトサツ

サ

飲のめよ騒さわげよ一寸先いっすんさきや暗やみよ
暗やみの後あとには月つきがで出る

月つきはつきぢやが運うんの盡つき
盡つきてもヨイヂヤナイカ

亡ほろんでもヨイヂヤナイカ
倒たふせばヨイヂヤナイカ

あななひけう
三五教の宣傳使せんでんし』

と無む我夢中がむちうになつて、晝夜ちうやの別べつなく數多あまたの八王神やつこすがみ、ヒツコスやクスの神等かみに、數多あまたの邪神じゃしんが憑うつつて叫さけび廻まはる。八王神やつこすがみの綺麗きれいな館やかたも、數多あまたのヒツコスに土足どそくの儘踏ままふみにじられて踊をどり狂くるはれ、襖ふすまは倒たふれ、障子しやうじは破やぶれ、戸とは壊こはれ、床ゆかは落おとされ、敷物しきものは泥まぶれ、着物きものは勝手氣儘かつてきままに取出とりだされ、着潰きつぶされ、雪解ゆきとけの泥中どろなかに着きた儘醉ままよつて轉ころげられ、食くひ物は食くひ荒あらされ、寶たからは踏ふみにじられ、大亂癡氣騒だいらんちきさわぎが始はじまつた、されどもウラル姫ひめを始め數多あまたの八王神やつこすがみは、何れも惡魔あくまに精神せいしんを左右さいうせられて居をるから、皆好みんなよい氣きになつてヒツコス、クスの神かみと共に手てをつなぎ踊をどり狂くるふ。顔かほも着き

物も泥まぶれになつて居る。顯國の宮は刻々に鳴動が激しくなつて來た。ウラル
姫は泥まぶれの體軀に氣が付かず、忽ち顯國の宮の前に進み、

ウラル姫 コーカス山に千木高く 大宮柱太しりて

仕へ奉れる神の宮 顯しき國の御靈たる

速須佐之男の大御神 國治立の大御神

金勝要の大神の 三魂の永遠に鎮まりて

神の稜威のアーメニヤ コーカス山やウラル山

ウラルの彦の御教を 天地四方に輝かし

我世を守れ何時迄も 此世を守れ何時迄も

顯しの宮の唸り聲 定めし神の御心に

叶ひ給ひし御しるしか 日々に彌増す唸り聲

ウラルの姫の功績の 天地に輝く祥兆や

嗚呼有難や有難や 天教山や地教山

黄^{わう}金^{こん}山^{ざん}や 萬^{まん}壽^{じゆ}山^{ざん} 是^これに 集^{つど}へる 曲^{まが}神^{かみ}の
 曲^{まが}の 身^み魂^{たま}を 平^{たひ}ら げて ウ^ウラ^ラル^ルの 神^{かみ}の 御^み教^{をしへ}に
 心^{こころ}の 底^{そこ}より ま^まつ^つろは せ 天^{あま}の 下^{した}を ば 穩^{おたや}かに
 守^{まも}らせ 給^{たま}へ 三^み柱^{はしら}の 吾^{あが}大^{おほ}神^{かみ}よ 皇^{すめ}神^{かみ}よ
 神^{かみ}の 稜^{みいづ}威^{いづ}の 幸^{さち}は ひて 遠^{とほ}き 神^{かみ}世^よの 昔^{むかし}より
 例^{ためし}も あらぬ コーカスの 山^{やま}に 輝^{かがや}く 珍^{うづ}の 宮^{みや}
 神^{かみ}酒^きは 甕^{みかの}高^{たか}しりて 甕^{みか}の 腹^{はら}を ば 満^みて 竝^{なら}べ
 荒^{あらし}稻^ね和^{にぎ}稻^{しね}麥^{むぎ}に 豆^{まめ} 稗^{ひえ}黍^{きび}蕎^{そば}麥^ばや 種^{くさぐさ}々^々の
 甘^{あま}菜^な辛^{から}菜^なや 無^{いち}花^{じゆ}果^くの 木^この 實^みや 百^{もも}の 果^{くだもの}物^{もの}や
 猪^{しし}や 羊^{ひつじ}や 山^{やま}の 鳥^{とり} 雉^{きじ}や 鶇^{ひよど}鳩^{はと}雀^{すずめ}
 沖^{おき}津^つ百^{もも}の 菜^は邊^へ津^つ藻^も菜^はや 種^{くさぐさ}々^々 供^{そな}へし 供^{そな}へ物^{もの}
 心^{こころ}平^{たい}らに 安^{やす}らかに 赤^{あか}丹^にの 穂^ほにと 聞^{きこ}し 召^めせ
 神^{かみ}が 表^{おもて}に 現^{あら}はれて ウ^ウラ^ラル^ルの 神^{かみ}の 御^み教^{をしへ}を
 堅^{かき}磐^は常^と盤^{きは}に 守^{まも}れかし 善^{ぜん}と 惡^{あく}とを 立^{たて}別^{わけ}て

此世を造りし國の祖

國治立の大神の

神の御前に四方の國

百の民草悉く

コーカス山に參る詣で

ウラルの神の御教に

潮の如く集ひ來て

我世の幸を守れかし

ア、三柱の大神よ

ア、三柱の皇神よ

心許りの御幣帛を

捧げて祭るウラル彦

ウラルの姫の眞心を

良きに受けさせ賜へかし

良きに受けさせ賜へかし

と一生懸命神前に拜跪して祈つて居る。此時數多の八王神、ヒツコス、クスの神

は神殿に潮の如く集まり來り、又もや、

ヨイヂヤナイカヨイヂヤナイカヨイヂヤナイカ
お宮はどうでもヨイヂヤナイカ

酒さへ飲んだらヨイヂヤナイカ

飲めよ飲め飲め一寸先や暗よ

後はどうでもヨイヂヤナイカ

暗の後は月が出る

運の盡でもヨイヂヤナイカ

この世の盡でもヨイヂヤナイカ

ウラルの姫の泥まぶれ

笑うて見るのもヨイヂヤナイカ

上でも下でもヨイヂヤナイカ

八王でもビツコスでもヨイヂヤナイカ

三五教でもヨイヂヤナイカ

ウラル教捨ててもヨイヂヤナイカ

お宮が唸つてもヨイヂヤナイカ

潰れた所でヨイヂヤナイカ

お酒が一番ヨイヂヤナイカ

ヨイヂヤナイカヨイヂヤナイカヨイヂヤナイカヨイヂヤナイカ

と数千の群衆は口々に酔ひ潰れ、泥にまぶれ、上下の區別なく飛廻り跳狂ひ踊り

騒いで居る。かかる所に神殿さして悠然と現はれ出でたる三五教の宣傳使、松竹

梅を始めとし、石凝姥神、天之目一箇神、淤滕山津見神、時置師神、八彦神、鴨

彦神は口を揃へて、

神が表に現はれて

善と悪とを立別ける

此世を造りし神直日

心も廣き大直日

只何事も人の世は

直日に見直し聞直せ

コーカス山に集まりし

ウラルの姫を始めとし

百の八王神、ヒツコスヤ

クスの神まで皇神の

御水火に早く甦り

醜の身魂を立替へて

大氣津姫の曲業を

直日に見直せ宣り直せ

神は我等と俱に在り

醜の曲津の亡ぶ時

八十の醜女の亡ぶ時

八岐大蛇や曲鬼や

醜の狐や千萬の

曲の身魂を皇神の

神の御前に追ひ出し

眼を醒せ目を開け

顯しの國の大宮に

鎮まり給ふ三柱の

神の怒りは目の當り

天地に響く唸り聲

酔を醒せや目を覺ませ

胸の帳を押開けて

そら かがや 朝あさひこ
 空に輝く朝日子の
 ひ でのかみ まごころ
 日の出神の眞心に
 かへ かへ もろびと
 復れよ歸れ諸人よ
 ひこ
 ウラルの彦よウラル姫
 かみ なんぢ すく
 神は汝を救はむと
 ちぢ こころ くだ
 千々に心を碎かせつ
 われら つか たま
 我等を遣はし給ふなり
 われら かみ おんつかひ
 我等は神の御使
 あななひけつ せんでんし
 三五教の宣傳使
 せんでん ばんか ことたま
 宣傳萬歌の言靈に
 たま まはしら たてなほ
 靈の眞柱立直し
 いちじ はや たてか
 一時も早く立替へよ
 みたま たてか たてなほ
 身魂の立替へ立直し
 たいしゆれいじう たてなほ
 體主靈從の立直し
 おほげつひめ おこな
 大氣津姫の行ひを
 けふ かぎ たてなほ
 今日を限りに立直せ
 てん ふる ち ゆる
 天は震ひ地は揺ぐ
 やま ひ かわ
 山は火を噴き割るとも
 まごころ かみ まごころ
 誠の神は誠ある
 なれ みたま すく
 汝が身魂を救ふらむ
 ひとひ はや の なほ
 一日も早く詔り直せ
 ひとひ はや あらた
 一日も早く改めよ

と ことばさはや
 と言葉爽かに歌ひ終つた。
 しんでん めいどう このせんでんか とも
 神殿の鳴動は此宣傳歌と共にピタリと止んだ。ウラル
 ひめ かみ たぢま きぢよ へん
 姫の神は忽ち鬼女と變じ、
 くも よ かぜ おこ あめ
 雲を呼び、風を起し、雨を降らし四邊を暗に包み、八

王神、ヒツコス引連れて、天の磐船、鳥船に其身を任せ、アーメニヤ、ウラルの山を指して雲を霞と逃げ散りたり。松竹梅を始め宣傳使一同は、改めて神殿に祝詞を奏上し、神徳を感謝する折しも此場に現はれた五柱の神がある。見れば鬼武彦、勝彦、秋月姫、深雪姫、橘姫であつた。何れも皆鬼武彦が率ゐる白狐の化身である。流石奸智に長けたる金毛九尾の悪狐も、白狐の鬼武彦、旭、高倉、月日の神力には敵はず、ウラル姫と共に此場を捨てて逃げ去つてしまつたのである。茲に石凝姥神、天之目一箇神、天之兒屋根神は、高倉以下の白狐に向ひ顯國の宮に捧げ奉れる稻、麥、豆、黍、粟の穂を銜へしめ、世界の各地に播種せしめたり。

國治立命、神素盞鳴命、金勝要の三柱を祭り、顯國の宮を改めて飯成の宮と稱へたり。宮の鳴動したる理由は、何れも體主靈從の穢れたる八王神の供物なれば、神は怒りて之を受けさせ給はざりし爲めなり。白狐は五穀の穂を四方に配り、世界に五穀の種子を播布したり。これより以前にも五穀は各地に稔れども、今此處に供へられたる五穀の種子は勝れて良き物な

りし故なり。

今の世に至るまで白狐を稻荷の神と云ふは此理に基くものと知るべし。

(大正一一・三・三 舊二・五 谷村眞友録)

第五篇

乾坤清明

第二四章

顯國宮(四九一)

春霞棚引き初めてコーカスの、山の尾の上や百の谷、大峽小峽の樹々の枝、
紅白紫色々と、咲き亂れたる顯國、靈の御舎雲表に、千木高知りて聳え立ち、
金の薨三つ巴、輝く旭日に反射して、遠き近きに照り渡る、神須佐之男の大神は、
黄

宮の主と現れまして、堅磐常盤に鎮まりて、大海原に漂へる、秋津島根を心安の、美しき神世に開かむと、瑞の御靈の三葉彦、神の教を廣道別の、三五教の宣傳使、太玉の命と名を變へて、榮え芽出度き松代姫、妹背の道を結ばせつ、天津御神や國津神、八百萬在す神等に、太玉串を奉る、卜部の神と任せ給ひ、顯國玉の宮の司となし給ふ。青雲別の其御稜威、高彦神の宣傳使、天の兒屋根と改めて、天津祝詞の神嘉言、詔る言靈の守護神、顯國玉大宮の、祝の神と任せ給ひ、梅ヶ香姫と妹と背の、契を結ばせ給ひけり。白雲別の宣傳使、教を開き北光の、神の司の又の御名、天の目一つ神司、竹野の姫を娶はして、アルプス山に遣はしつ、石凝姥と諸共に、鏡、劍を鍛はしめ、國の御柱樹て給ふ、神縁微妙の神業を、四方の神達人草の、夢にも知らぬ久方の彦の命の雲道別、名も大歳の神司、五穀の食を葦原の、四方の國々植ゑ擴め、神の恵みも高倉や、月日も清く朝日子の、白狐の神の此處彼處、生命の苗を配りて、青人草の日に夜に、食ひて生くべき水田種子、守り給ふぞ尊けれ。

コーカス山の山上にウラル彦、ウラル姫の贅を盡し美を竭して建造したる顯國

の宮殿には大地の神靈たる金勝要神、大地の靈力たる國治立命及び大地の靈體の守護神須佐之男大神を鎮め奉り、莊嚴なる祭典を行ひ三柱の神の神力に依つて、天ヶ下を統御せむと體主靈從の根本神たる天足彦、胞場姫の再來、八岐の大蛇や惡狐、其他の邪鬼妖魅に天授の精魂を誑惑されて、ウラル彦、ウラル姫以下の曲神は、最後の經綸場としてコーカス山を選び、宮殿を造り八王神を數多集へて、アーメニヤにも劣らざる神都を開きつつありける。

斯かる處へ石凝姥命、天之目一箇神、天之兒屋根命、正鹿山津見神の娘大神津見と現はれたる松代姫、竹野姫、梅ヶ香姫、時置師神、八彦、鴨彦等の神現はれて、天津誠の神言を奏上し宣傳歌を唱へたれば、流石のウラル姫も以下の神々も天津誠の言靈に膽をうたれ、胸を挫がれ、全力を集注して經營したる可惜コーカス山を見捨てて、生命からがらウラル山、アーメニヤの根據地に向つて遁走し、コーカス山は今は今全く三五教の管掌する處となりける。

茲に神須佐之男命は地教の山を後にして顯國の宮に入らせ給ひ、天之目一箇神をして十握の劍を鍛へしめ顯國の宮の神實となし、天下の曲神を掃蕩すべく天之

兒屋根命、太玉命をして晝夜祭祀の道に鞅掌せしめ給ひぬ。神須佐之男大神は十握の劍を數多作り供へて、曲神の襲來に備へむため天之目一箇神をアルプス山に遣はし、鋼鐵を掘らしめ數多の武器を作る事を命じ給へり。アルプス山はウラル彦、ウラル姫の一派の武器製造の原料を需めつつありし重要な鑛山なりき。これより天之目一箇神は竹野姫と共にアルプス山に向ふ事となり、淤滕山津見神、正鹿山津見神、月雪花の宣傳使はアーメニヤの神都に向つて魔神を征服すべく、神須佐之男大神の命を奉じてアーメニヤに向ひける。又アルプス山には石凝姥神を添へて、天之目一箇神、竹野姫と共に鋼鐵を需めしむべく出發せしめ給ひける。

(大正一一・三・四 舊二・六 北村隆光録)

此事忽ち天上に在す天照皇大神の御疑ひを懐かせ給ふ種となり、遂に須佐之男命は、姉神に嫌疑を受け神追ひに追はれ給ふ悲境に陥り給ひたるなり。

第二十五章 巫の舞 (四九二)

コーカス山の曲津神共を、天津誠の言靈の伊吹に伊吹き拂ひ、今は邪氣全く拂拭され、風塵を留めざるに至りぬ。

茲に神素盞鳴大神は、兩刃の劍を神實として神殿に華々しく鎮祭し、大地の靈魂なる金勝要大神、靈力なる國治立大神の二柱を祭り、莊嚴なる祭典を行ひ給ひ、祭官としては、天之兒屋根命天津祝詞を奏上し、太玉命太玉串を奉り、天之目一箇命はアルプス山の鋼鐵を以て兩刃の劍を造り、之を神實として奉安し、石凝姥命は神饌長となり、時置師神、八彦、鴨彦は神饌を運び、大歳神は被戸を修し、松竹梅の桃の實は御巫の聖職を仕へまつり、月雪花の三柱は茲に忽然として現はれ、歌を歌ひ舞を舞ひ、この祭典を賑したまひける。其時の秋月姫の歌、

此世を造りし元津祖

國治立の大神が

根底の國に現はれて

百の悩みを受けたまひ

闇に隠れて世を守る

其功勳を助けむと

天津御神の御言もて

天教山に現はれし

神伊奘諾の大御神

其妻神と現れませる

神伊奘册の大神の

御靈幸はひましまして

神素盞鳴の大神の

身體なり出でましましぬ

神伊奘諾の大神の

貴の御鼻に生れませる

其神靈幸ひて

命の御靈にかかりまし

大海原に漂へる

豊葦原の瑞穂國

治め給へと言依さし

給ひし貴の神言を

諾ひまして朝夕に

心配らせ給へども

天足の彦や胞場姫の

醜の靈魂になり出でし

八岐大蛇や醜狐

悪き曲鬼八十曲津

疎び猛びて天の原

大海原を搔き亂し

怪しき雲は天地に

非時さやる暗の夜を

晴らして神の御心に

こたへまさむと千萬に

心碎かせ給ひしが

黑白もわかぬコーカスの

山の岩戸も今日あけて
心こころ樂たのしき神祭かむまつり

祭り納むる珍うづの宮みや
天津祝詞あまつのりとの聲こゑ清きよく

珍玉串うづたまぐしのいや高く
神酒みきは甕みかのへた高たか知りて

海河山野種々の
珍うづの御幣みでく帛らた奉たまり

天と地とは一時に
光輝ひかりく美詞みやびこと

堅磐常盤かきはときの松代姫まつよひめ
春夏秋冬整はるなつあきふゆとひて

節過ふしあやまたぬ竹野姫たけのひめ
神かみの勳いさをも一時ひとときに

開く梅うめヶ香か姫ひめの司つかさ
淤おど滕やまづ山み津見まさや正か鹿山やま

津見づみの命みことの眞心まごころを
空澄そらすみ渡わたる秋あき月の

光ひかりを此處ここに深雪みゆき姫ひめ
誠まことの道みちも橘たちばな姫ひめの

貴うづの命みことの宣傳せんでん使し
鋼鐵銅まがねあかがねアルプスの

山の尾上をのへのいと高く
惠めぐみも深ふかき琵琶びわの湖うみ

山野やまぬ海川うみかはおしなべて
仕つかへまつらむ珍うづの宮みや

神かみの誠まことの言ことの葉はの
みやびの花はなぞ尊たふとけれ

みやびの息ぞ畏けれ^{い き か し こ}」

深雪姫は再び立つて祝歌を奏上したり。其歌、
^{み ゆ き ひ め ふ た た た} 深雪姫は再び立つて祝歌を奏上したり。其歌、

青木が原に比ぶべき
^{あ を き は ら} 青木が原に比ぶべき
^{こーカス山に降り積る} コーカス山に降り積る

深雪も晴れて今日の春
^{み ゆ き は} 深雪も晴れて今日の春
^{み い づ た か} 御稜威も高く照り渡る

高天原に現れませる
^{た か あ ま は ら あ} 高天原に現れませる
^{か み み あ ら か} 神の御舍千木高く

大宮柱太知りて
^{お ほ み や ば し ら ふ と し} 大宮柱太知りて
^{つ か} 仕へまつれるウラル彦

ウラルの姫が眞心を
^{う ら ら の ひ め ま し こ ろ} ウラルの姫が眞心を
^{あ め つ ち} 天地かけて盡したる

これの顯しき國の宮
^{こ れ の う つ} これの顯しき國の宮
^{きんかつかね おほみかみ} 金勝要の大御神

國治立の大神の
^{くにはるたち おほかみ} 國治立の大神の
^{たま ちから} 靈と力の御守りに

大海原の主宰神
^{おほつなばら つかさがみ} 大海原の主宰神
^{かむすさのを おほかみ} 神素盞鳴の大神と

現はれまして永久に
^{あ ら} 現はれまして永久に
^{うづ みやゐ} 珍の宮居に鎮まりて

天津神人國津神
^{あまつかみびとくにつかみ} 天津神人國津神
^{もも くさき} 百の草木に至るまで

惠めぐみの露つゆの掛卷かけまくも 畏かしこき神かみの詔勅みことり

詔のり直なほすてふ麻柱あななひの 神かみの教をしへの宣傳使せんでんし

山川やまかはわた渡り荒野あれのわけ 雪ゆきを踏ふみわけ霜しもを浴あび

寒さむけき風かぜに梳くしけづり 非時ときじく雨あめにゆれながら

治をさまる御代みよを深雪みゆき姫ひめ 神かみの「みゆき」の今いま此處ここに

現あらはれ給たまふぞ嬉うれしけれ コーカス山ざんの峰みね高たかく

天あめにます神國津神かみくにつかみ 神かみの光ひかりを現あらはして

大海原おほつなばらに漂ただよへる 瑞穂みづほの國くにを永久とこしへに

いと平たひらけく安やすらけく 治をさめたまへや素盞すさのを鳴なの

神かみの命みことの司神つかさがみ 黒雲くろくも四方よもに塞ふさがりて

世よは常闇とこやみとなるとても 月日つきひの水い火きより生あれませる

我わが皇神すめかみの神靈かむみたま 玉たまの劍つるぎを振ふり翳かざし

醜しこの村雲むらくも切り拂はらひ 拂はらひ清きよめて天津日あまつひの

御國みくにに在います天照あまてらす 皇大神すめおほかみの御前おんまへに

太じき勳を經緯の 錦の旗を織りなして
御國を治めたまへかし 千代も八千代も萬代も
君の勳のいや高く 君の齡のいや長く
幸多かれと祝ぎまつる』

と歌ひ終り淑やかに元の座につきにけり。

(大正一一・三・四 舊二・六 加藤明子録)

(昭和一〇・二・一九 於長濱住茂登旅館 王仁校正)

第二六章 橘の舞 (四九三)

橘姫は立ち上り、遷宮式の祝歌を奏上したり。其の歌、

皇大神の千萬に 此世を治め給はむと

心筑紫の橘の 小戸の青木ヶ原にます

神伊邪那岐の大神の 依さしのままに海原を

知ろし召さむと天の原 雲霧分けて葦原の

瑞穂の國に天降りまし 神の教の永久に

橘姫の美はしく 勳を祝ひ奉る

世は平かに安らかに 山川草木おしなべて

君の御稜威を慕ひつつ 仕へ奉らむ現し御代

生代足代の礎を 茲に顯の國の宮

救ひの神が現はれて 善と惡とを立別る

別けて尊き伊邪那岐の 神の御水火に現れませる

神の御言の御あらかを 仕へ奉りしアーメニヤ

ウラルの山のウラル彦 ウラルの姫の曲神も

誠の神の分靈魂 惠も深き皇神の

大御心に隔てなく

善も悪きもおしなべて

守らせ給ふ神心

曲のみたまに迷はされ

神に背きし二柱

いたく憎ませ給ふなく

恵の露の山川や

荒野の草に致るまで

注がせ給ふ神直日

心も廣き大直日

直日に見直し聞き直し

宣り直しつつ曲神の

海より深き罪咎を

拭ひて助け給へかし

一視同仁天地の

神の恵は天津日の

總ての物に照る如く

三五の月の隈もなく

恵みの露を與ふ如

御心平に安らかに

恵みも深き言靈に

言向け和し天が下

四方の國々落ちもなく

漏れなく救ひ給へかし

顯の國の宮の前

畏み仕へ奉る身の

吾が祈言を橘の

姫の命と現はれて

常世とこよの暗やみを吹ふき被はひ
天あまの岩いは戸とをおし分わけて
ミロクかみの神かむの神業むわざに
仕つかへ奉まつらむ今日けふの日ひに
仕つかへ奉まつるぞ尊たふとけれ
仕つかへ奉まつるぞ尊たふとけれ』

と歌うたひ終をはつて元もとの座ざに着つきける。

天之兒あめのこ屋や根命ねのみことは立たち上あがり、

天津御空あまつみそらに千ち萬よろづの
星ほしの輝かがやき渡わたる如ごと

大海原おほうなばらに現あれませる
天あめの益ます人ひと民たみ草ぐさの

限かぎりも知しらぬ安やすの河かは
眞砂まさごの如ごとく生うみなして

神世かみよを開ひらかせ給たまふなり
大御おほみ百た姓からとなり出いでし

百もも人びと、千ち人びと、萬よろづ人びと
草くさの片か葉きはも漏もらすなく

天あめと地つちとの水い火きを汲くみ
筑紫つくしの日ひ向むか橘たちばなの

小戸をどの青木あをきヶ原がはらと鳴なる
生言いくこと靈たまのアオウエイ

五大ごだい父いふ音おんの神かみの聲こゑ
 父ちちと母ははとの息いき合あせ
 水みづと現あれます言こと靈たまの
 地つちの御み神かみと現あれませる
 息いきは結むすびの神かみの聲こゑ
 五十いその言こと靈たま鳴なり出いでて
 天あめ地つち四よ方もの神かみ人びとや
 其その言こと靈たまの清きよくして
 天あまの「かず」歌うた數かずへつつ
 治をさまる天あま津つ太ふ祝のり詞と
 轟とどろき渡わたり曲ま津が見つの
 常とこよ夜やの暗やみも晴はれ渡わたり
 玉たまの宮みや居ゐの神かみ祭まつり
 天あめと地つちとは明あきけく
 母ぼ音いんはカサタナハマヤラワ
 火ひの神かみキシチニヒミイリ
 息いきはケセテネヘメエレ
 息いきはコソトノホモヨロ
 成なるはクスツヌフムユルウ
 二十にじふ五ご聲せいを生うみ出いだし
 萬よろづの物ものを生うみませる
 比たぐひ稀まれなる神かみ嘉よ言こと
 祝のり詞との聲こゑは天あめ地つちに
 神かみも隠かくろひ鎮しづまりて
 塵ちりも留とどめぬ顯うつ國しくに
 上かみと下しもとは睦むつび合あひ
 鏡かがみの面おもを合あはせつつ
 空そら明あきけく地つち豊ゆたに

玉の御柱搗きかため 身魂も清き劍太刀
 斯くも目出度き今日の空 空行く雲も憚りて
 晴れ渡りたるコーカスの山 山の祭りぞ尊けれ
 日は照る光る月は満つ 三ツの御霊の神柱
 大神津見の三ツの桃 月雪花と現はれし
 三五教の三柱の 神の宰の宣傳使
 錦の袖を振り榮えて 今日 日の御祭り祝ぎまつる
 松は千歳の色深く 千代に八千代に永久に
 榮え三口クの御代までも 幸多かれと祈るなり
 幸多かれと祈るなり 此世を照らす惟神
 御霊幸はひましまして 大地の主とあれませる
 皇大神の【まつりごと】 守らせ給へ天津神
 國津神たち八百萬 五伴緒や八十伴男
 草の片葉にいたるまで 今日 日の生日の良き日をば

祝ひ奉るぞ尊けれい は まつ たふと

太玉命は、太玉串を手にながら立ち上り、
簡単なる祝歌を奏上したり。

天と地との神々の
水火より成りし神嘉言あめ つち かみがみ

四方に轟き高光の
天の兒屋根の神宰よも とどろ たかてる あめ こやね かむつかさ

宣る言靈の清くして
太き勳を太玉のの ことたま きよ ふと いさを ふとたま

太玉串となびきつつ
太敷立てし宮柱ふとたまぐし ふとしき た みやばしら

假令雨風地震の
叫び荒ぶる世ありともたとへ あめかぜないふる たけ すさ よ

天地清むる言靈の
水火に固めし神の宮てんち きよ ことたま いき かた かみ みや

千代も八千代も動かまじ
ア、尊しや有難やちよ やちよ うご ありがた

今日の祭りの此の庭に
三つ葉の彦の宣傳使けふ まつ このにほ み ば ひこ せんでんし

神の御稜威も廣道の
別の命と現はれてかみ み いづ ひろみち わけ みこと あら

心平に安らかに
太玉串を奉るこころたひら やす ふとたまぐし たてまつ

ア、惟かむながらかむながら神々々御靈幸はひましまして

秋津島根を永久まもに守らせ給へたま幾千代もいくちよ

顯の國の宮の元ちり塵も留めじ清らかにとど

神世を永久かみよに立てませよと神世は永久かみよに榮えませと

榮ゆる御代さかを松竹まや梅うめの花はな咲く春はるの日のひ

心こころも長閑のどかに受けませよう心こころを平たひらに受けませよう

と歌うたひ終をはつて元もとの座ざに着つきにける。

此外このほか、神人等かみがみらは各自めいめいに祝歌しゅくかを奏上そうじやうし、目出度遷宮式めでたくせんぐうしきは終了しうねうを告つげたりける。

(大正一一・三・四 舊二・六 藤津久子録)

第二十七章

太玉松ふとたままつ (四九四)

仰げば高しコーカスの、山に輝く瑞の宮、薨の紋は三つ巴、國治立の大神や、
金勝要の大御神、速須佐之男の三柱の、神の鎮まる顯國、瑞の宮居の御標か、天
地人の三才を、清めて照す表徴か、三葉躑躅と現れて、久方彦の雲路別、大歳神
と現れて、瑞穂の稻を葦原の、中津御國に植了せ、太玉彦や松代姫、天の兒屋根
や梅ヶ香姫の貴の命や北光の、天の目一箇神司、竹野の姫と鴛鴦の、契を結ぶ三
つ布團、三つの祝ひを一時に、三五の月の御教の、神を祭りし宮の前、三々九度
の杯も、月雪花の三柱の、心盡しの立廻り、いと賑かに杯のクルクル廻る神の前、
目出度かりける次第なり。

太玉神は松代姫を娶り、天兒屋根命は梅ヶ香姫を娶り、天之目一箇神は竹野姫
を娶り、ここに三組の神前結婚式は嚴肅に行はれたり。石凝姥神は自ら神主とな
つて、天津祝詞を奏上し、大歳神は太玉串を奉り、時置師神は神饌を獻じ、八彦
は被戸を修し、鴨彦は後取の役を勤めた。三五の教に歸順したる當山の家越、ヒ
ツコス、酒の神達は集まり來りて此慶事を祝したり。石凝姥命は神前に恭しく言
靈歌を奏上したり。

豊葦原の瑞穂國

守りの神と生れませる

金勝要の大御神

國治立の大御神

顯し世の事洩れもなく

知ろし召します須佐之男の

神の命の大前に

石凝姥の神司

謹み敬ひ畏みて

御食御酒御水奉り

海河山野くさぐさの

美味物をば大前の

御机代に足らはして

横山の如奉る

此有様を平けく

いと安らけく聞し召し

神の勳も太玉の

命に娶す松代姫

天之兒屋根の神司

薰り床しき梅ヶ香姫の

貴の命を娶はしぬ

天の目一箇神司

竹野の姫を娶はして

名さへ目出度き三五の

神の教を四方の國

宣べ傳へ行く神司

夫婦の契永久に

鴛鴦の衾の暖かく

世人の爲に眞心を
朝な夕なに筑紫潟

海の底ひも不知火の
尊き神の御恵みに

千代も八千代も變りなく
睦び親しみ永久に

五六七の世迄も靈幸ふ
神の恵みに玉の緒の

命續かせ給ひつつ
禍多き現し世を

清め淨むる水火となり
此世を開く花となり

光となりて村肝の
世人の心照すべく

天の岩戸は永久に
開きてあれや香ばしく

一度に開く梅の花
桃の花にも魁て

盛り短き櫻花
嵐に吹かれて散る如く

果かなき夢を見ざらまし
堅磐常盤の松翠

翠滴る珍の子を
濱の眞砂の其如く

數限りなく地の上に
産みなさしめて葦原の

瑞穂の國を安國と
開かせ玉へ三つ巴

三つ葉躑躅の神の裔

天の太玉玉の緒の

命は永久に長しへに

幾久しかれ久しかれ

久方の天にます神國津神

守り玉ふはさらなれど

此御殿に鎮まりし

畏き三柱大御神

ここに目出度き三夫婦の

契は盡きず望月の

家内は丸く治まりて

波も静に高砂の

尾の上の松の下蔭に

尉と姥との居ます如

守らせ玉へ石凝姥の

貴の命の神司

鵜自物頸根突きぬきて

稱への言葉了へまつる

扨て神前に天津神籬を立て、是を撞の御柱に擬へ、太玉命は左より此御柱を廻

り、松代姫は右より廻りあひて、娶の儀式を取行ひけり。太玉命は、

天と地との神々の

教を四方に開かむと

靈鷲山に身を忍び

黄金山や萬壽山

三つの神都に往來して

珍の教を開きたる

三葉の彦の宣傳使

天の下をば遠近と

神の教を宣べ傳ふ

廣道別の神司

天の太玉神となり

三柱神の御恵みに

嫁ぎの道に仕へつつ

月の御柱廻り合ひ

治る御代を松代姫

心の色は縁なす

堅磐常盤の神御靈

美哉好少女

あな麗しき好少女

神の依さしを畏みて

天津日の影西山に

隠れ玉へば汝と我と

美斗能麻具波比長しへに

鴛鴦の契の睦びあひ

嗚呼麗しき好少女

嗚呼麗しき好少女

と歌ひつつ神籬を左より廻る。松代姫は右より神籬を廻りながら、

珍うづの都みやこに生あれまして

國くに治立はるたちの大神おほかみの

御前みまへに仕つかへまつりたる

桃上彦ももがみひこの珍うづの御子みこ

松竹梅まつたけうめの三柱みはしらの

姫ひめの命みことの我われは姉あね

神かみの御おん爲ため國くにの爲ため

世よ人の爲ために天あめが下した

四方よもの國くに々くに經へ廻めぐりて

名なさへ目め出で度たき宣傳せんでん使し

高砂島たかさごしまや常世國とこよくに

黄泉よもつの島しまに現あられて

桃上彦ももがみひこの瑞みづの御子みこ

大神おほかみ津見つみと現あられて

日ひの出で神かみの木この花はなの

珍うづの柱はしらと仕つかへつつ

黄金山わうごんざんに參登まゐのぼり

神かみの御言みことを畏かしこみて

心こころも輕かるき蓑笠みのかさの

アシの沙漠さばくを横斷わうたんし

駱駝らくだの背せなに跨またりて

歩あゆみも早はやきアルタイの

山やまの風おろしに吹ふかれつつ

クヌ野のケ原がはらを乗のり越こえて

誠まことを明志あかしの湖うみを越こえ

黒野くろのケ原がはらに立籠たてこもり

白雪積はくせつめる山やまの邊へに

小ちひさき屋形やかたを構かまへつつ

孔雀の姫と改めて

往來の人を悉く

出づ言靈に和めつつ

又もや此處を立出て

松島竹島梅の島

波に浮べる琵琶の湖

梅ヶ香姫と諸共に

コーカス山に立籠る

ウラルの姫を言向けて

神の御國を開かむと

進み來りし折柄に

廣道別の宣傳使

天の太玉神司

瑞の御靈の御教に

服従へまつり今此處に

撞の御柱廻りあひ

鴛鴦の契の睦まじく

清き美しき顔色は

あな美しき好男子

あな美しき好男子

男の中の男子神

女の中の女神

夫婦の契いや深く

松の緑のスクスクと

榮え久しき神の代の

大御祭に仕へつつ

天の岩戸は長しへに

塞がであれや何時迄も

嗚呼^あ好^{えー}男子^{をとこ}好^{えー}男子^{をとこ}
 濡^ぬれて樂^{たの}しき新^に枕^{ひまくら}
 嗚呼^あ頼^{たの}母^も敷^しき我^{わが}宿^{すぐ}世^せ
 花^{はな}の蕾^{つぼみ}の何^{いつ}時^{まで}迄^{まで}も
 開^{ひら}き開^{ひら}いて散^ちるとても
 天津^{あまつ}御^み空^{そら}の星^{ほし}の如^{ごと}
 珍^{うづ}の御^み子^こをば産^うみなさむ
 天津^{あまつ}神^{かみ}達^{たち}國^{くに}津^つ神^{かみ}
 吾^{あが}三^み柱^{はしら}の大^{おほ}御^み神^{かみ}
 厚^{あつ}く守^{まも}らせ玉^{たま}へかし
 神^{かみ}の恵^{めぐ}みの露^{つゆ}に濡^ぬれ
 目^め出^で度^たかりける次^{しだい}第^{だい}なり
 嗚呼^あ麗^{うるは}しき汝^{なれ}が顔^{かほ}
 散^ちらであれかし常^{とこ}永^{とは}に
 堅^{かき}磐^は常^{とき}盤^はの實^みを結^{むす}べ
 互^{たがひ}に水^い火^きを合^あせつつ
 珍^{うづ}の御^み子^こをば産^うみなさむ
 珍^{うづ}の宮^{みや}居^ゐに現^あれませる
 夫^め婦^{をと}の契^{ちぎ}何^{いつ}時^{まで}迄^{まで}も
 深^{ふか}く恵^{めぐ}ませ玉^{たま}へかし

と歌^{うた}つて結^{けつ}婚^{こん}の式^{しき}は無^ぶ事^じに終^をりける。

(大正一一・三・四 舊二・六 岩田久太郎録)

第二十八章 二夫婦（四九五）

天之兒屋根命は神籬を左より廻り合ひ、結婚式の歌を歌ひ始むる。

仰げば高し久方の
青雲別けて三つ星の

御魂幸ふ靈鷲の
山に現はれ大稜威

高彦神と現はれて
黄金山に現れませる

埴安彦の開かれし
三五教の宣傳使

四方の國民救はむと
駱駝の背に跨りて

アシの沙漠を打渡り
廣き河瀬を横ぎりて

雪踏みさくみ霜を浴び
雨に風にと曝されて

噂に高きアーメニヤ
曲の猛びを鎮めむと

心の駒に鞭撻ちて
道もいそいそ膝栗毛

雪は眞白に積り居て
表は清き銀世界

中に包まる曲津見の

ウラルの彦やウラル姫

コーカス山に立籠り

心も猛く荒鐵の

地を護れる三柱の

神の宮居を太知りて

此世を詐る曲業を

巖と瑞との言靈に

向和さむと來るうち

ウラルの彦の目付役

雲霞の如く出で來り

有無を言はせず山腹の

七つの岩窟に投げ込まれ

心を千々に碎きつつ

案じ煩ふ折柄に

眠の神に襲はれて

暗き千尋の底深く

水を湛へし岩底に

落ちて凍ゆる折柄に

かすかに響く言靈の

光りに漸う力付き

眼を開き眺むれば

我目の上に【なよ】

竹の雪にたはみし如くなる

手弱女姿の竹野姫

詔る言靈に勇み立ち

力の限り岩壁を

傳ひて漸く姫の前

來る折りしも傍の
岩壁碎く物音に

驚き見詰むる間もあらず
天の頭槌打振ひ

岩の戸割りて出で來る
天の目一箇神司

此處に三人は巡り會ひ
宿世を語る折柄に

表に聞ゆる足音は
救ひの神か曲神か

様子如何にと聞き居れば
忽ち開く岩戸口

立出で見ればこは如何に
開く時世を松代姫

薰りゆかしき梅ヶ香姫の
貴命の宣傳使

石凝姥や時置師
八彦鴨彦諸共に

廻り會うたる優曇華の
花咲く春の嬉しさよ

心も勇み身も勇み
珍の宮居に來て見れば

ウラルの姫やヤツコス
神に従ふビツコスや

數多のクスの神迄が
宴會の蕙賑しく

列を亂して舞ひ狂ふ
時しもあれや松代姫

ふたりのおとどひはじめとし
二人の姉妹始めとし
あまの数の歌歌ひつつ
天の數歌歌ひつつ
こゑも涼しき宣傳歌
聲も涼しき宣傳歌
まががみは
詔らせ給へば曲神は
たまに打たれて雲霞
靈に打たれて雲霞
に逃げ行く後は春の日の
はなさく如き心地して
花咲く如き心地して
ここに三柱大御神
茲に三柱大御神
かむすさのを
神素盞鳴の大神の
おほみこと
大御言もて高彦は
梅ヶ香姫と末永く
うめががひめ
梅ヶ香姫と末永く
えんむす
縁を結びの神の前
ひだり右りの順序をば
ただめぐ
正しく巡り来て見れば
たがひ
互に合す顔と顔
かみひと
神か人かは白梅の
かを
薫り目出度き姫の前
ああつぐ
嗚呼美しきエー少女
ああうる
嗚呼美はしきエー少女
を
男と女の仲は千代八千代
あめ
天と地との睦合ひ
おもて
表と裏との水火合せ
かみ
神の鎮まる肉の宮
うづ
貴の御子をばさわわに
ゆつたまつばきしげ
湯津玉椿繁る如
う
生み足はして天地の
おほみたから
大百姓を生みなさむ

嗚呼エー少女エー少女
嗚呼美しき汝が顔

嗚呼美しき汝が胸
若やく胸を素手抱きて

手抱拱眞玉手の
玉手差纏き股長に

抱きて寝ねん豊の御酒
うまらに委曲に聞し召せ

嗚呼美はしき神の道
嗚呼美はしき神の御子

阿那爾夜志愛少女

梅ヶ香姫は又もや右より、
撞の御柱に倣へたる神籬を廻り始め、
歌ひ出したたり。

仰げば高し久方の
高天原の天使長

桃上彦の神司
末の娘と生れましし

妾は梅ヶ香姫の神
過つる春の上三日

年は二八の月の顔
花の姿を雨風に

曝しつ出し姉妹の
松竹梅の旅衣

聖地せいちを後あとに立たち出いでて エデンエデンの河かはを渡わたらむと

する時とき醜しこの里人さとびとに 悩なやまされつつある折をりに

月照彦つきてるひこの神靈魂かむみたま 名なも照彦てるひこと現あらはれて

松竹梅まつたけうめの姉妹おとどひを 父ちちのまします珍うづの國くに

珍うづの都みやこへ送おくりまし 親子夫婦おやこめをとは優曇華うどんげの

花咲はなさく春はるの喜よろこびに 七日七夜なぬかななよを暮くらしつつ

又またもや親おやこ子の生別いきわかれ 高砂島たかさごじまを遠近をちこちと

教をしへ傳つたふる折柄をりからに ハザマハザマの森もりに差さしかかり

途方とはうに暮くるる折柄をりからに 心こころ目め出でたき春山はるやまの

彦ひこの命みことに助たすけられ 茲こゝに姉妹おとどひさん三人にんは

端はしなく巡めぐり相生あひあひの 松代まつよの姫ひめや竹野たけのひめ姫ひめ

鬼武彦おにたけひこに救すくはれて 茲こゝに目め出で度たく目めの國くにを

越こえて黄泉よもつの島しまに着つき 黄泉戦よもついくさの戦たたかひに

大神津見おほかむづみと現あらはれし 桃ももの三人みたりの末すゑの子この

吾れは梅ヶ香姫の神あ うめが かひめ の かみ 金勝要の大神きんかつかね の おほかみの

依さしの儘よ さしの ままに今日けふの日にひ 撞つきの御柱みはしらめぐ巡りつつ

喜びよみこ勇いさみ來きて見みれば 譽ほまれも高たかき高たか彦ひこの

天あめの兒屋根こやねの神司かむつかさ 天津祝詞あまつのりとの太祝詞ふとのりと

詔のらせ玉たまへる言ことの葉はは 天津國あまつくに土つち搖ゆるぐごと

轟とどろき渡わたる大稜威おほみいつ 雄々ををしき聖きよき神かみの御子みこ

嗚呼あエー男をとこエー男をとこ 嗚呼あ美あうるはしき珍うづの御子みこ

神かみの命みことを畏かしこみて 幾いく久ひさしくも限かぎりなく

眞玉手玉手取交またまで たまで とりかはし 夫婦めをとのちぎり心安うらやすの

心安うらやす國くにと鳴なり響ひびく 汝なが言こと靈たまに百もも草ぐさも

靡なびき伏ふすらむ鴛鴦衾おしふすま 男をとこと女めの水い火きの末すゑ永ながく

變かはらせ給たまふ事ことなかれ 神かみを力ちからに眞心まごころを

杖つゑや柱はしらと頼たのみつつ 神かみ生うみ島しま生うみ人ひと生うみの

大神業おほかむわざに仕つかふべし 貴うづの御業みわざに仕つかふべし

嗚呼美はしき愛男子

花と月との夫婦連

月は圓かれ何時迄も

神の隨意々々榮えかし

嗚呼美はしき愛女

花は散らざれ幾千代も

花月（鼻突き）飯の面白く

神のまにまに榮えかし

と繰返し繰返し歌ひ終つて、首尾好く結婚の式を終了しける。

天之目一箇神は撞の三柱を中に置き、竹野姫と結婚の式を擧ぐ可く、二人は左

右より廻り會ひぬ。天之目一箇神の歌、

靈鷲山に生れませる

降居向伏す其きはみ

三大教を開かむと

歌ひて來る折柄に

五大教なる宣傳使

神の教を白雲の

白雲別と現はれて

神の造りし宣傳歌

エデンの川の岸の邊に

石凝神に巡り會ひ

經と緯との御教を

錦の機に織り成して

水も漏らさぬ三五の

神の教と改めつ

言靈詔れる折柄に

群がる人の中よりも

猛しき神の現はれて

竹切れ持ちて我眼

骨も徹れと突きにける

一つの眼を失ひし

我身の幸を嬉しみて

天と地とに仰ぎ伏し

恵みを稱ふ折柄に

またもや來る次の矢を

待つ間程なく東彦

神の命に救はれて

後に残りし一つ目の

神の命の宣傳使

神素盞鳴の大神の

依さしの儘にアルプスの

珍の鋼鐵掘出して

兩刃の劍打ち鍛へ

國の護りの神實と

仕へ奉りし今日の春

漸く心落着きて

又もや神の御仰せ

銅鋼鐵アルプスの

山に出でむとする時に

金勝きんかつ要かねの大神おほかみの縁えにしの絲いとに結むすばれて
 思おもひも掛かけぬ妹いもと背せの契ちぎり嬉うれしき神籬ひもろぎを
 左ひだり右みぎりを過あやまたず 巡めぐり來きたりて今いま此こ處こに
 人ひとに勝すぐれて轟すくすく々と 背せ長たけ延のびたる竹野たけのひめ姫め
 醜しこの魔風まかせをサラサラと さばくに敏さとき宣傳せんでん使し
 露つゆの滴したたる皆まなじりや 花はなの唇くちびる月の眉まゆ
 嗚呼ああエー女をみなエー女をみな かかる女をみなと末すゑ永ながく
 契ちぎる八や千ち代よの玉たま椿つばき 貴つづの劍つるぎを鍛きたふごと
 身み魂たまを鍛きたへ磨みがき上あげ 百もも世よも千ち代よも限かぎりなく
 水い火きと水い火きとを合あはせつつ 天あま津つ御み神かみや國くに津つ神かみ
 神かみの依よさしの神業かむわざに 仕つかふる身みこそ樂たのしけれ
 仕つかふる身みこそ樂たのしけれ

と歌うたひ終をはり、竹野たけのひめ姫めは神籬ひもろぎを右みぎより廻まはりながら、

桃上彦の珍の御子
 中に生れし竹野姫
 松と梅とに誘はれ
 朝日も智利の國を越え
 珍の都の父の前
 五月の姫に巡り會ひ
 言葉も籠る鴛鴦の
 逢ふ瀬を茲に樂しみつ
 御祖を後に三柱は
 歩みも輕きカルの原
 越えて荒浪打渡り
 依さしの儘に黄泉島
 大神津見と稱へられ
 又もや進む宣傳使
 松竹梅の三つ栗の
 父の行衛を尋ねつつ
 ヨルの湊を船出して
 大蛇の船に乗せられて
 思ひ掛けなき母神の
 親子五人は相見ての
 妹背の契親と子の
 又もや此家を伊都能賣の
 館を出でて遙々と
 ハザマの國や目の國を
 日の出神や木の花姫の
 桃の實魂と現はれて
 黄金山を後に見て
 鬼や大蛇や曲津見の

出るを幸ひ言向けつ
心の色は紅葉の

明志の湖を打渡り
雪は積めども黒野原

言靈響く琵琶の湖
松竹梅の三つの島

我姉妹と振り返り
見返りながら寒風に

吹かれて漸うコーカスの
雪の山路にかかる時

顔色黒き牛雲の
捕手の群に取巻かれ

岩窟の中に入れられて
出るに出られぬ籠の鳥

時世時節を待つ間に
思ひも掛けぬ姉妹や

石凝姥の宣傳使
力の強い時さまを

連れて此場に進み来る
天の岩戸に潜みたる

竹野の姫は忽ちに
此場に現はれ北光の

眼一つの神様と
今一柱三柱の

皇大神を祭りたる
コーカス山の山の尾の

顯しき國の宮の前
ウラルの姫の曲事を

伊吹拂ひて言靈の息吹き放てば雲霧と

なりて逃げ行く可笑さよ胸の思ひも晴れ渡り

此處に三柱大神の御靈を仕へ奉る時

珍の神實造りたる兩刃の劍夜晝に

鍛へに鍛へし北光の目一箇神の功績に

心の空は何となく三千年の桃の花

一度に開きし思ひしてかかる目出たき彦神を

一目見たやと思ふ内一目の神は現はれぬ

是れぞ名に負ふ北光の神の命と聞きし時

一目見るより村肝のかかる男神と末永く

契を結ぶ身とならばたとへ根の國底の國

魔神の猛ぶ唐野尾も何の物かはクス野原

現はれ出でし一つ目の大化物の姿より

千重も八千重も勝りたる姿優れし男振り

假令眼は一つでも 人目に觸れぬ靈の目の

數多保たせ給ふなる 鍛へに鍛へし北光の

劍の御魂や都牟刈の 四方の醜草薙ぎ拂ふ

神の姿ぞ雄々しけれ 嗚呼エー男子エー男

眺めも盡きじ醜人は 竹野の姫の竹の先

グサリと突いた目の光り 光り輝き北光彦の

竹野の姫が附添うて 汝が命の神業を

側目も振らず助くべし 目出た目出たの 一つ目の

北光彦の神司 天の目一箇神様に

竹野の姫の起臥しに 汝が身の妻と成り鳴りて

心の竹の有文を 君の御前に捧ぐべし

嗚呼エー男子エー男子 嗚呼エー女エー女

男女の睦び合ひ 竹野林の何時迄も

榮え目出度き松の御代 五六七の代迄も變らざれ

五六七の代迄も變らざれ[□]

と歌ひ納め、三組の結婚式は目出度く終結を告げける。後は酒宴に移り、陪席の神々は面白き歌を詠み、此結婚を賑しにける。

(大正一一・三・四 舊二・六 谷村眞友録)

第二九章 千秋樂 (四九六)

顯國玉の宮の祭典は、恙なく神靈鎮座せられ、次で男女三組の結婚式は行はれた。石凝姥神は此祭典慶事を祝すべく立つて歌ひ始めたり。

石凝姥神 東雲の空別昇る朝日子の
光眩ゆき神の道
西北南東彦 石凝姥の宣傳使

黄金山を立出でて 栗毛の駒にウチの河
 鞭ち渡る膝栗毛 クス野ケ原や明志湖
 雪積む野邊を踏みさくみ 言靈清き琵琶の湖
 渡りて此處に梅ケ香の 姫の命や説明可笑
 神の命と諸共に 雲に抜き出たコーカスの
 山の砦に來て見れば 大氣津姫と現れませる
 喰物着物住む家に 奢り極めし此深山
 ウラルの姫に服従ひし 百の八王ヒツコスや
 酒の神まで寄り集ひ 顯の國の宮の前
 三柱神を齋ひつつ 饗宴の酒に酔癡れて
 節も亂れし酒歌を 唄ひ狂へる折柄に
 松竹梅の宣傳使 天之兒屋根や太玉の
 神の命を始めとし 月雪花や目一箇の
 神諸共に宮の前 來りて詔れる言靈に

ウラルの姫は雲霞くもがすみ

後を暗ましアームニヤあとくら

大空高く逃げて行くおほぞらたかに

此處に再び大宮のここふたたびおほみや

庭を清めて嚴かににはきよおごそ

三柱神の祭典みはしらがみまつりごと

仕へ奉りて太祝詞つかまつふとのりと

稱へ奉りて頼母しくたたまつたのも

直會神酒に村肝のなほらひみきむらきも

心を洗ひ清めつつこころあらきよ

歡び盡す折柄によろこつくをりから

神素盞鳴の大神のかむすさのをおほがみ

許しの儘に松竹のゆるままたけ

姫の命の御慶事ひめみことおんけいじ

天之兒屋根や太玉やあめのこやねふとたま

天之目一箇神司あめのまひとつかむづかさ

永遠に結びし妹と背のとほむすいもせ

珍の御儀式ぞ畏けれうづみのおのりかしこ

ア、三夫婦の神達よみめをとかみたち

神の恵みをコーカスのかみめぐ

山より高く琵琶明志やまたかたかびはあかし

湖の底より猶深くうみそこなほふか

授かりまして幾千代もさづいくちよ

色は褪せざれ萬代もいろあよろづよ

色はさめざれ押竝べていろおしな

五六七の御代の樂しさをみいろくのみよたの

三夫婦共に松代姫みめをとともまつよひめ

心も開く梅ヶ香のこころひらうめがか

姫の命や世に猛き

曲言向けし竹野姫

北光神や高彦の

神の御稜威を天が下

四方に廣道別の神

此世を包む烏羽玉の

雲霧四方に掻分けて

神の教を中津國

海の内外に弘めかし

神が表に現はれて

須彌仙山に腰を掛け

此世を守り給ふごと

心の駒の手綱執り

神の御教を過たず

安の河原の永久に

流れて清き玉の湖

海より深き父母の

恵みに勝る神の恩

山より高き神の稜威

コーカス山はまだ愚

天教地教の山よりも

功績を高く現はして

神の御國の太柱

千木高知りて仕へませ

日は照る光る月は盈つ

みづの身魂の三巴

薨も清く照る如く

遠き近きの國原を

救うて通れ汝が命

我れは石凝姥の神

堅磐常盤に村肝の

心固めて皇神の

御稜威を廣く増鏡

鏡の面を見はるかし

三人夫婦の行末を

守らせ給へ百の神

心盡しの有丈を

傾け願ひ奉る

百代も千代も萬代も

松の操の色褪せず

枯れて松葉の二人連

力をあはせ村肝の

心を神に任せつつ

假令山川どよむとも

天津國土揺ぐとも

青山菱れ海河は

涸れ干す事のあるとて

永遠に變るな妹と脊の

産靈の道の何時までも

鴛鴦の契の何處までも

百年千年萬歳

萬の花に魁けて

薫る梅ヶ香姫の如

色香ゆかしく語りませ

色香ゆかしく渡りませ

戀しき妻に手を引かれ

黄金の橋を渡會の
松竹梅の姉妹が
揃ひも揃ふ今日の宵
宵に結し喜悅は
神の守護の彌深き
千尋の海の底までも
届かざらめや何處迄も
神の恵みの尊けれ
神の恵みの尊けれ

と歌ひ終つて元の座に就きぬ。

時置師神と現れたる鐵谷村の時公は、
又もや立つて祝ひの歌を詠み始めたり。
その歌、

三五教の宣傳使
松竹梅の三柱は

花の春をば仇に越え
夏の眞中となりし身の
花は散れども遅櫻
山は青々葉櫻の
いよいよ開く返り咲
三五教と聞いた時

縁えんの遅おそいは當あたり然まへ 嫁とつぎの道みちは何時いつ迄までも
 なさらぬ方かたと思おもて居ゐた 人ひとは見みかけに依よらぬもの
 色いろよき夫をつとを松まつ代よ姫ひめ 永ながき月つき日ひの浮うき節ふしに
 待まちに待まつたる縁えんの絲いと 今日けふは愈いよいよ結むすび昆こ布ぶ
 摘つまみ肴さかなの切きり鯛すめ 名なさへ粹すめなる梅うめヶ香がの
 姫ひめの命みことの肝きも玉たまは 此こ處こに現あらはれ高たか彦ひこの
 神かみの命みことの妻つまとなり いよいよ三み人たりの姉おとど妹ひは
 神かみに貰もらうた雨あめに濡ぬれ 水みづも漏もらさぬ蒸むし衾ふすま
 小さ夜よ具ぐが下したにたくづぬの 白しろきただむき玉たまの手てを
 互たがひに抱いだきさし卷まきて いをしましませ腿もも長ながに
 豊とよの神かみ酒みをばきこし召めし いよいよ今日けふから二ふた柱はしら
 神かみの祝いはひの餅もち搗ついて 子こ餅もちもたんと拵こしらへて
 天あまつ國くに土つち轟とろかし 天てんに輝かがく星ほしの如ごと
 濱はまの眞ま砂さの數かず多おほく 青あを人ひと草くさの種たねをまけ

三夫婦揃うた世の中に
東雲別の東彦

石凝姥の宣傳使
時公さまや八彦や

鴨彦さまの顔の色
峠の下の小僧の様に

上り下りの客人の
姿眺めて指嚙むで

蜥蜴の様な面をして
恨めし相に眺めいる

ホんに芽出たいお目出度い
心をかがみの時さまは

鏡餅ではなけれども
滅多に妬きはせぬ程に

必ず案じて下さるな
牛は牛連れ馬は馬

八公は八公鴨は鴨
八つの足をばさし巻いて

キウと吸いつく蛸坊主
チンチン鴨の神樂舞

上を下へと戦して
神に仕ふる時も来る

ア、三柱の夫婦神
石凝姥の石の如

堅く誓ひて離れざれ
時公八公鴨公の

眞心籠めて神の前
偏に祈り奉る

偏ひとへに祈いのり奉たてまつる」

と歌うたひ終をはり、大おほくち口くちを開あけて

「アツハ、、、、」

と笑わらひ轉こける。一いちどう同どうは時とき置お師か神しのの手てつき身み振ぶりの可を笑かしさに、天てん地ちも揺ゆるぐ許ばり笑わらひ崩くづれけり。秋あきづき月ひめ姫ひめはスツクと立たつて、長ちやうしう袖しうしとやかに祝しゆくか歌かを歌うたひ舞まふ。

「天あめと地つちとに三あ五なの

道みちを教をしふる宣せん傳でん使し

三さんご五ごの月つきの澄すみ渡わたる

秋あきづき月ひめ姫ひめの空そら清きよく

今けふ日ふの喜よろこび幾いくちよ千ちよ代よも

松まつ竹たけ梅うめの何い時つまで

心こころに掛かけて忘わすれまじ

松まつは千ちとせ歳さいの色いろ深ふかく

竹たけの姿すがたの末すゑ永ながく

梅うめの蒼つばきの香かしく

一いちど度どに開ひらく神かみの舞まひ

鶴つるは千ちとせ歳さいと舞まひ納なめ

龜かめは萬よろづよ代うた歌うたふなり

千ちとせ歳さいの鶴つるや萬よろづよ代うたの

龜かめの齡よはひを保たもちつつ
 天地てんちと共にとも永久とこしへに
 月日つきひと共にとも限りなく
 此世このよの續つづく其限そのかぎり
 夫婦めをとの中なかは睦むつまじく
 心こころを協あはせ神國かみくにに
 盡つくさせ給たまへや三柱みはしらの
 神かみの命みことの夫婦めをとづれ連
 秋月あきづき姫ひめのいと圓まるく
 家いへも治をさまり身みも魂たまも
 治をさまり清きよく照てり渡わたり
 神かみの御み水い火きを受う繼けぎて
 御み子こ澤さは々に生うみなして
 神かみの柱はしらを經たて緯よこの
 錦にしきの機はたの神かみの教のり
 宣のるも涼すずしき神かみ嘉言かむよごと
 三柱みはしら神かみの大前おほまへに
 君きみが千ちとせ歳せを壽ほぎまつる
 君きみが千ちとせを壽ほぎまつる
 『

と歌うたつて元もとの座ざに就つきぬ。深雪みゆき姫ひめは又またもや立たち上あがり長袖ちやうしうしとやかに歌うたひ舞まふ。

三柱みはしら神かみの三みつ身み魂たま

棟むねに輝かがく三みつ巴どもゑ

三夫婦揃ふ今日の宵
見ても見飽かぬ妖艶姿

三葉の彦の又の御名
天の太玉神司

青雲別の高彦が
天之兒屋根と現はれて

白雲別けて北光の
天の目一箇神司

鴛鴦の契を今此處に
結の蕙深雪姫

夫婦の仲も睦じく
互に心を相生の

松も深雪の友白髪
尉と姥との末永く

高砂島にあらねども
御稜威も高きコーカスの

山に鎮まる三柱の
神の御前に妹と背の

契を結ぶ金の神
神の恵みの幸はひて

撞の御柱右左
巡り會ひつつ愛男

愛女よと宣らせつつ
鵲鴿の教畏みて

學ばせ給ふゆかしさよ
芽出度儀式を深雪姫

黄金世界銀世界
月日は清く照り亘る

神かみの光ひかりを身みに浴あびて

千代ちよも八千代やちよも榮さかえませ

幾千代いくちよまでも松竹まつたけの

色香いろかも褪あせず咲さき匂にほふ

梅うめヶ香か姫ひめのあだ姿すがた

月つきの鏡かがみに美うるはしく

尊たふとき御子みこを望月もちづきの

百千ももちよろづ萬ばんに生うみなして

神かみの御水みい火きの神業かむわざに

仕つかへましませ三柱みはしらの

妹背いもせの仲なかは吉野川よしのがは

流ながれも清きよきみづ身魂みたま

神素かむす蓋さ鳴の大神おほかみの

惠めぐみの露つゆにうるほひて

色いろも褪あせざれ變かはらざれ

たとへ天地てんちは變かはるとも

夫婦めをとの仲なかは何時いつ迄まで

彌いや次つぎ々に梅つがの木きの

孫子まごこの世よ迄まで榮さかえませ

孫子まごこの世よ迄まで榮さかえませ

深雪みゆきの姫ひめが眞心まごころを

神かみの御前みまへに捧ささげつつ

三柱みはしら神かみの行末ゆくすゑを

畏かしこみ畏かしこみ壽ほぎまつる

畏かしこみ畏かしこみ祝ほぎまつる』

と歌ひ終り元の座に就く。橘姫は又もや立上り、
聲も涼しく祝歌を歌ふ。其の歌、

□ 秋月姫の空晴れて

深雪も積る銀世界

春山彦の珍の子と

生れ出でたる姉妹は

戀しき父の館をば

橘姫の姉妹が

三五教を開かむと

神のまにまに進み來る

雪積む野邊を右左

寒けき風に梳り

山河越えてコーカスの

三柱神の御前に

橘姫の喜びは

色も目出度き松代姫

薰ゆかしき梅ケ香姫の

貴の命や竹野姫

神の詔勅を畏みて

人目の關の隔てなく

妹背の契結びます

芽出度き今日の新筵

神酒は甕の瓶高しりて

饗宴の蓆賑しく

夜は更けわたる戌の刻

亥の刻過て腿長に

各も各もの子の刻や

丑寅神の御守護

嬉し嬉しの花も咲く

心の卯さも辰の刻

巳ぢかき春の夢醒めて

午く納まる此縁

瑞の身魂の未申

互に杯取り交はし

悪魔もいぬや亥の時刻

夜半の嵐も収まりて

宿世行末物語り

睦ばせ給ふ閒もあらず

青垣山に鳴く鳥

雉子は動よむ鶏は鳴く

雉子どよむな鶏鳴くな

今朝は鳥も啞となれ

鴛鴦の衾の樂し夜を

遮る勿れ今日の朝

東の山に日は昇り

晝より明かくなるとても

今日の一日は烏羽玉の

闇にてあれや暗となれ

暗の岩戸を押開き

互に含笑む顔と顔

岩戸の前に橘の

姫の命の太祝詞

聞ゆる迄は三柱の

神も眠を覺まさまじ

明^あけて悔^くしき今日^けの日は 龍^{たつ}の宮居^{みやゐ}の姫神^{ひめがみ}の

御手^{みて}より受^{うけ}し玉手箱^{たまてばこ} ア、恨^{うら}めしや浦島^{うらしま}の

年^{とし}も取^とらずに何^い時までも 若^{わか}やぐ胸^{むね}をすだ抱^だきて

夫婦^{めをと}の中^{なか}は睦^{むつ}び合^あひ 眞^{また}玉手^{たまて}玉手^{たまて}携^{たづさ}へて

神^{かみ}の御業^{みわざ}を務^{つと}めよや 結^{むす}びの神^{かみ}と聞^{きこ}えたる

金勝^{きんかつ}要^{かね}の大御神^{おほみかみ} 山^{やま}河^{かは}動^どよみ國土^{くぬち}揺^ゆり

海^{うみ}は涸^かれ干^ほす世^よありとも 夫^{めをと}婦^なの中^{なか}は何^い時までも

月^{つき}日^ひと共^{とも}に變^{かは}らざれ 月^{つき}日^ひと共^{とも}に永^{とこ}久^{しへ}に

榮^{さか}えましませ何^い時^つ迄^{まで}も 橘^{たちばな}姫^{ひめ}が眞^ま心^{こころ}を

こめて御前^{みまへ}に緒^{ひれ}伏^ふしつ 畏^{おそ}れ慎^{つつし}み願^ねぎまつる

畏^{おそ}れかしこみ壽^ほぎまつる

と歌^{うた}つて元^{もと}の座^ざに就^つきぬ。

時^{とき}公^{こう}「サアサア、芽^め出^で度^たく婚^{こん}姻^{いん}の式^{しき}も濟^すみ、三^み夫^{ふう}婦^{ふう}の濃^{のう}艶^{えん}なる宣^{のり}詞^{ごと}も聞^きかして貰^{もら}

つた。加ふるに月雪花の三柱神の祝ひの詞、時さまも一寸仲間入りをさして貰つた。石凝姥神様の御祝歌は一寸感心した。サアサア八さま、鴨さま、神酒ばつかり頂いて居ても、藝無し猿では巾が利かない。何でも構はぬ、芽出たい事を歌つたり歌つたり

八公「時さま、何でもええか」

時公「芽出度い事を歌つたがよからう」

八公「笑うて呉れな、わしの歌は拙劣だから」

と云ひ乍ら、又ツと立つて歌ひ始めた。

八公「今日は如何なる吉日か 大氣津姫は逃げて行く」

コーカス山の貴の宮 三柱神のお祭に

みんな揃うて酒に酔ひ ヨイヨイヨイと舞狂ふ

松竹梅の宣傳使 月雪花の乙女達

北光神や高彦や 心の太い太玉の

神の命がヒヨいと来て 夢に牡丹餅食た様に

松竹梅の宣傳使 女房に持つて嬉しかる

この八さまも嬉しいぞ ヤットコドツコイ、ドツコイナ

それに引替へ氣の毒な 石凝姥の宣傳使

身體の大きい時さまは ほつとけぼりを喰はされて

見るも憐れな鰥鳥 とりつく島もないじやくり

時さま許りか八さまも 鴨さままでが指銜へ

青い顔して淋しそに こんな馬鹿氣た事はない

大勢の前でてらされて 茹蛸見たよな顔をして

妬きはせないが日に焦けた 黒い顔してくすぶつて

勘定に合はぬ此仕末 俺も男ぢや何時か又

綺麗な女房を持つてやる 其ときや皆さま見てお呉れ

小野の小町か照手の姫か 天津乙女か乙姫さまが

跣で逃げ出す素的な奴を 貰ふか貰はぬかそら知らぬ

知らぬが佛神心ほとけかみこころ 何時かはカミの厄介やくかいに
 なつて喜ぶ時よろこぶときも来る オイ時公ときこうよ鴨公かもこうよ
 俺おれの胸先むねさきトキトキと 何なんぢや知らぬが轟とどろいた
 足あしは知らぬに鴨かも々と 震ふるひあがつて氣きに喰くはぬ
 淡白あつさり焼やいた蛤はまぐりの 美味うまい汁しる吸すふ時は何時いつ
 何時いつか何時いつかと松代まつよひめ姫ひめ 松まつかひあつて太玉ふとたまの
 神かみの命みことの妻つまとなり 角つのを隠かくした綿帽わたぼうし子こ
 姿すがたかくして鳴なく鳥とりは 山時やまほととぎす鳥だけ丈だけぢやない
 此處ここにも一人ひとりや三人さんにんは 泣ないて居ゐるかも知しれはせぬ
 千秋せんしゅう萬歲ばんざい末すゑ永ながう 松竹梅まつたけうめのお姫ひめさま
 夫婦ふうふ仲なか良よく暮くらしやんせ 心こころの堅かたき宣傳せんてん使し
 夫をとこを持つて忽たちまちに 心こころ緩ゆるみて神かみの道みち
 必かならず粗末そまつにせぬがよい それ丈だけわたしが頼たのみ置おく
 ア、三柱みはしらの神かみさまへ 此この三人さんにんの夫婦ふうふ仲なか

水も漏らさず末永う

添はしてやつて下さんせ

これが八公の願なり

これが八公の願なり

時公は大口を開けて、

「アハ、ハ、ハ、ハ」と、又もや笑ひ轉けて腹を抱へる。

八公「オイ時公、何で笑ふか、人をあまり馬鹿にしよまいぞ。お前は拙劣でもよいと云つただらう、拙な歌が却つて面白いのだ。併し乍らお前の歌もあまり立派

な作ではなかつた。擔うたら棒が折れる様なものだ」

時公「コラコラ、棒が折れるとは何だ。宣り直さぬか」

八公「それでも、是丈歌ふのには棒所か、随分骨が折れたのだよ。アハ、ハ、ハ、ハ」

時公「サア鴨公の番だ。どうせ碌な事は云やせまいが、貴様の偽らぬ心を歌つて

見よ」

鴨公「ヨシヨシ、俺も男だ。氣張つてフーフーと息繼ぎ乍らやつて見る。良かつ

たら、メヨト喝采するのだぞ」

時公ときこう「ヨシヨシ、【よし】と云つても養子やうしむこ婿むこぢやないぞ」
鴨公かもこうの歌うた、

明志あかしの湖うみから従ついて來きて 雪ゆきの路みちをばザクザクと

黒野くろのヶ原がはらに行やつて來きた 孔雀くじやくの姫ひめが人ひと喰くうと

聞きいてビツクリ會あうて見みりや 十五じふごの月つきの樣やうな顔かほ

案あんに相違さうゐの松代まつよひめ姫ひめ ウラルの教をしへを振棄ふりすてて

三五あななひけつ教けつに寢返ねがへりを 打うつて又またもや琵琶びばの湖うみ

烈はげしき風かぜに曝さらされて 汐干しほひの丸まるの潮しほを浴あび

牛馬うしうま鹿しか虎とら四よつ人たりの 目附めつけの神かみに送おくられて

コゝカス山ざんに來きて見みれば 思おもひがけなき神祭かむまつり

八王やつくすヒツコス酒くすの神かみ 祝いはひの酒さけに醉ゑひつぶ潰つぶれ

何處どこも彼處かしこも泥どろまぶれ ウラルの姫ひめも泥どろの衣きぬ

心こころの泥どろを吐はき出だして うまい事ことづくめに神かみの前まへ

ツベコベほざく其時に 松竹梅を始めとし

鴨彦さまも共々に 三五教の宣傳歌

歌つて見ればアラ不思議 忽ち鬼女となり變り

黒雲起して逃げ去つた 後に尊き神祭

祝の酒をグツと呑み 酔がまはつた最中に

皇大神の神勅 松竹梅の三柱に

婿を貰へと仰せられ 開いたる口に牡丹餅を

詰めたる様に一口に ウンと呑み込む男方

三人揃うて妹と背の 芽出度い杯三々九度

何方も此方も歌を詠み 品姿能く踊り舞ひ狂ふ

我れは素より藝無し猿 何んにも知らぬヨウせぬと

斷る譯には行かないで 猿の人眞似やつて見よう

猿が三疋飛んで来て 婚禮したのはサル昔

昔々の大昔 その又昔の昔から

神かみの結むすんだ因縁いんねんで 夫婦ふうふうになつたに違ちがひない

夫婦ふうふうは天地てんちにたとへられ 山やまと海うみとに比くらべられ

神かみ生うみ國くに生うみ島しま生うみの 道みちを開ひらきし伊奘諾いざなぎの

神かみの命みことの初はじめてし 美斗みと能麻具のまぐ波比妹背はひいもとせの

今けふの芽出度めでたい此祝このいはひ 此喜このよろこびはここよりは

外ほかへはやらじ やらざれと 祈いのる眞心まごころ神かみの前まへ

金勝きんかつ要かねの大御神おほみかみ 國治くにはる立たちの大御神おほみかみ

神素盞かむす鳴さのの大御神おほみかみ 三夫婦みめをと揃そろうて縁結えんむすぶ

こんな芽出度めでたい事ことはない どうぞわたしも一日いちにちも

早はやく結むすんで下くださんせ 家いえをば治をさめ國治くにをさめ

心治こころをさまる夫婦中ふうふうなか 落おちて離はなれぬ枯松葉かれまつば

二人ふたりの水い火きは相生あひおひの 待まちに待まつたる嫁よめ貰もらひ

貰もらひ喜よろこび貰もらひ泣なき ないて明志あかしや琵琶びばの湖うみ

深ふかき契ちぎりを何時いつまでも 續つづかせられよ三柱みはしらの

聞くも芽出度い夫婦仲
仲善く暮せ何時迄も

天に輝く星の如
濱の眞砂の數多く

御子を生め生め地のの上に
所狭き迄生みおとせ

落ちて松葉の二人連れ
三人四人夫婦仲

三人四人鰥仲
盈つれば虧くる世の慣ひ

御空の月の影を見よ
何時も満月キラキラと

明るく暮せ夫婦連れ
連添ふ妻を振棄てな

妻も夫に尻ふるな
神の恵みの雨に濡れ

何時も青々稚翠
若やく姿永久に

年は取るなよ皺よせな
寄せては返す荒浪の

濤も凧げ凧げ春の海
生み落したる子寶は

養み育て天地の
神の御用に立てて呉れ

くれぐれ頼む鴨公の
是が一生の願ぞやと

願掛卷神の前
神の恵みの幸はひて

夫婦 <small>めをと</small> の仲 <small>なか</small> は睦 <small>むつま</small> じく	八千代 <small>やちよ</small> の春 <small>はる</small> の玉椿 <small>たまつばき</small>
榮 <small>さか</small> えに榮 <small>さか</small> えよ松代 <small>まつよひめ</small> 姫	梅 <small>うめ</small> ヶ香 <small>か</small> 姫 <small>ひめ</small> よ竹野 <small>たけのひめ</small> 姫
天之目 <small>あめのま</small> 一箇 <small>ひとつ</small> 太玉 <small>ふとたま</small> や	天之兒 <small>あめのこ</small> 屋根 <small>やね</small> の神司 <small>かむつかさ</small>
神 <small>かみ</small> の御前 <small>みまへ</small> に太祝 <small>ふとのり</small> 詞 <small>こと</small>	稱 <small>た</small> へ奉 <small>まつ</small> るぞ尊 <small>たふと</small> けれ
稱 <small>た</small> へ奉 <small>まつ</small> るぞ畏 <small>かしこ</small> けれ	畏 <small>かしこ</small> き神 <small>かみ</small> の御教 <small>みをしへ</small> を
夫婦 <small>めをと</small> 力を協 <small>あは</small> せ合 <small>あ</small> ひ	海 <small>うみ</small> の内 <small>うち</small> 外 <small>と</small> に隈 <small>くま</small> もなく
輝 <small>かがや</small> き渡 <small>わた</small> せ神 <small>かみ</small> の道 <small>みち</small>	輝 <small>かがや</small> き渡 <small>わた</small> せ神 <small>かみ</small> の教 <small>のり</small>

と歌うたひ終をはり座ざに着つきぬ。コーカス山ざんの神祭かむまつり、瑞みづの身魂みたまに因縁ゆかりある三柱みはしら神かみの婚姻こんいんは
 茲こゝに芽出めで度たく千秋樂せんしゅうらくを告つげにける。

(大正一一・三・四 舊二・六 松村眞澄録)

(昭和一〇・二・一九 王仁校正)

〵
〵
〵
〵
〵
〵
〵
〵

靈界物語 第一卷 靈主體從 戌の卷
終り